
暁の使者

花籠 満月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暁の使者

【Nコード】

N1314B

【作者名】

花籠 満月

【あらすじ】

セリテア大陸の三分の一を占める大国アーティノキア。主人公・リムは貴族階級の生まれだ。何不自由なく育ち、出世街道を歩んでいた。だが、平穏な生活は突然終わりを告げる。大きな何かがリムを、そしてアーティノキアを飲み込もうとしている。その背景には一冊の本と、ある一族の影があった。

空が狭くなった。

街に足を踏み入れて最初に感じたのはそれだった。

王城に通じる目抜き通りを歩いていたリムは不意に足を止めて空を仰いだ。

通りの左右に並ぶ背の高い建物が、視界を塞ぐように迫ってくる。圧迫感を感じて、リムは視線を正面に戻すと小さく息をついた。

たった2年この街を離れていたただけなのに、ずいぶん様変わりしてしまった。

以前はもつと広々としていた気がしたのに。

建て増しに建て増しを重ねたかのような不格好な建物が目に付く。

しかも、上質な作りとは言い難い。

これが大陸に名を馳せる大国の王都だと思つと、リムの胸に苦い思いがこみ上げた。

何故、国はこの状況を静観しているのだろう。

自国の現状を、王は知らないのか。

誰も、国王に進言することはないのだろうか。

リムの表情が自然、険しくなる。

目抜き通りをまっすぐ見やれば、遙かに王城がかすんで見える。

その城内には、玉座にはちゃんと王が居るはずなのに。

国王の目には、いったい何が映っているのか――

「お兄さん、どこから来たの？ 王都――イースは初めて？」

声がかけられた。一瞬の後、『お兄さん』というのが自分を指している事に気付いてリムは振り返った。

「そう見えるかな？」

「うん。違った？」

につこり笑って、少年が歩み寄ってくる。
まだ幼い。

あえて尋ねることはしなかったが、年齢はおそらく両手で足りる程度でしかないだろう。

身なりはそれなりにきちんとしていたが、着古した服を身に付けているという感じが強い。

人好きのするあどけない少年に見えるが、その瞳には鋭い光が見え隠れしていた。

「もともとはこの住人だ。戻ってくるのは2年ぶりになるな」

「へえ、そうなんだ。てつきりソムタイあたりから来た旅の人だと思っただよ」

「そんなに田舎者に見えるか？」

リムは胸の下辺りにある少年の顔を見下ろして苦笑した。

ソムタイは大陸の北の海に浮かぶ小さな島国だ。

そしてソムタイの更に北には何もなく大海原が広がるばかり、というのが大陸人の認識だった。国交もないため、未開の地と信じている者も少なくない。

「だって、さつきからずっときよろしてたろ。そんなに建物が珍しいのかと思ってさ」

「確かに、珍しいな。ずいぶんと変わったものだ。記憶にあるイーロスと同じ街だとは、俄かには信じがたいな」

「そうなんだ？ 俺が物心ついたときには、もうこんな感じだったと思うけど」

「ということは、変化はずいぶん前からって事——うわっ」

どすん、と衝撃があった。何か柔らかいものが背中にぶつかったという感じで痛みはない。

顔を顰めて背後を振り返ったリムのすぐ横を、これまた小さな子供がすり抜けて行く。

「そんなとこで立ち話したら通行の邪魔！」

あっという間の出来事だった。ぶつかってきた子供は速度を落と

すことなく駆け去り、気がついてみれば先程まで話をしていた少年も、既に姿がない。

一瞬考えて、リムは懷に手をやった。

「やはり、そうか」

あるはずの財布がなくなっていた。

ぶつかってきた子供に気をとられている隙に、少年が掏り取ったのだろう。

リムは小さく息をついた。

だが、それだけだった。

見失ってしまった以上、わざわざ追うことに意味などないからだ。

盗られてしまった物は今更仕方がない。

少年らの眼光の鋭さに気づいていたのに、気を抜いていた自分にも落ち度はあった。

それにしても――

小さな子供がスリを働く。その意味を考えると、嫌な気分が胸を染めた。

2年。

それだけの短期間で、驚く程治安が悪化している。治安の悪化はすなわち国が荒れている事を示す。

セリテア大陸の三分の一を占める大国アーティノキア。その王都だというのに、この有様だ。

王都の様相は国のあり方を示す。国の基盤そのものが傾きかけているというのか。

少年たちが駆け去った方を睨みつけるようにして考え込んでいると、視界の隅に見慣れた軍装が映った。どうやら先程の出来事を見ていたらしい。兵士が一人、薄い笑みを浮かべながらこちらに歩み寄って来た。

「大丈夫ですか？ 街の子供たちが最近悪さを働くので気をつけてはいるのですが、逃げ足が速くて」

「・・・・・・・・」

「何か？」

「あんた、あの子達を捕まえる気がないだろう」

「いや、そんな事は」

「別に良いさ。責めているわけでもない。ああしなければ生きていけないのだろう。食うために盗む。許されることではないが、正すべきは世のありようの方だな」

「は、はぁ・・・」

下級兵士らしいその男は不審そうな色を浮かべてリムを見下ろしてきた。

リムは標準的な人と比べて、ずいぶんと小柄で細い。故に実年齢よりも若く見られがちだった。

これ以上成長するという年でもないため、見おろされるのは仕方ないと思っているが、この兵士の、なんとなく尊大な態度は気に障った。

あきらかにリムを侮っている。

むっとしたが、ここで言い争っても仕方がない。これ以上この男と話をする気がないリムは再び歩き出そうとした。その腕を男が掴む。

「掏られたことは気にしていない。幸い、家族がこの街に住んでいる。そもそも、大した金額が入っていた訳でもないんだ。だから、その手を離してもらえないか」

「そういう訳にはいかないんですよ。こちらには市街の治安を守る義務があるのでね。被害にあわれたと言うことで一応一緒に来てもらえますか」

「行くとは、何処へ？」

「イーロス城です」

「はぁ？」

「王城で被害届を出していただきます。それを元に我々が調査を――」

「必要ない」

「ですがそれが決まりでして」

うんざりしながらリムは肩を竦めた。届出義務があることは彼も良く知っている。だが長旅で疲れていた。どうせ届け出てもあの子供たちは捕まらないのだろう。だったら時間の無駄だ。早く帰って休みたかった。

だが、言ったところで通じないのは明らかだった。

となれば、採るべき方法はたった一つ。力ずくで振り払うのみ。

華奢に見えてもそれなりに鍛えてはいる。思ったより簡単に手は外れた。が、立ち去ることはかなわなかった。

行く手を遮るようにして、別の男が立ちふさがったのだ。着崩しではいたがこちらもしっかりに軍装だった。

先程の男より優に頭一つは大きい。体つきもしつかりしていて、さすがのリムもこれには立ち止まらざるを得なかった。

お世辞にも柄が良いとは言えない男だった。

街の治安がこんな兵士によって守られているとは、出来の悪い冗談だと思えない。

「お前さん、あいつらがスリだってわかっていたんじゃないのか？」

「だったらどうだと言った。そっちこそ、俺があの子と話している間中ずっと物陰から覗いていたろう。知っているのなら何故捕まえない？」

「ほう、気付いていたのか。これは驚いた。あいつ等には仲間が多くいてな。たった二人捕まえたところで何も変わりはないのさ」

「泳がせて隠れ家を探り一気に片を付けようって？ あんたたちじや10年かけても無理だと思っね」

「言っねえ」

男はリムのいやみにも顔色一つ変えなかった。どうやら本当に捕まえる気がないのかもしれない。

リムはちらりと男の襟——正確にはマントの留め金——に目をや

った。

「狼の意匠——部隊長か」

「ああ、歩兵隊長だ。よく知っているな」

男は少々驚いたように頷いた。

先程の少年と同様、田舎者だとも思っていたのだろうか。リムの表情が、更に不機嫌そうに歪んだ。

「そんなもの襟を見ればすぐにわかるじゃないか」

「ふむ——お前さん、名前は？」

「リム」

「それだけか？」

「それで十分だろう。不満か？」

「名乗れない理由でもあるのか？」

「理由なんてないさ。だがあんたに名乗る名前はそれだけだ」

「・・・まあいい。俺はフェリール・ロ力と言う。届け出たくなったら城へ来てくれ」

フェリール・ロ力と名乗った大男は、にやりと笑ってリムに背を向けた。先の兵士と連れ立ち、そのまま一度も振り返ることなく角を曲がっていった。

おかしな男だ。リムはしばらくそちらを見ていたが、じきにきびすを返した。

偉そうなことを言われたとは思う。実際リムが誰なのか知っていればそんな態度はとらなかつたろう。

けれど、その前の兵士に比べ、腹は立たなかった。偉そうなことは言っていたが上から見下ろすという感じがなかったからかもしれない。

しばらくしたら——気が向いたらではあるが——あの男を訪ねてみるのも面白いかもしれない。

そう思って歩き始めた直後、何かを感じてリムは若干速度を落とした。

つけられている。

巧みに気配を消しているようだが、おそらく間違いないだろう。リムが速度を落としても付かず離れずついてくるようだ。

誰かに尾行される覚えは全くないのだが仕方がない。

せめて正体くらいは確かめてやろうと、気付いていないふりを装ってリムは小路を曲がった。

その人影が曲がってきたところを捕らえようと、腰に佩いた剣に手をかける。

それはすぐに姿を現した。その時には既に鞘を払っていた。

「ま、待て！ 俺だよ、リム」

男の声だった。喉元に剣を突きつけられて両手を上げる男の姿がそこにあつた。

名前を呼ばれたことに驚き、リムはまじまじと男を眺めた。確かに見知った顔だった。

「お前・・・ラージャか」

「ああ、そうだよ。まったく、久しぶりに会ったつてのにとんだご挨拶だぜ」

「馬鹿を言つな。こそこそと後をつけてくるお前が悪い」

リムはようやく剣を引くと鞘に収めた。

やれやれと言いたげに、ラージャと呼ばれた男は首をひねった。

「声をかけようと思つたら子供に先を越されてな。子供がいなくなつたと思つたら今度は衛士だ。機会を逸したのさ」

「ずっと見ていたのか？・・・お前、わざわざ俺に気づかれるよう気配を残してつけたな？」

「おお、わかつたか？」

「まったく、相変わらず良い性格をしている」

リムが呆れたように息を吐くと、ラージャは明るく笑った。

「そうだろう？ 俺もこの性格は気に入っている」

「・・・・・・」

「どうした、リム？ 妙な顔をして。おかしい奴だな」

「俺は褒めたつもりはないんだが？」

「そうなのか？ まあ、いいじゃないか。細かいことは気にするな。そんなことだとリム、大きくなれんぞ」

「――背が低いのは生まれつきだ。放っておいてもらおう」
むっとしたように答えるリムとは対照的に、ラージャはどこまでも気楽そうだ。

「しかし不思議だよなあ。お前の父君はとても体格が良い方なのに、お前と来たら吹けば飛びそうなほど華奢じゃないか」

「さすがに、そこまでは酷くない――まあ、身長は母に似たのだろう。母はとても繊細な方だから」

「そうだろうなあ。まあ、あれだ。血脈の神秘って奴だな。だが、その毒舌は誰に似たんだろうなあ」

「――やかましい。それよりも、どうしてお前がここにいる？ 西の国境警備に就いていたんじゃないやなかったか？」

「10日程前だ、勅命が届いた。任期を1年繰り上げるから王都に戻って来いとお達しだ。寝耳に水もいいところだぜ。2年住んでいたんだ、それなりに後始末も必要だったのに。お蔭で俺だけ身一つで先に戻るようになった」

「お前もか」

「ってことは、そっちにも届いたんだな」

「ああ」

リムは頷くと背負っていた荷物の中から丸めた勅書を取り出した。

内容は、今ラージャが言ったことと寸分変わらない。

「何を考えているのだろうな、陛下は」
呟いた。

リムとラージャは同い年で、同じ年に入隊した。

二人とも生まれが貴族階級だったので、1年半の王城勤めの後、リムは東の国境、ラージャは西の国境にそれぞれ司令官として赴任した。それぞれ紛争の少ない地域である。

貴族の子弟が通る、お決まりのコースだった。

本来任期は3年で、その後王都に戻り、しかるべき地位に就くのが常である。

が、その任期を全うしないうちに突然の帰還命令。しかも自分一人ではないらしい。

何かが始まると思えなかった。

「さあな。それよりリム、どうするんだ？　これから王宮へ行くのか？」

「いや、やめておく。至急帰還せよとお達したが、期限が切られているわけでもない。そもそもこんな形では伺候などできないだろう？」

にやり、と口元をゆがめてリムは着衣をつまんで見せた。

長旅で薄汚れている上にかなり擦り切れている。身分を明かしたくないために選んだものだが、おかげでどこからどうみても貴族のご子息様だとは思えない。

ラー ज्याの方はそれでもリムよりは多少まともな格好をしていたが、急いで旅をしてきたのだろう、汚れ具合はリムとさほど変わらなかった。

「そうだなあ。この時間じゃ家に帰って着替えている間に日が暮れるか」

「明日の午後くらいで構わないさ。こっちはかなりの距離を移動してきたんだ。そのくらいの休息をとっても罰は当たらないだろうよ」

「違うない」

二人は顔を見合わせて笑った。

ラージャはどうやら街に用事があつたらしい。

旧友と別れたリムは自宅へと足を向けた。

イーロス城は、市街を見下ろす高台に作られている。その城をぐるりと囲むように住宅街が広がり、さらにその外側を城壁が取り巻いている。

城壁には堅固な城門が設置されており、そこには常に衛兵が待機していた。初めて訪れる人はおそらくその城壁内全てが王城だと思っただろう。

城壁内に住居を構えることが出来るのは、所謂貴族階級に属する者たちで、それも国の中枢に関わるような重鎮ばかりだった。

そこに住まう権利を与えられたことを喜ぶ者や、いつかはと夢見ている者達も少なくなかうが、リムに言わせれば所詮は「国王の盾」だった。

ぐるりと周りを囲ませているのは、城を、ひいては国王を守るためだし、いざと言うときには文字通り盾となり城を守れと、そう言われているように感じられてならなかった。

国王に、命を張って守るだけの価値があれば良い。お飾りの王ではなく、本当の意味での「王者」であればリムとて喜んで命を差し出す覚悟はある。それが騎士たる者の務めであると思つし、誇りと言い換えても良かった。

だが――

リムは苦い気持ちでため息をついた。

生まれた時から騎士になるべく育てられた。過去の王たちの英雄譚が子守唄代わりだった。いつか自分が王を守るための騎士になるのだと信じていた。

何も疑ってはいはいなかった幼い頃の自分が今の姿を見たら何と言

うことだろう。

城へ近づく足取りが次第に重くなる。

幼い頃あれほど憧れたイーロス城への道を、とてつもなく遠く思
い始めたのはいつ頃だったか。

久しぶりに家に帰れるのは嬉しい。だが帰郷の意味を考えると心
が翳った。

城門の手前まで来て、リムはおもむろに振り返った。

眼下には夕陽の色に輝くイーロスの町がいつぱいに広がっている。
直前まで鬱々としていたことも忘れ、顔には微笑が浮かんだ。

この眺めは幼い頃から気に入っていた。

「ここから見る景色はあまり変わらないものだな」

高台から眺めると、広いイーロスも両手で抱えられそうな気がす
る。

大嫌いな王城。その近くに住んでいることさえ気に入らなかった。
けれどこの景色を見ることが出来る、それだけで苦痛すら忘れる
ことが出来る。

自分は国王を守るためにあるのではない。この街を、そしてこの
街に住む人々を守っているのだと、夕焼けのイーロスを見ていると
実感するのだった。

鮮やかな朱色は暗澹とした気分を払うには十分だった。

「さあ、帰ろう」

いくぶん明るさを取り戻した表情で一人呟くと、リムは城門内へ
と身を翻した。

花壇で薔薇の世話をしていた少女が不意に顔を上げた。

導かれるように視線を門へと向けた。

「――」

弾かれたように立ち上がる。手に持っていた薔薇が地面に落ちた
ことにも気づかず、門へと駆け出した。

門の傍には人影が一つ。

薄汚れた帽子を目深に被った旅人風のその人は、小柄ではあるが確かに男性とわかる。

そして少女にはその男性の正体がはつきりとわかっていた。

「兄さま！」

まるで悲鳴のような呼びかけに、男が顔を上げる。帽子の下から現れた薄い栗色の双眸が少女を捉えた。

「ただいま、イーファロッサ」

言い終わらない内に少女が飛びついてくる。彼は、さほど慌てることなく彼女を抱きとめると、苦笑を浮かべて少女の顔を覗き込んだ。

「リム兄さま、遅い！」

言いながら少女はリムの胸に顔をうずめた。彼の着衣が汚れていることも、自分のドレスが汚れることもちつとも気にならないらしい。

確か今年で14になったはずだが、淑女の恥じらいと言うものは、まだ縁がないようだ。

リムは微笑を浮かべた。

「2年たって少しは落ち着いたかと思っていたが相変わらずだね、

ロス。父上と母上は？」

「もうずっと兄さまのお帰りを待っているわ。ええ、ずうつとね！」

少女は拗ねたように顔をしかめて見せた。

相変わらずだとロスには言ったが、しばらく見ないうちにずいぶん大きくなった。そして綺麗になった。2年前はまだすっぽりとリムの腕の中に納まってしまうほど小さかったような気がしたのに。「もう少し早く戻るつもりではいたんだが、2年もいるといういろ片付けなくてはならないことも多くてね。待たせたようで悪かったよ」

「本当よ。兄さまから書簡が届いてからずっと、父さまも母さまもレインも楽しみに待っていたんだから」

レインと聞いて、リムの顔に微笑が浮かんだ。

レイン——レイニアスは、リムとロスの弟である。2年前はまだ8歳でしかなかった。男の子の成長は早い。ずいぶん大きくなっていることだろう。

リムは、この弟のことをとても可愛がっていた。妹のロスに対する以上の愛情を注いでいたかもしれない。だからこそ、その成長ぶりを見るのは楽しみだった。

「あの子は元気かい？」

「もちろんよ。父さまよりも母さまよりも私よりも、兄さまに懐いていたレインだもの。兄さまからの書簡を毎日眺めていたわ」

「そうか」

「ええ。今は確か剣の訓練中だと思ったけれど。ふふふ。自分の不在中に兄さまが帰ってきたと知ったらあの子、きっと悔しがるわね。絶対に自分が最初に出迎えるんだって、ずっと言っていたから」

ロスがごろごろと笑う。意地悪な言葉とは裏腹に、ロスの声には愛情が溢れていた。弟が可愛いのが故の軽口なのだ。

リムはロスを促して玄関へと足を向けた。離れるのが惜しいと言わんばかりにロスが腕にしがみついてくる。そのまま好きにさせてリムは玄関の扉を押した。直後、懐かしい声が聞こえた。

「お帰りなさいませ、リム様」

「サヴァロアン・レイズ！」

2年前と全く変わらない穏やかな笑みを浮かべる執事に、リムは子供のように顔を輝かせた。

レイズ家は代々リムの生家であるヴェリア侯爵家の執事を務めてきた家柄で、リムが幼い頃はサヴァロアンの父親が執事を務めていた。代替わりしたのは5年前のこと。リムが16になったばかりの頃だったと思う。

今年で27になるサヴァロアンとは、リムが生まれた時からずっと

と一緒に育った。

サヴァロアンの父親は執事であると同時にリムの教育係でもあったから、その長子であるサヴァロアンはまさにリムにとって兄同然だった。

ある意味では、父よりも母よりもリムのことを良く知っている人物だとも言えだし、リムにとっては唯一、頭の上がない人物でもあった。

「しばらくお目にかからない内に、ずいぶんとご立派になられましたね」

妹にしがみつかれていた様子を見てからかっているのだろう。「ご立派」の部分に若干のひっかかりを覚えてリムは苦笑した。

「立派だって？ お前が言うのと褒められているように聞こえないのは俺の気のせいかな？」

「おや、リム様はサヴァロアンを疑うことを覚えて戻られたようですね。残念なことです」

「サヴィー！」

至極哀しげなサヴァロアンの声に、リムは思わず叫んだ。

共に育った誼か、主従でありながらサヴァロアンはリムに対して気安い口を利く。だが、リムはそれを嫌だと思ったことは一度もなかったし、逆に「ヴェリアの若様」扱いされないことを喜んでしまった。時として、居心地の悪い思いを味わうことはあったけれど。

サヴァロアンはそんなリムの心情に気づいたのだろう。やんわりと笑うと、奥の扉を指し示した。

「冗談ですよ。さあ、旦那様と奥様がお待ちです。元気なお姿を見せて差し上げなさい」

「——ああ」

やはりサヴァロアンには頭が上がらない。苦笑を浮かべつつ外套を脱ぐと、それを手に持ったままリビングへと続く扉を開けた。

久しぶりに家族全員がそろったの食事は、とても心が休まるもの

だった。

指揮官だったこともあり、任地での食事は一人で取ることが多かったため、なんとも味気ないものだった。しかもお世辞にも豊かとは言えないメニューである。

それに比べて実家の食卓はかなりにぎやかだった。

一品をとって見ても、色とりどりの野菜で飾られているし、そもそも品数が違う。

前菜から始まってスープに肉、魚。さらには果物をふんだんに使った氷菓子まで。

リムが久しぶりに帰ったと言うこともあるのだろうが、それにしてもあまりの違いだった。

贅沢をするつもりはなかったが、それでもやはり嬉しかった。
だが――

ふいに昼間の少年たちが頭に浮かんだ。

貴族階級は、毎晩食べきれないほどの料理をテーブルに乗せ、しかし街中ではスリを働かねば食うことすら出来ない。それは、正しいことと言えるのだろうか。

今まで自分はそんなことを考えたことも無かった。1日3度の食事が出てこなかったことはないし、足りないと感じたことも無い。それがあたりまえだと思っていた。

同じ街に飢えている者がいることすら知らなかった。

2年間赴任していた東の国境の町でさえ、食うために盗みを働く者はいなかった。決して豊かではなかったけれど。

人も物も豊かな首都イーロスで、そんな闇が存在することなど想像すらしていなかった。

――いや、違う。

リムは思った。豊かだからこそその闇だと。

光が強ければ強い程、できる陰は濃くなる。光に向かって立つ者に自分の背後にできる陰は見えないのだ。

リムは気分が落ち込むを感じた。気づいてしまった以上、知ら

ないふりは出来ない。けれど自分ひとりが気づいたところで何が変わるというのだろう。

国が、王自身がそれに思い至らない限り、何も変わらない。

結局自分は「貴族」に過ぎないのだ。王の庇護の元、王の意向に添って働くだけの、道具。そんな「道具」にいかほどの力が有ろう。リムは、誰にも気づかれないように小さくため息を吐いた。再び手を動かし始める。今ここで、リムに出来ることは何もないのだから。

にこやかに食事を進めながらも時折表情を曇らすリムに、サヴァロアンが気遣わしげな視線を向ける。自分の考えに沈んでいたためか、リムがその視線に気づくことはなかった。

一夜明けた午後。

城門をくぐると、先に行くラージャが見えた。声をかけて追いつく。

二人とも正式な軍装に身を包み、濃紺で裏打ちされたマントを纏っていた。襟に付けた意匠は鷹。師団長を示すものである。

他愛の無い話をしつつ謁見の間まで来ると、宰相が顔を輝かせた。
「おお、ちようど良い。ヴェリア東方司令、リツケル西方司令。二人ともすぐに陛下の御前へ」

ちようど良い？ 宰相の物言いにリムは首を傾げた。隣を見遣ると、ラージャが小さく肩をすくめる様子が目に入った。

予想していた通り、二人が呼び戻された理由は同じであるらしい。どうせ同じ説明をするのであれば、一度に済ませた方が話は早い。つまりはそういうことなのだろう。

その意図が理解できたので、二人は一緒に玉座の前へ進み出た。

「ラーゼンリート・エス・リツケル、昨晚西方より帰還いたしました」

「リメルテス・ユニ・ヴェリア、同じく昨晚、東方より帰還いたしました」

お定まりの口上を述べつつ、二人は玉座の前で片膝をついた。

同時に、人払いがされる。周囲から人の気配が消えてようやく、国王が口を開いた。

「ご苦労でしたね、リム。それからラージャ。突然呼び戻したりして驚いているでしょうね」

華やかな声。

その声に促されるように、二人は顔を上げた。

「いえ、お気遣いいただきなくとも結構でございます。われわれは陛下の臣。お求めに応じるのは当然のこと」

「まあ、ラージャ、硬い挨拶は抜きにしましょう。単刀直入に言わせていただくわ。あなたたち二人に、王都の守りについてもらいたい」

「——王都の守り、とおっしゃいますと？」

「詳しいことは言えないのだけれど、どうしても信頼の置ける者たちに、わたくしの傍を離れずにいて欲しいと思っているのよ」

にこやかな表情で、女王、セリスタ・フィオ・レム・アーティノキアは言った。さらりと、まるで午後のお茶の誘いでもかけるかのように。

これにはリムのみならずラージャも眉をひそめた。

気軽に言っている話ではない気がするが……

そう思ったものだが、女王はそんな彼らの様子には気づかなかつたらしい。明るい声で続けた。

「今は聞かれても答えることが出来ないの。時期がきたらあなたたちにはちゃんと話すから、わたくしを信じて従って頂戴」

「もったいないお言葉。陛下の御身をお守りする大役、光栄に思います」

神妙にうなづくラージャに、リムはちらりと視線を流した。

言葉や声は真剣だが、おそらく本心からの言葉ではないだろう。

彼とは短いつきあいではないし、そのくらいはリムにもわかった。

リムは気持ちが悪く口調や表情に表れるが、ラージャは本心を隠すのが上手い。加えて、彼はリムよりもずっと社交的だった。口数も多く、人当たりも良い。

そのためか、昔からラージャと一緒にいる時は、リムはほとんど喋らなかった。必要なことは大抵ラージャが言ってくれるから、リムが喋らずとも事足りてしまうのだ。

実際今日も、リムは謁見の間に足を踏み入れて以来、挨拶以上の言葉を発していない。国王との対話を好まないリムにとって、ラージャのこの性格はありがたかった。

「ヴェリア司令を近衛騎士団左騎馬隊將軍に、リッケル司令を右騎

馬隊將軍にそれぞれ今日付けで任じます。二人とも、受けてくれるわね？」

問いの形ではあったけれど、臣下である彼ら二人に拒否など出来るはずはない。

「陛下のご命令とあれば、喜んで」

「謹んで拝命いたします」

ラージャとリムは同時に頷いた。

その返答に満足したらしい女王は、上機嫌で微笑んだ。

「正式な任命書と新しい階級章はあとで自宅に届けさせます。久しぶりのイーロスですもの、今日はこれで下がってゆつくり過ごすといいわ」

その言葉にリムもラージャも膝を折ったまま一礼する。そして無言のまま謁見室を退出した。

「どう思う？」

謁見の間を出て、中庭へと続く廊下に差し掛かったところでラージャが口を開いた。

突然の帰還命令、功績なしの昇進。しかも傍を離れるなどのおまけ付き。それが指し示すのは――

「陰謀でも起きたかな？」

リムは口元を歪めた。信頼できるものばかりで身边を固めたいということは、女王が身の危険を感じているという意味にも取れる。

それがどういった種類のものかはわからないが、異動の規模の小ささから考えれば、外向的な問題ではないだろう。もしかしたら国内で何か不穏な動きがあるのかもしれない。

「そうだよなあ。やっぱりそれしか考えられないよなあ」

口調は軽いが、ラージャの表情は口調とは裏腹に翳っている。

いずれにしろ、今は話せないと当の国王が言うのだ、ここで二人で議論することに意味はなかった。

「われわれは王命に従うしかないのさ。昇進もさせてくれると言う

んだ、ありがたく拝命しようじゃないか」

「そうするか。ところでリム、久しぶりにイーロスに帰ってきたんだし、今夜飲みにも行かないか？」

ラージャが笑みを浮かべた。そこには、先ほどまでの深刻な表情はない。

相変わらずの切替えの早さに、リムは苦笑したものの、その誘い自体は嬉しかった。

「ああ、良いな。おまえと飲むのも久しぶりだ」

「じゃあ、日没後にいつもの店で」

言って、ラージャが身を翻す。立ち去ろうとした背中に、リムは声を投げた。

「俺はこのあとちょっと顔を出すところがある。たぶん日没までにはすむと思うが、もし遅れたら先に飲んでてくれ」

「昨日のスリの件か？」

「……それもある」

「わかった。後で話、聞かせてくれよ」

「たいした話じゃないと思うが、聞きたいなら話してやるさ」

リムはにやりと笑ってラージャに手を振ると、城内へと向かう廊下を曲がった。

さて……

王城内を一人で歩きながらリムは小さく息をついた。

ラージャに言ったことは嘘ではない。けれど、全てでもなかった。角を曲がり、階段を上がる。何人もの兵士から敬礼を受けながら、リムは城の奥へと向かった。

城内でも特定の身分以上の者しか立ち入ることの許されていない、王族の部屋のある場所である。

迷うことなく、長い廊下を進む。そうして、一つの扉の前に立った。

「アイラス殿下はいらっしゃるかいい？」

扉の前に立つ侍従に声をかける。見たことの無い少年だったが、彼はリムの襟元に目をやると背筋を伸ばした。

「はい、殿下は現在こちらのお部屋で書類の処理をしておいでです」
「取り次いでもらってもいいかな？ 私はリメルテス・ユニ・ヴェリアという」

「少々お待ちください」

少年は人好きのする笑顔を浮かべて室内へと入っていった。

数分もたたないうちに戻ってくると、扉を大きく開いてリムを中へと促した。

「リム！」

執務机に向かっていた女性がリムをみて顔を輝かせた。

椅子を蹴倒す勢いで立ち上がると、机から書類がひらひらと宙に舞った。それにはかまわず、リムに駆け寄る。

既に室内は二人きりだ。

リムは、嬉しそうに駆け寄ってきた彼女を、微笑を浮かべて抱きとめた。

アイラス・ロッタ・レム・アーティノキア。現国王セリスタ・フイオの妹だ。リムよりも2つ年上で、今年で23になる。

王女として育てられたわけではなく、女性でありながら騎士としての教育を受けてきた人物だ。幼い頃から剣を取り、アーティノキアに3つ存在する騎士団の内、王都を守る近衛騎士団で騎馬隊を預かっていたこともある。

体格も小柄で華奢ながら、剣の腕は一流品だった。請われて手合わせをしたこともあるが、気を抜けばリムとて負けたかもしれない。現在は騎士団での職を辞し、女王の片腕として、また一番身近な護衛として働いている。

護衛といえば聞こえはいいが、有事の際は身を挺して国女王を守らねばならない。それでアイラス自身が命を落とすことになるうとも。

それはつまり、同じ血筋に生まれながら、アイラスは王女ではな

く女王の臣として扱われてきたということに他ならない。

そのことを、彼女はどう思っているのだろう。時としてリムは考えることがある。本当にそれは彼女の意志なのだろうか。

けれど彼女は間違いなく、アーティノキアで2番目に尊い血の持ち主である。いかに親密であろうと、リムに詮索することなどできるはずもなかった。

「お久しぶりです、イルー。お元気そうで何より」

「あなたこそ。相変わらず綺麗で——でも、そうね。また少し、鋭さが増した感じ」

「どうせなら、たくましくなったと言って欲しいものですね。これでもまだ女性に間違われることがあるんですよ」

「そうなの？ 私から見ればリムはとても魅力的な男性だけど」

アイラスはにつこり微笑んでリムの首に両腕を回した。

リムは彼女の腰を右手で支えるとそつと頬を傾けた。

口唇がかかるく触れ合う。

「3年は戻らないと思っていたのよ。逢えて嬉しいわ。その点は、姉上に感謝しなくてはね」

「私も3年は戻らないつもりでしたよ。ですが勅命とあつてはね」

「リムは姉上のお気に入りだもの。何かあればすぐイーロスに戻るだろうと思っていたわ」

「お気に入り、ね」

アイラスの言葉に、リムは皮肉げに唇をゆがめた。

リムが女王の気に入りだということは、彼自身も知っている。その興味の対象が彼の能力ではなく、その容姿だけであることも。

2年前も、女王はリムが王宮を離れ東の国境に赴くのに難色を示し、手元に置いておきたがった。

私情に走りすぎだと宰相や近衛騎士団長に諭されてしぶしぶ勅命を出したが、きっかけさえあればすぐにでもイーロスに戻したいと思っていたのだろう。

けれどそれは、お気に入りのおもちゃをいつでも手の届く所に置

いておきたいという子供じみた独占欲でしかない。

その話をアイラスから聞かされた時は、正直がっかりしたものだ。所詮、女王にとって重要なのはリムの容貌だけで、彼の実力ではないのだと思い知らされたからだった。

ヴェリア家はもともとが武人の家系だ。既に亡くなったリムの祖父は近衛騎士団長を務めたこともある。そんな祖父に憧れ、いつかは超えたいと思って、血を吐くような厳しい訓練を積んできた。手柄に頼らず、自らの力で自身の地位を確立するための努力だった。だからこそ、容姿だけで女王に取り入ったと思われるのは絶対に我慢できなかった。

女王に比べれば、王族とは言え外の世界を知るアイラスはまだ良かった。リムが見た目だけの優男ではないことを知っているからだ。「ねえ、リム。今日はまだ時間がある？」

現実に戻されて、リムは表情を取り繕った。頭半分程低い位置にあるアイラスの瞳がまっすぐリムを見上げている。

艶やかな漆黒の瞳に甘えるような光を見つけて、リムは肩をすくめた。

「――執務中では？」

「どうせ明日から忙しくなるのでしょうか？　だったら今日くらい、ね？」

アイラスが微笑む。リムが拒絶できないことを承知した上での仕草だった。

仕方ない。小さく笑って、リムはアイラスの腰を支える腕に力を込めた。

「陛下」

玉座のセリスタを呼ぶ声があった。男の声である。

声の主に心当たりがあるらしい。セリスタは満面を明るく笑みで飾った。

その女王の様子を見て、宰相が小さく息をついた。どうやら宰相にとってはあまり歓迎できる相手ではないようだ。

男はフードを目深に被っていた。顔の半分ほどはその下に隠れており、表情を伺うことはできない。

そのことが宰相には胡散臭さとなって映るのだが、セリスタはそんなことには思い至らないのだろう、嬉しそうにその男を傍近くまで呼び寄せた。

「良く来てくれたわね。待っていたのよ」

「それは、光栄でございます」

抑揚の乏しい声だった。感情そのものがないと言っても良い。

男は、被っていたフードを外すと、セリスタの前まで進み出た。

現れたのは、ずいぶんと見目麗しい顔だった。白磁の肌に、ゆるく波打った金色の髪。澄んだ水のような双眸は静かな光を湛えている。

一目で異国の者とわかる容姿だった。

「城内が騒いでおります」

簡潔な言葉に、セリスタが首を傾げる。

この男はいつも言葉が少ない。説明が足りないのだ。

詳しい話を聞こうと先を促すと、男は静かな声で語り始めた。

「時が廻り始めました。その流れは緩やかで、しかし大きい。風はささやかであれば優しく我らを撫でるが、一度強く吹き荒れれば、それは嵐となり我らを害するものとなる――」

男は詩でも吟ずるように、滔々と言葉を紡いだ。

「……風は、アーティノキアに吹いているのかしら？」

セリスタは問うた。男は顔色一つ変えず、目を伏せることで、彼女に肯定の意を示す。

「新たな風が、吹き込みました。それは東より来たり、南へと向かうでしょう」

「わたくしにとって、それは優しい風となるのかしらね？ それとも、わたくしを翻弄する嵐となるのかしら？」

その声に、男の声が答えることはなかった。セリスタの声に、答えを求める響きがなかったからである。

男は伏せた目を再び開いた。優雅な手つきで再びフードを目深に下ろす。

フードの下に彼の顔が隠れてしまうと、セリスタは残念そうな笑みを浮かべた。

*

リムが王女の部屋を辞したのは日が傾きかけた頃だった。

ラージャとの約束までにはまだ多少の時間がある。

リムの足は自然と王都警備隊の詰め所へと向かった。

話を聞かせると言われていたし、フェリール・ロカという男にも興味があったからだ。

それに、自分の正体を知ったときのフェリール・ロカの反応を見てみたいとも思った。

詰め所は、王城を下り貴族の住宅街を過ぎた、城門のすぐ外にある。

王都警備隊はその名の通り首都イーロスを守るのが仕事だ。城壁内の警備は近衛騎士団の仕事である。

近衛に限らずアーティノキアの騎士団は全て国王直属の機関である。そして王都警備隊は近衛騎士団に属する機関だった。

団員の7割が貴族の子弟である近衛騎士団と違い、王都警備隊は

9割が一般市民で構成される。

司令官は、勅命を受けた近衛騎士が就任するのが決まりだった。市民階級出身の兵士が王都警備隊で功績をあげると、騎士団入団資格を得られる。

ただし、資格を得たからといってすぐに入団が許されるわけではなく、試験に合格して叙勲を受ける必要があるのだが。

貴族階級に生まれついた者は最初から騎士団入団資格を持っているが、当然のことながら、入団試験を通らない限り叙勲を受けることは出来ない。

単なる形式かも知れないが、一応、騎士団の質は保たれているというわけだ。

これとほぼ同じ構造の騎士団がアーティノキアの東部と西部に存在する。

東部に有るのがフェッセ騎士団。その下には東方警備隊があり、先頃までリムが司令官を務めていた。

西部に有るのがザハリア騎士団。その下に属する西方警備隊の司令官だったのがラージャだ。

構成としては地方貴族が6割、市民が4割といった所で、司令官は中央より派遣されるのが常だった。

「邪魔をする」

入口のドアを開けると、雑然とした室内の様子が目に入ってきた。夕方で交代の時間なのか、思ったより兵士の数は多い。

皆思い思いに道具の手入れをしたり、雑談に花を咲かせているようだ。

出入りも激しい時間なのだろう。リムが入っていてもさほど注目を集めることはなかった。

ぐるりと見回してみたが、司令官らしき人物が見あたらない。仕方なくリムは一番近くに居た少年兵に声をかけた。

「ここの責任者はどこにいる？」

「責任者って、ユーディ司令ですか？それなら奥の部屋に……え？」
言葉を返しながら振り返ったその少年は、リムの姿に目を見張った。

一瞬の空白の後、あわてて立ち上がる。

「しっ、失礼しました」

少年が背筋をただして敬礼する。その様子に、あたりがざわめいた。一瞬にして周囲は騒然となった。

彼が過剰に反応したのには理由がある。

それはマントの色だった。

アーティノキアでは身分によって纏える色が異なる。

例えば紫。これは最も高貴な色とされ、王族以外身につけることが出来ない。王族の血に連なる者でも、臣籍に降嫁するなど王家を離れた時点で使用不可になる。

リムが纏うマントは、表地は生成だが裏地は濃紺である。

濃紺色の使用条件は「侯爵家以上」。すなわち王家、公爵家、侯爵家であれば身につけられる。

しかしながら、自身の家柄よりも低い色を好んで身につける者は少ない。リムとて、普段使用するのは濃紺ばかりで、「伯爵家以上」の黒や、「子爵家」以上の緑を身につけることはほとんどなかった。そのことから、色は、その者の家柄を判断するに適した材料というわけだ。

侯爵家といえば大貴族。王子・王女との婚姻も認められる程の由緒正しい家柄である。一兵卒でしかない少年から見れば雲上の存在かもしれない。

恐縮しきっている様子にリムは苦笑した。しかも騒ぎは大きくなる一方だ。とはいえ、いまさらマントをはずすことには何の意味もない。

どうしたものかと思案している間に、奥の扉が開いて一人の青年が姿を見せた。纏うマントの色は白。とくに規定のある色ではない。貴族階級ではなく市民階級の出なのかもしれない。

「何事だ、騒々しい」

リムよりわずかに年上と思われるその青年の一喝で兵士のざわめきが止んだ。統制はよく取られているらしい。

リムはにっこり微笑むと、ことさらに優雅な足取りで青年に歩み寄った。

「ユーディ司令官？」

「そう、ですが」

「私はリメルテス・ユニ・ヴェリアという。フェリール・ロカという男に会いたい」

リムが名乗るとまた周囲がざわめいた。ヴェリア侯爵家の……と囁く声がここから聞かれたが気にせず続けた。

「実は昨日、イーロスでスリに遭ってね。そのときフェリール・ロカという兵士に、出頭して報告をしてくれと言われたんだが」

「突然のお越しにおどろきましたが、左様でございましたか。交代の時間なのでじきに帰ると思いますが、お待ちになりますか？」

「いや、またにするよ。明日からは私も近衛騎士団に世話になることになったので、時間はいつでも取れる」

リムはユーディの返事を待たずに身を翻した。扉を開こうとして、手が空を切る。リムが手をかけるより一瞬早く、誰かが外から扉を開いたのだ。

前を見ずに室内に入ろうとしたその男が、体ごとリムに突っ込みそうになって慌てて立ち止まった。そしてリムを見て目を丸くする。

「あんたは……リム？」

入ってきたのはフェリール・ロカだった。

「よう、報告に来たのか？」

屈託なく笑ったロカに、顔色を変えたのは周囲の方だった。特にユーディの顔色の変化は見ている方が哀れに感じる程だ。

「ロカ、ロカを慎め」

「慎めって司令、どうしたんです？」

ユーディの様子を見てようやく何かがおかしいことに思い至った

らしい。しげしげとリムを見下ろして、動きが止まった。視線はこれまたマントの裏地に釘付けた。

「リム、おまえ……いや、あの」

「リメルテス・ユニ・ヴェリアだ」

「ヴェリアって、あのヴェリア？ 侯爵家の？」

「昨日は名乗らずに失礼した。騒がれるのが好きではなくてね。めったなことでは名乗らないことにしている」

「あまりに小汚い格好をしていたからてつきり……」

「ソムタイあたりから来た田舎者じゃないかって？」

「まあ、そんな所です、はい」

ロカは所在なげな様子でうなずいた。大きな体をこれ以上ない程縮めてうろたえるロカの様子に、思わずリムは吹き出した。

その笑い声でロカも心持ち緊張を解く。

「ちょうど東から戻ったばかりの所だったからな。そう思われても仕方がないが」

「まったく、それならそうと云ってくださいよ。おかげで余計な恥をかいたじゃないですか」

「悪かった。長旅で疲れていたし、苛立ってたんだ」

「——つまり、俺で憂さを晴らしたってことですか？」

ロカが呆れたように表情をゆがめた。その様子に、リムが再び肩を震わせる。

リムの身分を知っても遠慮をしないその態度が気に入った。面白い男だ。

「そうとも言っな。否定はしないよ。だからさっき、悪かったと言ったじゃないか」

「いいですけどね、別に。でも昨日街で会ったのが俺でよかったかもしれないよ。他の奴らは貴族嫌が多いから」

ロカはあたりも憚らずにそう云って笑った。そのあまりの気軽さに、リムの方が首を傾げた。ロカの言う「他の奴ら」とは同僚の兵士達だろうに、気にならないのだろうか。

本人が気にしていないようなので、リムも敢えて深く尋ねることはしなかったが。

「あんたは嫌いじゃないのか？」

「別に嫌いじゃないですよ。特別好きってわけでもないですがね」

「そうか。で、やはり報告はした方がよいか？ 俺も少し前までは東方警備隊の司令官をしていたから報告義務は知っている」

「いや、別にかまいませんよ、ヴェリア殿」

リムの問いに答えたのは口力ではなく、リムの背後にいたユーデイだった。リムと口力のやりとりをずっと聞いていたのだろう。表情が硬い。

ユーデイも、口力の言う所の「貴族嫌い」なのかもしれないと、リムは思った。

彼の、リムに対する態度は丁重ではあったが、とげのようなものを先ほどから感じていたからだ。

とすれば、これ以上リムがここにいても彼らにとっては迷惑以上の何物でもないのだろう。

「そうか。それは助かる。何か問題があれば騎士団まで来てくれ。所属は左騎馬隊だ」

「承知いたしました」

「失礼する」

リムは殊更に大きな動作でうなずくと、再び身を翻した。今度は妨げる者はいなかった。

街には既に宵闇が下りていた。

大都会イーロスといえども夜は物騒だ。出歩く人影は少ない。

リムはわずかに上気した頬を夜風でさましながら、ゆつたりと自宅への道を歩んでいた。

ラージャと飲んだ帰り道だった。

「あいつにつきあっていたら夜が明けるからな」

誰もいない闇に向かってつぶやく。ラージャと違ってリムは酒に強い方ではない。

故に、まだまだ飲み続けるラージャを酒場に置いて一人、先に家路についたのだ。

イーロスの町中を抜け、城門へと近づいた頃だった。

「……………」

呼ばれた気がした。周囲に人の気配はない。

耳に届く声ではなかった。何かが闇を震わせるような、そんな不思議な感覚だった。

酒に酔っているせいかとリムは自分を納得させ、一度止めた足を再び動かした。

久しぶりに飲んだせいに違いない。

だが、またしばらく歩いた所で呼ばれた。

その呼びかけは先ほどよりはつきりとリムに届いた。先ほどと同じく、耳に届く声ではなかったにもかかわらず、リムはそれを「聞いた」のだ。

その声はリムに向かって呼びかけてくる。

目覚めよ、と。

その声をはつきりと認識した瞬間、リムの肌が総毛だった。

ざわりと身の内を揺るがすような、けれどまったく嫌悪感はない。どころか、懐かしいような気さえした。

自分はこの声を知っている。リムはそう自覚した。
それを聞いたのがいつのことなのかは分らない。少なくとも物
心付いてからの記憶では、決してない。

それ以前の、おそらくは潜在的に刻まれた何かなのだろう。もし
かしたら血に宿った記憶なのかもしれない。

声はさらに呼びかける。

——解き放て！

同時にリムの脳裏をよぎったものがあつた。彼を真っ直ぐに見つ
めてくる何者かの瞳。

強烈な力を宿したその双眸は、血に濡れたような深紅だった……

*

「リム様」

呼ぶ声とともに体を強く揺すられる感覚でリムは目を覚ました。
体が異様に重い。

呼んでいるのはサヴァロアンだ。声でわかる。が、昨夜の酒が残
っているのか、体はなかなか動いてはくれない。

「リム様、今日から騎士団に出仕でしょう？ 起きないと遅刻しま
すよ」

あまりに起き出してこないリムに、サヴァロアンのお小言が始ま
る。リムは小さな子供のように毛布を頭の上まで引き上げた。起き
たくない、という意思表示である。

「サヴィ……頼む、もう少し」

「いい加減になさい！ 今日から將軍職に就こうという人が寝坊で
すか！」

サヴァロアンの雷が落ちると同時にリムの手から毛布が奪われた。
幼い頃からリムは寝起きが良くない。そしてそのリムを起こすの
はいつでもサヴァロアンの仕事だった。

そんなことを思い出しつつ、観念してリムも身を起こした。

確かにサヴァロアンの言うとおりである。騎士団出仕初日から遅刻するわけにも行かない。

「おはよう、サヴィ」

癖のない黒髪を無造作に掻き混ぜながら、真っ直ぐにサヴァロアンを見上げる。

目を合わせた瞬間、サヴァロアンの表情が凍り付いた。少々のことでは顔色一つ変えないサヴァロアンの表情が、傍目にも分かる程青ざめている。

「どうした？」

「——いえ」

返事も齒切れが悪い。あまりのサヴァロアンらしからぬ態度にリムは眉根を寄せた。

「何があつた？ はつきり言え」

「何があつたか聞きたいのは私の方ですよ、リム様。どうされたのです、その瞳」

「瞳？ 別に何もないが」

意味が分からずリムは首を傾げる。手渡された鏡をのぞき込んで、はつとした。思わず鏡を落としそうになる。

そこに映っていたのは確かに見慣れた自分の顔だった。けれど、瞳の色だけが、リムの知っているものではなかった。

「な……」

つぶやくが、声にならない。

昨夜までのリムは、薄い栗色の双眸をしていた。

ここアーティノキアでは、黒髪に茶褐色の瞳を持つ人が多い。濃淡の差はあるが、リムのように多少薄い色彩の者も少なくない。

時として、西方の血が入ると金髪や碧眼の子供が生まれることがある。数は少ないが稀と言う程でもない。

ヴェリア家も、リムの祖母が、やや薄くではあるが異国の血を持っていたそうだ。ゆえに弟妹の髪は、光の加減によって金茶に見えた。リムの瞳の色素が薄いのも、その血のせいだと思っていた。

が、現在の色彩は今まで見たことのあるどんな瞳とも違っていた。右は紫。左は深紅。

左の深紅も禍々しいが、問題なのは右目である。

紫と言えば貴色。禁色である。つまり、王族にしか使用が許されていない。

いくら王統とつながりある侯爵家といえども、臣籍である以上使用は認められない。そんなものを身に纏うなど、それだけで罪だ。

しかも昨日までは確実に違う色彩だったのだ、最悪の場合、反逆罪で処断されかねない。

すなわち、皇統を篡奪する意図有り、と。

それほど、アーティノキアにおいては「色」が持つ意味は重かった。

リムは全身の血が凍り付くような錯覚を覚えた。昨夜の酒も眠気も一瞬で消え失せた。

とりあえず、目をこすってみる。寝ぼけているだけだと思っていたかったが、リム以上に青ざめた顔のサヴァロアンを見れば、それは不可能だと納得せざるを得ない。

「昨夜は？」

かすれた声でサヴァロアンが問う。昨夜何か変わったことがなかったか聞いているのだ。

「いや、特に何も……」

言いかけて、口をつぐんだ。

イーロスの下町で聞いた声。そして脳裏にひらめいた深紅の双眸。知っていると思った。懐かしいとさえ感じた。「夢では……なかったのだな」

自身でもわけがわからないままつぶやく。昨夜リムを呼んだものが何であるのかはわからない。なぜ自分の瞳の色が変わったのかも。だがリムには不思議と確信があった。この双眸はまぎれもなく自分の物。その色彩も、自分の物。いや、自分がかつて持っていた物だ。

しつくりとなじんでくるその感覚は、これがリム自身の色であると如実に語っていた。

明確な理由なんて無かった。ただ、そう感じるだけ。

「……」

サヴァロアンは無言のままリムを見つめてくる。正確にはリムの左目を。

そんなサヴァロアンの様子に気づかないまま、リムは言葉を紡いだ。

「呼ばれたんだ」

「……呼ばれた？」

「ああ。不思議な声だったな。初めて聞く声なのに、なぜか懐かしい気がした」

「それで、その声は何と？」

「『目覚めよ』と」

「『目覚めよ』、ですか」「ああ。それから、血の色をした瞳が見えた」

「血色の瞳……」

サヴァロアンは眉根を寄せた。その思案する様子と歯切れの悪い返答に、リムが不審そうな視線を向けた。

「何か気に掛かることでもあるのか？」

「いえ。ですが、それだけで瞳の色が変わるとは、あまりにも突拍子のない話で、にわかには信じがたいですね」

「信じがたいのは、むしろ俺の方だ」

リムはいらだたしげに髪を掻き上げた。

「とにかく、ここでこうしても始まらない。今日は右目に包帯を巻いてでも出仕するさ。瞳の色が変わるなんて事があり得るのか、城の典医にでも聞いてみよう」

「ですが——」

「安心しろ。包帯をほどいて貴色をあらわにするような愚は犯さない。左目は……寝不足だとも言ってごまかしておくよ」

「わかりました。すぐに用意します」

「ああ、頼む」

けだるげに寝台から抜け出して支度を始めるリムを、サヴァロアンは険しい瞳で見つめていた。

いよいよ動き出したか。サヴァロアンは心中で小さくつぶやいた。見えない、けれど大きな力によって運命の歯車は回転を始めた。そしてそれは否応なしに、リムとその周囲を巻き込んでゆくはずだ。世界はこれから荒れるだろう。セリテア大陸の勢力図が、大きく塗り替えられるかもしれない。たった一つの力によって。

サヴァロアンの胸に苦々しい思いが去来した。守るべきは国か、主か。そんな問いが浮かぶ。しかし、サヴァロアンには迷う必要がなかった。

サヴァロアンにとっては主が全てだ。主を——リムを守るために全てを捨てることになったとしても、サヴァロアンには後悔する理由など一つもない。

サヴァロアンの忠誠はこの世でただ一人、リムだけのものだから。けれど、主のことを思うと胸が痛んだ。長年親しんだ国アーティノキア。それを捨てなければならぬと知った時、彼の主は正しい道を選び取れるのだろうか。

リムが正しい道を選べばアーティノキアは荒れ、誤った道を選べばリムが滅ぶ。決断の時は目前に迫っていた。

リムの覚醒が始まった以上、どちらとも無傷で済む道はないに等しい。ならば主が進む道がサヴァロアンにとっても進むべき道となる。何も起こらなければよいと思ってきた。リムが真実を知る日など来なければ良いと。

けれどサヴァロアンには分かっていたのだ。「その日」が来ないはずがないことを。

小さかったリムが成長するにつれ、ふとした瞬間に見せる、瞳に宿る鋭い光を目にするたびに

「その日」

が近づいていることを実感せざるをえなかったのだ。

時折見せる冷めた表情が、サヴァロアンに忘れさせなかったのだ

……

「旦那様、少々よろしいでしょうか」

リムを送り出したサヴァロアンは、曇った表情のまま当主書斎の扉をたたいた。

ヴェリア侯爵。リムの父親である。「サヴァロアンか。どうした？」

促されるまま侯爵の前に立ったサヴァロアンは、単刀直入に切り出した。

下手にごまかしても仕方がない。腹を括った証拠だった。

「リム様が覚醒を始めました」

「覚醒？」

ヴェリア侯爵の顔に驚愕の色が浮かぶ。

サヴァロアンは敢えて気づかないふりをして、先を続けた。

「はい。瞳の色が元に戻っておいででした」

「元にとくと、赤と紫にか」

「はい」「封印が解けてしまったということか。なぜ、そのようなことに？」

「詳しくは分かりませんが、昨晚妙な声を聞いた、と」

「妙な声？」

「『目覚めよ』と呼びかけたそうです。リム様はその声を懐かしいと感じた、と仰っていました」

「懐かしい、ね」

「おそらくは――」

続けようとしたサヴァロアンを、軽く手を挙げて制すると、侯爵が言を継いだ。

「あれの一族が生き残っていたとはな」「生き残っていたのでは、もしかしたらないのかもしれない」

サヴァロアンの言葉に、侯爵は怪訝そうに眉をひそめた。

「どういう意味だ？」

「直接耳に聞こえた声ではなかったようでした。術者が残した思念とても言うべきものが、リム様を呼んだのかもしれませんが」

「確かに、その可能性はあるか」

「緋色を身に宿すは高位の能力者の証だと言われています」

「……そう聞く」「その声を聞いた直後、脳裏に深紅の双眸がひらめいたそうです。その双眸の者が語りかけてきたのだと、直感で思っただそうです」

「生き残っていたわけではなく、思念のみを残していたと。そして時が来たらあれを喚ぶよう仕組まれていたのだと、おまえは言いたいのだな？」

「……旦那様」

判断を求めるサヴァロアンの声。侯爵は苦々しい表情で頷いた。

「分かっている。これ以上隠し果せるものではないな」

「はい」

「それで、おまえはどうするのだ？」

「私は、リム様がどのような結論を下されようと、それに従うつもりです」

「お前は、そうだろうな。あれのためにもそれがいいだろう。私から話をしよう」

「はい」

話はそれで終わりだった。再び手元の書類に視線を落とした侯爵に軽く一礼して、サヴァロアンは書斎を退出した。

サヴァロアンが侯爵の書齋を辞したのとはほぼ同時刻――

城に隣接する王立図書館にリムの姿があった。

典医の元へ行こうかとも思ったのだが、なぜか足は図書館へと向いた。医者の領分ではない。そんな気がしていたせいかもしれない。2年ぶりに訪れる図書館の空気。皮とインクの匂いに加え、僅かに黴臭いようなその空気がリムは好きだった。大嫌いだった王城で唯一、大好きな場所だと言っても良い。

以前、城務めをしていた頃は良く通ったものだ。あの頃は、いつか蔵書の全てを読破してやろうと意気込んでいた。

「ここは変わらないな」

リムは天井まで届く程背の高い書架に収められた書物達を眺めて微笑を浮かべた。

「おや、懐かしい声が聞こえたと思えば……」

背後から声を掛けられて、リムは振り返った。

聞き覚えのある声、見覚えのある顔。そこには、なじみの司書の姿があった。

「ザイファ殿。ご無沙汰しておりました」

リムの顔が輝く。

ザイファ・ロウ。

リムが生まれるずっと以前よりこの図書館で司書をしているこの老人は、まさに生き字引のような存在だった。

その知識は太古の歴史から、野草の料理法まで多岐に渡っており、彼を頼りにするものは多い。

平民でありながら城壁内に居を構える、数少ない人間の一人だった。

その彼の視線が、リムの瞳に注がれた。

「……………リメルテス殿。どうやら、ご帰還の挨拶においでに

なったわけではなさそうですね」

ザイファの穏やかな表情は記憶の中の彼と寸分変わらない。けれど、その声音は明らかに強張っていた。

リムは小さく頷くと、顔半分を覆うように巻いていた包帯を解いた。

色違いの双眸でザイファをまっすぐに見る。

「——お知恵を、お借りできますか」

そう答えたリムの声もまた、緊張した響きに満ちていた。

促されるままに、リムは図書館の奥にある小部屋へと進んだ。

館内よりもさらに黴臭い。雑多に積み上げられた書物や巻物の類がリムの目を引く。図書館には幾度となく通ったリムでさえ、その部屋に入るのは初めてだった。

「ここは私の私室のようなものでしてな。普段はあまり人を通すことはないのです」

「その様な場所に入れていただいてよろしいのですか？ 立ち入らぬ方が良かったのでは・・・」

やや遠慮したようにリムは問うた。

部屋に足を踏み入れた時から、室内に漂う奇妙な気配を感じていた。冷たいとまでは言わないが、よそ者を拒むような、硬質な空気だ。

リムの様子をじっと見ていたザイファは、何かを感じたらしい。

ゆつたりとした笑みをリムに向けた。

「お気づきになったようですね」

「え？」

「ご心配なさらなくても結構でございます。彼らは、あなたを気に入ったようだ」

「『彼ら』？」

ザイファに言われて、リムは思わず周囲を見回した。

だが、周囲には二人の他に人影はない。

とはいえ、先程までとは若干雰囲気が変わっていることは感じられた。

どうやらリムはこの部屋に受け入れられたらしい。誰が受け入れたのか、何故そう思うのかは理解できなかったが、とにかくそう感じた。

「ここにあるのは、記されてから長い年月を経た書物ばかり。物によつては数百年を経過したものもございます」

「数百年——それはまた・・・」

「文字には、記した者の魂が宿ります。それらが長い年月を経て、ある種の存在感を結ぶことがある。ここに漂うのはそういったもの達です」

「書き手の思いが実体化するということですか？」

「実体ではないかもしれませぬ。あくまで『存在』を得るということでございますよ」

リムにはいまいち把握しにくい考えだった。

文字に魂が宿るといふのはわかる。何かがここに存在しているといふのも感じる。けれど、その二つがどうしても結びつかないのだった。

ザイファもそんなリムの思いは理解できるのだろう。穏やかな表情で笑むと、リムに椅子を勧めた。

「少々長くなりそうですからな。しばしお待ちいただけますかな。茶を淹れてまいりますよう」

「・・・ありがとうございます」

リムはとりあえず考えることを放棄した。ただでさえ簡単ではない状況なのだ、これ以上混乱はしたくない。

暖かな湯気を上げる茶碗からは良い香りが漂ってくる。

発酵させた茶葉にある種の花弁を加えて煎じたものらしい。鎮静効果があるのか、一口含むと波立っていた感情が少し落ち着いた気がした。

ザイファはそんなリムの様子を黙って見ていたが、ややあつてテーブルの上に一冊の本を置いた。

ずいぶんと不恰好な本だった。ありあわせの材料で作ったのではと思うほど、使われている素材に統一感がない。

しかし、放つ存在感は異様なほど強かった。

手を触れるのがためらわれて、リムは視線を本からザイファへと移した。

ザイファは小さく頷くと、口を開いた。

「リメルテス殿は、ジェスタという国をご存知ですか」

「ジェスタ・・・アーティノキアの南にあったという、あのジェスタですか」

「左様。21年前、我がアーティノキアが攻め込んだことで滅びた国でございます」

そうしてザイファはゆっくりと語り始めた――

*

ジェスタは小さな国だった。

領土は狭く、当時から隆盛を誇っていたアーティノキアに比べると10分の1程度だったといわれる。

しかし、領土こそ狭いが、温暖な気候と豊富な資源に恵まれた豊かな国だった。

肥沃な平原で栽培される小麦はその質の良さから、周囲の国々で高値で取り引きされていた。

しかし何より、ジェスタという国を支えていたのは地下資源――銀鉱脈である。

ジェスタ銀は、鉱石の状態で取り引きされることは滅多になかった。裏市場に出回ることも稀だった。それほどまでに徹底した採掘管理がされていたらしい。高い精製技術もまた、ジェスタの基盤をなすものの一つだったためだろう。

採掘されるとまず国内で精製され、加工される。

品としては装身具が8割。食器や燭台などの日用品や、武器に使われることもあるが数は少ない。純度の高い銀は軟らかく傷つきやすいため、道具には向かない所為だ。

精緻な細工が施された装身具には愛好家が多いと聞く。出回る量の少なさから付加価値が付き、物によっては一市民の年収程の値が付くこともあったという。

近隣諸国にしてみればのどから手が出る程欲しい土地だったに違いない。

にもかかわらず、ジェスタはこれまで、どの国にも隷属したことがなかった。

否、隷属させなかったという表現が正しい。

ジェスタの歴史をひもとけば戦いの歴史がないわけではなく、幾度かその豊かな地は戦火にさらされている。

けれど、その度にジェスタは侵略者を退けている。ジェスタを併呑しようとした国全てが、無惨な敗北を遂げているのだ。

軍事的に強いとは到底言えないジェスタがどのようにして侵略者達から国を守ったのか、それに関しての記述は一切見付かっていない。

記した書物はあったのかもしれない。しかし、アーティノキアの侵略によって全てが灰燼と化した。

呪術的な力を用いて国を守っているのだという噂が立ったこともあったが、ジェスタが滅びた今、真相を説明する術はなかった。

「『呪術』という言葉が人々の口の端に上ったのには、理由がございました」

ザイファは一度言葉を切ると、茶を一口含んだ。リムもつられて一口すする。茶はすっかり冷えてしまっていた。

「その理由こそが、ジェスタという国の特異さを表したものでしてな。というのも、この国を治めていた一族には、特殊な力が宿って

いたといわれておるのです」

ザイファは再び茶碗をテーブルに戻すと、先を続けた。

その一族は、レスと呼ばれていた。

国家でいう所の国王に当たる存在を、彼らは「長」と呼ぶ。

後継者に恵まれなかった等のやむをえない場合を除き、直系血族による世襲制を取ってきた。

しかしながら、ジェスタにおいて「長」とは、必ずしも最高権力者を意味する言葉ではなかった。実質的に国を動かしてきたのは「長」ではなかったのである。

では、いったい誰がジェスタを治めていたのか。その答えは「占い師」であった。

過去を読み、現在を知り、未来を見る。そのような能力を持った者たちは「占呪師^{せんじゆし}」と呼ばれ、国政を左右する力を持っていた。

国の行く末を占い、それに基づいて呪^{まじな}いを施すことで国を導くのだ。

占術の方法は、能力者によって異なっていたようだ。

星の動きを読む者、空の色を見る者、風の声を聴く者——様々である。

一歩間違えば狂信的な風潮さえ生まれかねないその制度によって、ジェスタという国は守られてきたと言えた。

占呪師としての能力は、主に血脈によって受け継がれる。

その能力を持つ者の殆どが、レス一族の血に連なる者だった。一族外から能力者が生まれることもあるが、その数は少なく非常に稀だと言っても良い。

占呪師は、その能力の強弱によって位が定められていた。最高位に立つものを特に「ハツシェ」と呼ぶ。これは古代ジェスタ語で「瞳」という意味である。

元々は「エルハツシェ」つまり「神の瞳」と呼ばれていたようだが、いつの頃からか省略され、ただ「ハツシェ」とのみ称されるよ

うになったようだ。

占呪師は「ゼファー」と呼ばれる組織に所属する。これはいわゆる教会のようなもので、国政に関する行事から赤子の洗礼まで、儀式祭礼に関わる全てを執り行っていた。

占呪師の能力を持つ者が長の地位に就くことはない。即ち「長」とは占呪師たる能力を持たなかった者が付く一族最高地位、ということになる。

長よりも占呪師——特にハツシェ——の方が、ジェスタにおいては重要視されていたのだ。

「その占呪師たちは、必ず、共通の特徴を持っております」

「特徴？」

「はい。彼らは身体のどこかに『緋色』を宿して生を受けるのです」

「緋色……！」

リムの背筋が凍る。ザイファの視線はまっすぐにリムの左目を見つめていた。

「爪、髪。痣のような形で現れる者もいたようですが、中でも双眸に緋色を宿す者は、特に力が強かったといわれておりますな。緋色の瞳。現在のリメルテス殿の左目のように……」

「ちよ、ちよと待つてください！ 私が、その占呪師だとおっしゃりたいのですか？」

「結論を急いではなりませんよ」

二人を、重苦しい空気が包む。リムは見るからに青ざめていたし、ザイファの表情もまた、明るいとは言い難かった。

「……ザイファ殿は先程、双眸とおっしゃいましたね。私の緋色は片目だけだ。なぜです？」

「それは、わかりませぬ」

「私は、占呪師などではない」

硬い声。リムは全身を嫌な寒気が覆うのを感じていた。

両親はアーティノキア生まれだったはずだ。ジェスタとは、何の

かわりもない。

それなのになぜ、自分の瞳はこのような色をしているのか。そしてなぜ、左右で色が異なるのか。

わからないことだらけだった。気味が悪かった。色違いの双眸も、その双眸を「自分のもの」と感じた自身も。

「リメルテス殿、その本を最初にご覧になった時、どう思われましたかな」

唐突に、ザイファが尋ねた。僅かに気をそがれてリムは手元の本に視線を落とす。その本の印象は、先刻と全く変わってはいなかった。

「嫌だと思いました。触れたくない、と。その本は、私にはとても・
・重い」

「左様でございますか」

ザイファはゆっくりと頷くと、一瞬の躊躇もなく本を手にとった。そのまま開くことなく、元の場所に収める。

その様子をリムはしっかりと目で追っていた。嫌だと思うのに、なぜか視線が外せなかった。

再び向かい合って座したザイファに、リムが問いかける。

「その本は一体、何なのでしょう。なぜ、私はその本が嫌なのだろう」

「書き手の思いが残っているでしょう。強く、残りすぎているのかもしれない。これもまた、数百年を経た書物でございますれば――」

「何らかの存在感を結ぶことがあると、そういうことなのでしょう」
最初にザイファが言っていたことを思い出して、リムは言葉を引き取った。

この書物を記した者の感情が、自分には強く伝わりすぎる。そんな気がした。

「リメルテス殿であれば読むことができるかと思いましたが、少々難しいようですな」

「……………申し訳ありません」

「謝るようなことではございません」

ザイファはそういつて、穏やかな微笑を浮かべた。途端、室内の空気が少し軽くなる。

リムはほっと息をついて、立ち上がった。

「ずいぶんと長居をしてしまいました。今日は、これで失礼いたします」

「リメルテス殿」

部屋を出ようとしたリムの背に、ザイファが呼びかけた。

「……………はい」

「あの本は、ずっと誰かを待っておりまして。その相手がリメルテス殿であるような気がしてなりません」

「……………」

「老人の戯言と、お笑いになりますかな」

ザイファが目細めた。彼の表情は柔らかい。けれど、瞳に宿る光はまっすぐに鋭かった。

「……………失礼いたします」

その言葉だけを残し、リムは扉を開けた。それ以上、どんな言葉も今のリムには紡げそうになかった。

図書館を出た所で、リムは足を止めた。包帯を解いていたことを思い出したのである。

巻き直すか一瞬考え、リムは取り出しかけた包帯を再び懐にしまった。隠すことに意味など無いように思えた。
なにもかもが億劫だった。

これで誰かに見とがめられるならそれでもいい。そんな投げやりな思いが、リムの全身を覆っていた。

「もう、帰るか」

平時である。

將軍だからといって、常に騎士団に詰めている必要もないだろう。既に日も傾き始めている。今更戻った所で、すべき事が多くあるとも思えなかった。

俺は何者なのだろう。

邸へ戻る道すがら、リムは苦い思いで自身に問いかける。

それは、色の変わった双眸を目にして以来燻っていた疑問だった。名前を尋ねられれば、リメルテス・ユニ・ヴェリアと答える。それ以外の名など知らない。それ以外の存在になったことなど、一度としてなかった。

けれど、本当にそれは「自分」なのだろうか。あの、栗色の双眸を持っていた「リメルテス」は偽物だったのだろうか。

考えてもわからない。答えをくれる人などいないように思える。

「答えは、あれを見れば分かるのだろうか……」

我しらず、つぶやいた。

あれ——リムを待っていたというあの書物。粗末な造りにもかかわらず、圧倒されるほど強い何かを感じた。

あれを手にしたら、本当に今までの自分とは別のものになってし

まう。そんな気がした。

根拠のない予感でしかない。それでも。

触れてはならない物だと、リムは思ったのだ。少なくとも、相応の覚悟を持つ者以外は触れるべきではないのだと。

「なぜ、こんなことになったのだろう……」

空を見上げてリムは胸に溜まった息を吐き出す。

昨晚の、緋色の双眸が脳裏に甦る。

あの瞳がリムを変えた。それはもう、理解しない訳にはいかなかった。

それが実体であつたにせよ幻であつたにせよ、ジェスタの占呪師であつたのは間違いないだろう。

「あなたは俺に、何をさせたいんだ？」

問いかけてみる。

当然、答える声はない。

「……もう止そう」

リムは苛立ちを紛らすように乱暴に髪をかき混ぜると、足早に家路を辿った。

沈みかけた太陽が空を赤紫に染めていた。

不吉な色だ。そう思った。

*

夕刻のヴェリア家。

侯爵は一人、書斎の窓から外を眺めていた。

夕闇に染まる空が、いやに禍々しい。

赤と紫を混ぜたようなその色が、幼い頃のリムを思い起こさせた。

否が応でも、思いは時を遡る。

あの、陰惨な歴史が脳裏に蘇ってきた。

出来ることなら忘れ去ってしまいたい。そう思わせる程の非道の

数々。

けれど、リムの存在が、彼に忘却を許さなかった。
否、もしかしたらあの日の選択は、この記憶を消さないために自ら望んだことだったのかもしれない。

思えばリムもサヴァロアンも、共にあの戦いの犠牲者だった。

事の発端は21年前。

アーティノキアが、隣国ジエスタに攻め込んだことから始まる――

*

それは突然起きた。

寒い冬の日だった。深夜である。

ジエスタを、炎が包んだ。

乾燥した空気によって炎は勢いを増し、木造の家屋を次々と飲み込んでいった。

紅い炎が夜空を暗い朱に染める。

木が爆ぜる音と人々の悲鳴があふれかえる。

1カ所から出火した火事ではなかった。風向きを考え、数カ所から同時に火が放たれたのである。

炎は森を飲み込み、街を焼き、田畑を燃やした。

ジエスタの民の多くが、この大火で死んだ。

赤々と燃えるジエスタの街。やがて、炎を切り裂くように大軍が押し寄せてくる。

角を持つ馬の旗印――アーティノキア正規軍であった。

先行するのは騎馬隊。その陣頭に立っていたのは濃紺色のマントを纏った壮年の騎士。

ヴェリア侯爵その人だった。

侯爵率いる騎馬隊は一気にゼファー本体を目指した。

ジェスタに火をかけ、混乱に乗じてレス一族に連なる者を全て討ち取れというのが、彼ら騎馬隊に与えられた勅令だった。

これによってジェスタを落とし、アーティノキアに併呑しようというのだ。

「一般民には構うな！ レス一族さえ討ち取ればそれで良い！」

燃える街に、侯爵の声が鋭く響く。彼の命令に呼応するように兵士らの鬨の聲が上がり馬蹄の音が響いた。

兵士らが燃え盛る家屋をなぎ払う様子を見ながら、公爵の胸には苦い思いが満ちていた。

地面に力なく倒れる人々の姿が目映る。

髪か、衣服に火が燃え移ったのだろう。まだ年端も行かぬ少女の身体は、無残な火傷痕に覆われていた。

本当に、ここまでする必要はあったのだろうか。

国王がこの豊かな小国を欲しがったのは理解できる。そしてこの国を併呑するためにはこうする外なかったことも。

徹底的に潰さねば、返り討ちにあうのはアーティノキア軍だ。それは歴史が証明している。

けれど、あまりに惨い。

これではもはや策でもなんでもない。ただの虐殺に過ぎないのではないか。

侯爵はただ黙って、馬上から街を見下ろしていた。

口を開けば、国王に対する不信感が噴出しそうだった。

まったく、なぜあのような男が王なのか。

彼はため息をつく。

卓抜した人格者であれ、とは言わない。

そのような存在がこの世に幾人も居るとは思えぬからだ。アーティノキア歴代の王とて、名君もいれば暴君もいた。世襲制である以上、名君ばかりが王位に就くことなどあり得ない。それは仕方のないことだと思う。

だがしかし。今の王はあまりに愚鈍に過ぎた。もう少し、もう少しで良いから賢くあってくれと願わずには居られなかった。

せめて、自分の命じたことが、如何程の結果をもたらすかを、考えることができる程度には。

とにかく、何事にも急ぎすぎる。

名君と呼ばれた先代国王。父親であるその人に劣らないことを見せ付けたかったのだろうか。手っ取り早く国の一つも落として見せれば、力を示すことになるのだとも思っているのだろうか。

だが、そんなものは単なる虚栄心に過ぎない。

問題なのは、王自身がそれに気づいていないことだ。気づいていれば、このようくだらない策は採らなかったはず。

「この惨状を、王はどのようにお感じになるのか」

熱気に髪をなぶらせつつ、侯爵は吐き捨てた。

今のジェスタの様子を眼前に突きつけてやりたかった。炎に巻かれ逃げ惑う者たちの悲鳴を。髪や肌の焼ける、胸の悪くなるようなにおいを。

それらを目にしても「正義である」と言い切るだけの何かがあるとは、侯爵には思えなかった。

自国の民でなければ、簡単に奪って良いのか。自国を富ませるためであれば、どのような手段を用いても良いのか。

人間の命を何だと思っている！

侯爵は、苛立ちに任せて剣を振るった。炎に包まれた柱が両断され、家屋が崩れる。火の粉が上がって、彼の髪を僅かに焦がした。

「ヴェリア將軍」

馬蹄と甲冑の音。侯爵は呼びかけに応じて振り返った。その顔にはすでに、どんな感情も浮かんではいなかった。

「首尾は」

「ゼファー本体は落ちました。この街に生きている者は、おそらくいないと思われます」

「……そうか」

侯爵は表情を変えことなく頷いた。剣を鞘に収め、集まり始めた兵士に向かって鋭い声を投げる。

「撤退だ」

兵士達は侯爵の指示に従い、馬首を巡らせた。

次々とその場を離れてゆく。その姿を見送ってから、侯爵もまた、その場を離れるために馬首を返した。

その時である。

人影が視界の隅に映った。茂みに身を潜ませるようにして、子供がうずくまっている。

少年だった。4、5歳という所だろう。まだ幼かった。

生きているのか死んでいるのか、定かではない。かすかに身動きしたように感じられたのだが、気のせいだったかもしれない。

侯爵は馬を下りた。ゆっくりと近づいてみる。

なぜ、近づこうと思ったのかはわからない。しかし、気が付くと、その少年を抱き起こしていた。

「生き残るか？」

息はあった。煙を吸い込んだのだろう。気を失ってはいたが、命に別状は無いように思われた。

「何だ」

少年は、大きな包みを大事そうに抱えていた。少年の身体の半分近くもある、大きな包みである。

その包みが、動いた。

「！！」

慌てて開いてみる。中から現れたのは、赤子だった。しかも、まだ生まれて間もない。どうやら、こちらが無事のようなのだ。

赤子は、この騒ぎにもかかわらず、すやすやと眠っていた。

着ている物は二人ともずいぶん粗末だった。一般民が纏う物よりも劣悪かもしれない。

しかし、身なりが粗末だからといってこの子供達がレス一族でないという証左にはならなかった。この街にいる以上、ジェスタの民

であることに間違いはないのだ。従って、勅命を全うするためには、ここで命を奪わなければならない。

しかし。

腕に抱いた暖かさが、二人分の命の重みが、侯爵の全身から殺意を奪った。

たった二人命を助けた所で、虐殺の罪悪が薄れるわけでもない。けれど、一度抱き上げた命を奪うことは、どうしてもできなかった。侯爵は子供たちを抱いたまま、再び馬上の人となった。マントの内に隠すようにして二人を抱え、隊に合流する。

そしてそのまま、夜闇を駆け抜け、アーティノキアへと帰還したのである。

*

リムは愕然として、父を見つめた。

「それが、その赤子が私だと、父上はおっしゃるのですか？」

室内に在るのは、ヴェリア侯爵とリムの二人だけだった。

父に問いかける声が震えているのが自分でもわかる。情けないと思いつつも、震えを抑えることが出来なかった。

否定して欲しかった。自分は父の子だと、ヴェリア侯爵家の血を受けた者だと言って欲しかった。

しかし、帰ってきた言葉は、リムの淡い期待を粉々にうち砕くものだった。

「そうだ」

鈍器で殴られたような衝撃が全身に走る。

「嘘だ！」

思わず叫んだ。

そんなはずはない。

自分は父と母の子で、ヴェリア侯爵家の長男だ。今までそう思っ
て生きてきた。

今更違うと言われても、信じられる筈などなかった。

「嘘ではない。あの時見つけた子供がサヴァロアンであり、サヴァロアンが抱いていた赤子が、お前だ」

「そん、な……」

「サヴァロアンは気を失っている間でさえ、お前を離そうとはしなかった。目を覚ましてからも、お前の傍を片時も離れようとしなかった。あの襲撃のために声を失ってはいたが、それでも、お前を全てのものから守ろうとする意思是、何よりも強かった」

「……………」

「サヴァロアンは兄弟ではないと言っていたが、どういう経緯でお前を抱いていたのかはわからん。声を取り戻した後も、あれは何も語ろうとはしなかった。しかし、あれの態度から、お前の方が重要な存在であることはわかった。故に、サヴァロアンはレイズに引き取らせ、赤子はヴェリアの子として育てることになった」

侯爵は淡々と語る。強いて感情をこめないように語っている節はあったが、今のリムにはそんなことはどうでも良かった。

自分が侯爵家の人間ではない。

しかも、滅びたはずのジェスタの民であったとは。

はいそうですかと、簡単に受け入れられるような事実では、到底なかった。

「では、あなたは私の父上ではないのですね。母上は母上ではなく、ロスは妹ではなく、レインも弟ではない」

「そうだ」

——ガンッ！

力任せに、目の前の執務机に拳をたたきつける。

頑丈な机はそれくらいの衝撃ではびくともしない。けれど右手に走る痛みが、それが現実であることをリムに教えた。

「リメルテス！」

侯爵の鋭い声が飛ぶ。制止の声すら振り払うように、身を翻していた。

苛立ちをぶつけるように扉を開け放つ。気がついたときには、書斎を飛び出していた。

「待ちなさい、リメルテス！」

遠くから、侯爵の声が聞こえる。けれど、リムの足は止まらなかった。

どこへ行くつもりなのかはわからない。それでも今のリムに、屋敷にとどまることなど、できるはずもなかった。

ぜいぜいと、荒い呼吸が耳にうるさい。

リムは宵闇の中を走っていた。

行き先など考えては居なかった。足が向うまま、ただ走り続けた。

「なぜ——」

不意に足を止めて、吐き捨てる。

先刻の疑問が再び頭をもたげる。

「俺は、一体なにものなのだ……！」

その声は震えていた。

リムは哭いていた。涙はない。けれど、全身が泣き叫んでいるのが自分でもわかる。

ヴェリアでない自分は、「リメルテス」でもないのだろうか？

リメルテスという名は誰が与えたものだ？

リメルテス・ユニ・ヴェリアとして生きてきた自分は、何だったのだろうか。

もうわからない。

何もかもが、わからなかった。

感情に任せて歩き続けたリムは、目の前に厚い扉が立ちはだかつてようやく足を止めた。

——王立図書館。

「どうして、ここに……」

背の高い扉を見上げて、リムは呆然とつぶやいた。

ザイファはもう帰宅しているだろう。ここに来たところで、何か

が変わるわけでもなかるうに。

しかし、今のリムには行くところがない。

仕方なく、リムはそっと、扉を押してみた。

「――！」

扉は、きしんだ音をたてて、内側に開いた。

そこに立っていた人物を見止めて、思わず息を呑む。

「ザイファ殿……」

「いらっしゃるのではないかと、思っておりますよ」

応じた声は、激情に波立つリムのそれとは反対に、ひどく静かだった。

「なぜ――」

自分が来ることがわかったのか。そう尋ねようとして、言葉にならない。

ザイファは何も答えずに、そっと、一冊の本をリムに差し出した。それを目にして、妙に納得する。リムは、今度こそ、その本を手に取った。

「これが、私を呼んでいたのですね」

その本は、いやにしつくりと両手になじんだ。

ずっと、そこに収まるのを待っていたような不可思議な感覚さえある。

昼間はあれほど感じた嫌悪感が、今ではまったく感じられなかった。

「お読みに、なりますかな」

図書館の奥へと促す声。それはザイファの声ではあったけれど、なにか違う存在のもののように、リムには聞こえた。

読めと、その声は言っていた。

今ではリムも理解していた。なぜ、自分がこの場所へと走ったのかを。

自分は、この本に呼ばれたのだ。これを読むために。これが語りかける声を聞くために。

「……はい」

リムはことさらにゆっくりと頷くと、館内に足を踏み入れた。その背後で、櫛の扉が重い音を立てて閉じた。それはまるで、自分とアーティノキアを隔てる音のように、リムには聞こえた。

じりじりと、蠟燭の芯が燃える音がする。

机の上には三つ又の燭台が2つ。

室内の灯りはそれだけだった。

薄暗いせいか、昼間訪れた時よりも数段、不気味な雰囲気満ちていた。

ザイファの姿はない。

リムが気兼ねなくそれを読めるように席を外してくれた。おそらく、リムが自分で扉を開けない限り、ザイファが室内に入っていることはないだろう。

リムはその心遣いをありがたく思うと同時に、多少不安にも感じた。

この本と対峙するつもりでここへ来た。それは間違いない。けれど、一人残されると、室内の気配がより強く感じられるのだ。

不快なわけではなかった。けれど、一人でいると、その気配に呑み込まれそうな気持ちになる。それが怖かった。

――ゆらり。

灯火が揺れた。かすかに風を感じた。リムを促すように背後から正面へと吹き抜けてゆく。

締め切った室内に風など吹くはずもない。それは、自然な風ではあり得なかった。

けれど、リムは確かに生温い風が肌を撫でるのを感じたのだった。「――そう急かさないでくれ・・・」

誰にともなく呟いた声は、わずかにかすれていた。

リムは覚悟を決めるように一度大きく息をついて、表紙をめくった。

何も感じなかった。

表紙をめくれば何かが起こるような気がしていたリムだったが、あまりに何も起こらないので逆に拍子抜けした。

次いで、自嘲気味な笑みが浮かぶ。

よく考えれば当たり前だった。

「本、だよな」

重苦しいため息と共に吐き出した。

強い何かを秘めているとは言え、所詮は物である。生身の人間に對して何が出来るというのか。

神経質になりすぎているのかもしれない。

思っ、て、全身が強張っているのに気づいた。ずいぶんと緊張していたらしい。

リムは数度、深呼吸を繰り返すと、視線を手元に落とした。

初めて見る文字だった。

ずいぶんと丁寧な筆跡で、手で書いたとは思えない程、文面に乱れがない。書いたのは几帳面な性格の人物だったのかもしれない。

加えて、かなり大切に保管されてきたことがわかる。不揃いな紙で綴ったにもかかわらず、折れ目も無ければ、切りそろえた跡もない。そのことから、相当重要な本であつたことが想像できた。

リムは、次々とページをめくった。

文字を辿ってみるものの、視線は上滑りするばかりだ。知らない文字である以上、解読など出来るはずもない。

せめて文字から何かを感じることが出来れば良かったのだが、本は沈黙するばかりで何も訴えかけて来なかった。

自然、ページをめくる手が早くなる。

「ザイファ殿に読んで貰った方が良かったか」と、ぼやいた時。

……

何かが、リムに触れた。

「な……んだ、今のは」

呆然と呟く。

知っているはずもない、けれど心の内側に触れるようなその感覚。「それ」が、リムに無言の囁きを残す。

瞬間、「それ」に触れたのは初めてではないことを思い出した。リムは慌ててページをめくった。なぜかはわからなかったが、そこを見なければいけないのだと思った。

本に触れる手がわずかに震えていた。紙を痛めないよう慎重にめくらないといけないのに、気ばかりが急ぐ。じつとりと汗ばむ手が、最後のページをめくった。

本文とはまったく違う筆跡の一節が、そこにはあった。

『――月は昏く輝き 陽は彼方に没す

闇宿す水晶は 大地を眠りへと誘うだろう

眠りは癒し

眠りは赦し

時来たりて 大地は目覚める

それを呼ぶのは光宿す紅玉

あるべき所へ至りて 暁をもたらす使者とならん』

「なぜ――」

かすれた声が、リムの口から零れた。

筆跡が違うとはいえ、使われている文字は本文と同じものだ。読める筈などなかった。

けれど、リムはそれを唐突に理解した。その一節だけを。

読めるようになったのかと思いページを遡ってみるものの、やはり文字の羅列でしかない。

文字には、記した者の魂が宿るとザイファは言っていた。これは、そういうことなのだろうか。

先刻感じた風は、あの晩に見た深紅の双眸と同じ気配を持っていた。あの風を受けた直後に、この一節を読むことができるようになったのは、偶然ではないのだろう。

それだけの理由で、この一節を記した人間とあの赤い双眸を結び付けるのは、安直な考えかもしれない。しかし何らかの——しかも深い——繋がりがあってのは間違いなさそうだった。

「俺に、何かをしろと言うのか？」

闇に向かってリムは問うた。答える声はない。ただ、自分の声だけが薄暗がり響いた。

あれは、どんな意図を持って自分にこの一節を教えたのか。自分は一体、どうすることを期待されているのだろう。

これを突き詰めていけば、疑問は全て氷解するのだろうか。

「俺は、どうすれば良いんだ……？」

吐き出した声は、情けない程か細い。泣き出しそうな声だと、リムは思った。

「リメルテス」

静かな玄関に、柔らかな声が響いた。

灯りは落ちており、周囲は闇に閉ざされている。声をかけられると思っていなかっただけに、衝撃は大きかった。

思わず呼吸が止まる。

すぐに、耳に馴染んだ声であることに気づき、リムはゆっくりと息を吐き出した。

「——母上」

声の人物を自然に母と呼んだことに、少しだけ複雑な思いがする。この人は母ではない。そう囁く心が、どこかにあったからかもしれない。なかった。

「まだ、お休みではなかったのですね」

燭台に火を灯しながら、リムは言った。

小さな炎が、あたりをぼんやりと照らし出す。いささか心許ない

光量ではあったが、今のリムにはその暗さがありがたかった。

彼女に、泣きそうな自分の姿など見られたくはなかった。

「遅くなりました」

声は歪んではいなかった。今はまだ、泣かずに済んでいるようだ。けれど、この後はわからない。

ただでさえ、崩れ落ちそうな自分を必死で支えている状態なのだ。これ以上母と言葉をかわして、平常心を保っていられる自信はなかった。

「リメルテス——」

「ご心配をおかけしたようで申し訳ありませんでした。今日はもう休みます」

呼びかけた母の言葉を遮るように告げる。返事を待たずに背を向けた。

「……ええ、おやすみなさい」

一瞬の間の後に、母の声が追ってきた。

その声が哀しみに染まっているように感じたのは、果たして彼の気のせいだったのだろうか……

*

哀しい気持ちでいっぱいだった。涙が落ちるのもそのままに、一人歩いた。

今日もまた、失敗してしまった。たくさん練習したのに、やっぱり駄目だった。

修練を初めてからもう1年も経つのに、時読みの力が扱えない。まじな呪いの習得は悪くないのに、時読みは失敗ばかりだ。

占呪師にとって最も大切なのは時読みの能力。それこそが国を導く力だから。

呪いなど、おまけ程度でしかない。極端な話、修練を積みさえすればある程度は身に付くものだ。けれど、時読みはそうはいかない。

なぜなら、時読みとは、身の内に宿る能力を引きずり出して行くものだから。

内に宿る能力とそれを操る技術を兼ね備えた時に初めて、時は占呪師の前に真実をさらけ出すのだ。

それができない占呪師など、出来損ない以外の何物でもなかった。緋色の双眸を持つ者でも、それは同じだ。いくら潜在能力が高かろうが、使いこなす力がなければ役には立たない。

どうして自分は上手くできないのだろう。5つ年上の兄は素晴らしい能力者なのに、どうして自分はこんなに駄目なのだろう。歩きながら彼は思う。

自分の評価がすなわち両親や兄の評価に直結することを、彼は理解していた。

エルハツシエの子なのに、あの人の弟なのに。落胆に満ちた声が彼を襲う。見えない力に押しつぶされそうだった。

切なかった。苦しかった。何よりも胸が痛かった。

小さくて弱い自分が、嫌いだった。

「うつ……つく」

嗚咽が洩れた。慌てて口元を押さえる。

こんな風に泣くななんて、本当に情けない。そう思うのに涙が止められない。

うずくまって泣きたかった。涙がからっぽになるまで喚いてみたかった。けれど、その姿を誰かに見られることが怖かった。そうしてその評判が家族に伝わるのが怖かった。

だから声を上げて泣くことすらできなかった。

――ふわり。

穏やかな風が吹き過ぎてゆく。

暖かくて優しいそれは、涙をぬぐうように彼の頬を撫でた。

「……なぐさめてくれるの？」

風に向かって小さく尋ねる。

風はいつだって彼の味方だった。誰よりも何よりも、身近な存在だった。

彼の傍らに風が吹かない日はなかった。

風の声を聞くこと。それは彼にとって、呼吸をする以上に自然なことだった。

——さらり。

肩のあたりまで延ばした黒髪が揺れ、首筋に触れた。その感触がくすぐったくて、彼は少し笑った。

ゆったりとした空気が彼を包み込む。風が、重苦しい空気を少しだけ、遠くへ運んでくれたのかもしれない。

「うん、ありがとう」

ローブの袖で顔をこする。このまま帰っては、泣いたことが皆に知られてしまう。それはさすがにばつが悪かった。

両親も兄も優しいから、きっと大丈夫だと言ってくれる。大丈夫だと、いつか必ずできるようになる。その優しい言葉が、逆に彼の心を切り刻む刃となっていることを知らずに。

「ねえ、もう少しだけ、ぼくに付き合って」

涙の跡が消えるまでで良いから。そう、大気に語りかける。

再び風が吹き抜けた。彼の声に応えるように、囁くような音を残して——

*

目を覚ましたリムは、自分の頬が濡れているのを知った。

少年の痛みが伝わって、とにかく切なかった。

夢だとわかっている。けれど、胸をえぐられるようなこの深い悲しみはどうだろう。

まだ幼い少年だった。それこそ、両手で足りるほどの年齢の子供だった。

幼い心に周囲の期待はどれほどの重みとなつてのしかかったのか、

想像に難くない。

力ある両親。才能に溢れた兄。彼らに囲まれて萎縮するしかできなかった少年。

彼は、風と対話することでしか安らぎを得られなかったのだろうか。

「だとすれば、哀しすぎる」

周囲はまだ深い夜に閉ざされている。

その闇に向って、リムは吐き出した。その声は涙にゆがんでいた。

小さく扉が鳴り、リムは視線をそちらに向けた。

結局、目が覚めた後、再び眠ることができなかった。窓辺に座り、白んでゆく空をずっと見ていた。

涙は止まっている。けれどあの時感じたやるせなさは胸に重かった。

「リム様、入りますよ」

扉の外からサヴァロアンの声がする。リムを起こしに来たのだらう。

リムは億劫そうに腰を上げた。

「もう起きているよ、サヴィ」

「……昨晩はお休みになれなかったようですね」

リムの顔を見て、サヴァロアンが眉根を寄せた。

じっと見つめられて居心地が悪い。その視線から逃げるように、リムはサヴァロアンから目をそらした。

「別に眠れなかった訳じゃない。俺だって早く起きることはある。そんなにおかしいことか？」

リムは少々不機嫌そうに問うた。サヴァロアンが言いたいのはそのうちのことではないとわかっていて、敢えてつつかってみる。

案の定、サヴァロアンは表情を翳らせた。

「冷やした布をお持ちいたします。泣き腫らした目で人前に出たくはないでしょう？」

言い残して、部屋を出ていこうとする。その背中に向かって、リムは慌てて声を投げた。

「言っておくが！ 俺は出自を知って泣いていた訳じゃないからな」
声がうわずっているのが自分でもわかる。これではまるで誤魔化しているようだ。

「何で俺が言い訳しなきゃならないんだ？」

そうぼやいた声はサヴァロアンには届かなかったらしい。振り返ることなく立ち去ってしまったサヴァロアンの背中を、リムは恨めしそうに睨んだ。

サヴァロアンから受け取った布を両目の上に乗せ、リムは息を吐いた。

泣いたことと寝不足とで、相当目は疲れていたらしい。冷えたその布が心地よかった。

リムの正面には今、サヴァロアンが座っている。ザイファから受け取った本を見ているのだろう。ぱらぱらと紙をめくる乾いた音が聞こえた。

「これは……『橙絲記』ですね
「とうしき？」

ページを繰る手を休めずに、サヴァロアンは言った。

「ジェスタに伝わる预言書です。元々表題はなく、橙色の紐で綴られていたことからそう呼ばれるようになったと聞きます。存在自体は知っていましたが、実物を見るのは初めてですね」

「読めるか？」
「いいえ」

目は閉じたまま問うたリムに、サヴァロアンが即答する。

これが、ジェスタの生き残りであるリムにとって重要な意味を持つのなら、サヴァロアンにとっても同じだろう。そう思っていたのだが。

サヴァロアンの答えに少々落胆する。とはいえ、サヴァロアンとジェスタにいたのは5歳頃までだと言うし、読めないのは当然かもしれないなかった。

「最後のページを見てくれ」
「はい」

「筆跡の違う一節があるだろう」

「——ええ。使われている文字は同じのようですが、これが、何か

？」

リムは目に当てていた布を外した。サヴァロアンと視線を合わせる。

「俺には、その一節だけが読めるんだ」

「この一節だけ、ですか？」

サヴァロアンの声に不信感が滲んだ。

「ああ。理由は聞くなよ。俺にもわからないから」

リムは頷いて、諳んじてみせる。何度も見返した文章だ。すっかり覚えてしまっていた。

「『暁をもたらず使者』ですか」

「言葉以上の意味はわからない。それが何を示しているのかも。ただ少なくとも、そこだけは理解できるんだ」

リムは視線を本に落とした。その一節に目をやった時だけ、意味がわかる。読めるというよりは感じるのだ。その意味が脳裏に響くといっても良い。

そう説明すると、サヴァロアンは表情を険しくした。

「リム様、占呪師せんじゆしという存在を御存知ですか」

「ああ、ザイファ殿から一通り話は聞いた」

「占呪師とは、その名の通り占いと呪いまじなを行うものです。占いとは、時の流れを読む力。この本は、その占いの結果を記述したものです。最後の一節を除いて」

「どういうことだ？」

リムの表情もまた、険しくなった。本に落としていた視線を再びサヴァロアンに合わせる。

サヴァロアンは深刻な表情で頷くと、先を続けた。

「この一節は、呪いです」

「呪い？　これが？」

意外な言葉に、リムが眉をひそめる。

「はい。おそらく予言を見た誰かが、呪いとしてここに記したのでしょう」

「……何のために？」

問い返すリムに、サヴァロアンが薄い笑みを浮かべる。

「予言を回避するためですよ」

「そんなことができるのか？」

「わかりません。ですが、この一節が、本文と異なる性質を持っていることは確かです」

サヴァロアンもまた、リムと同様にこの本から何かを感じるらしい。その事に少しだけほっとした。何一つ解決したわけではなかったが、共有できる相手がいたことはありがたかった。

「お前も、感じるんだな」

「ええ。リム様ほどではありませんが」

言って、サヴァロアンはおもむろに上着を脱いだ。左袖をめくり、二の腕をあらわにする。

そこには、子供の手のひらほどの赤い痣があった。

「お前、それ……！」

リムの顔色が変わった。痛みを感じるほど強く鼓動がはねる。恐怖にも似た衝撃が全身を貫いたのを感じた。

ザイファの言葉を思い出す。占呪師の深紅は、痣として現れることもあると言ってはいなかったか。

「生まれつきですよ」

リムが考えていることがわかったのだろう。サヴァロアンは困ったように笑った。

「お前は、占呪師なのか」

「正確には、占呪師たる素質を持って生まれたということですね」「そうか……」

サヴァロアンは頷きながら、袖を元に戻した。

そういえば、子供の頃からサヴァロアンは必要以上に肌を見せることはなかった。真夏の暑い日でも、袖の長い衣を着ていた気がする。それはこの痣が理由だったのだろうか。

元通り上着を着込む彼の様子を眺めながら、その事をリムは思い

出していた。

「私の持つ力はとても弱く、いくつか呪いが使える程度です。時を読むことは出来ませんから、ジエスタで相応の教育を受けたとしても、占呪師にはなれなかったでしょう」

「そう、なのか」

「はい。リム様、我々がヴェリア家にやってきた後、あなたの双眸を栗色に変えたのは私です」

「なんだって！」

唐突に告げられた真実に、リムは息が止まりそうになった。

あの朝、リムの瞳を見たサヴァロアンが、必要以上に動揺したのはそれが理由か。

「ここで生きるためには、その色彩は妨げにしなければならない。そう判断して、呪いをかけました」

「……もう一度かけ直すことは出来ないか」

「残念ながら。同じ呪いを、再び同じ人物に施すことはできません」
「そうか」

サヴァロアンの返答にリムはひどく落胆してしまった。同時に可笑しさがこみ上げる。

聞いてどうするのだと問う声がそこにあつた。是と言われたとしても、もう一度それを望むつもりだったとでも？

再び瞳の色を茶に変え、ジエスタのことも、ヴェリアの血を持たないことも全て忘れて生きていくことなど、出来るはずがないだろうに。

「病と同じく、呪いには耐性がつきます。そもそも呪いとは、自然の理を歪めるもの。身体がその歪みに対して反発するのです。加えて、先ほども申し上げたように、私の力は弱い。仮に出来たとしても、より強い力の干渉を受ければ、一瞬で効力を失うでしょう」

サヴァロアンの視線がリムの左目に固定された。

片目とはいえ、リムは緋色の瞳を持つ。理論的に言って、力の強さではリムの方が勝る。彼のいう「より強い力」の部分にはおそら

く、リムの存在も含まれるはずだ。

サヴァロアンがリムに呪いをかけても、リム自身の力が呪いをうち消してしまう。そういうことなのだろう。

もし、真にリムが呪いを望むのであれば、自分以上の力を持った術者を探さなければならぬ。仮にそういった術者が見つかったとして、リムに呪いをかけることが出来るかはまた別の話だ。

「やっかいなことになったな」

リムは苛立たしげに吐き出した。平時とはいえ、さすがにこのまま出仕しないというわけにはいかない。かといって、このままの色彩で出歩くことも不可能だった。

「とりあえず、何をするにしてもその瞳を何とかしなければなりませんね。せめて、貴色だけでも隠さなければ」

「だが、呪いをかけることはできないのだろうか？ どうする」

リムが問うと、サヴァロアンは一瞬だけ逡巡し、口を開いた。

「心当たりがないわけではありません」

「本当か！」

「噂を聞きました。イーロスの街に腕の良い占い師が居ると」

「占い師？」

リムが眉をひそめる。占い師に何ができるというのか。

サヴァロアンはリムが何を思ったかわかったのだろう。小さく笑って先を続けた。

「彼の占いは良く当たるそうですよ。先を見通す力を持っているとも言われていますね。あくまで噂ですから、真偽は定かではありませんが」

「そうか……」

占い師——先を見通す力。

リムの心に苦い思いがこみ上げた。その占い師もジェスタに縁があるのではと疑いたくなる。が、それは考えすぎというものだろう。

「少々お時間をいただだけませんか。その者の場所を特定できたらまたお知らせします」

「わかった。その件は任せる」
言つて、リムは再び濡れた布で両目を覆った。
次にこれを外した時、両目が茶色に戻っていればいい。儚い望み
だとわかつてはいたけれど、そう願わずにはいられなかった。

*

玉座の隣に立つアイラスは、苦々しい思いで男を見遣った。
彼女はその男を信用していない。
疎ましく思うほどではなかったが、好ましいとも思えなかった。
確かに美貌の男である。白磁の肌、柔らかな金色の髪。すつきり
とした細面は、いつも穏やかな笑みに彩られている。
姉が、その美しさに心を奪われる気持ちは、わからなくもなかつ
た。

しかし――
「今日は、何を教えてくれるのかしら」
嬉しそうに男に語りかける姉に、アイラスは小さく息を吐いた。

この男、イーロスでは人気のある占い師らしい。
彼がセリスタの元に伺候するようになったのは2ヶ月ほど前のこ
とだ。城の侍女から噂を聞きつけたらしいセリスタが、彼を城に召
喚したのが始まりだった。

正体の知れぬ者を王の近くに寄せるわけにはいかない。アイラス
を始め、男の召喚を反対する声は多かった。

けれど、周囲が反対した所で女王の意思が翻ることはなかった。
結果、男は登城することとなった。

セリスタは殊の外、この男を気に入っているらしい。

容貌の美しさもさることながら、この男の占いは良く当たる。気
味が悪いほどに、良く当たるのだ。

男は挨拶とばかりに、伺候してすぐに一つの占いをして見せた。

近々に起こるだろう出来事と、その解決方法を示したのである。

そしてその翌日、占いは現実となった。

アイラスも初めは驚いた。あり得ないとさえ思った。占いという行為自体を疑うわけではない。しかし、あまりにも占い通りに事が運びすぎた。

セリスタにとってはそれが信頼となったようだが、アイラスから見れば、男の不気味さを助長させたただけだった。

そして半月前。

男が奏上した内容は、彼女から顔色を失わせるには十分な内容だった。

——大きな波が、陛下を呑み込もうとしています。

淡々と男は語った。その言葉の意味をわかっていないのではないかと疑いたくなるほど、静かな表情だった。

波とは一体何なのか。女王の生命に——ひいてはアーティノキアにとって災いとなることなのか。そして回避する術はあるのか。

蒼白な顔で詰め寄るアイラスに対し、男は明確な答えを返すことはなかった。

他に語るべきことは何もないと言わんばかりに目を伏せる。

詰問は無意味だった。

謁見の間に、冷たく重い空気が立ちこめる。その場に立ち会った全ての人から言葉が失われた時、男は静かに立ち上がり、一言だけを口にした。

御前失礼、と。

その声の冷たさに、アイラスは背筋が粟立ったのを覚えている――

「イルー」

「……」

「イルー？」

二度名前を呼ばれて、アイラスは我に返った。

目の前には不思議そうにこちらを眺めてくる姉がいる。男の姿は、

既になかった。

冷たい空気が全身を取り巻いている気がして、アイラスは一度だけ小さく身を震わせた。

「気づかずに申し訳ありません、姉上」

「別に構わないけれど。でもどうしたの？ 珍しいわね、あなたがぼんやりするなんて」

「あの者が予言をした時のことを思い出しておりました」

「予言？ ああ、『波』のことね」

「はい」

セリスタが小首を傾げる。その様子からも、セリスタがそれを深刻に思っていないことは明らかだった。自分の身に、自分の国に災いが降りかかるかもしれないというのに。

自分が深刻に考えすぎているだけなのだろうか。

変化には2種類ある。突然起きるものと少しずつ形を変えてゆくものと。

今はまだ、国にも女王にも変化はない。けれど、目に見える変化がないからといって「何も起きていない」とは言い切れない。

「大丈夫よ、イルー。ラージャもリムも戻ってきてくれたのだから、きっと彼らが守ってくれるわ」

「そう……だと良いのですが」

華やかに微笑むセリスタとは対照的に、アイラスの表情は晴れない。

不安が胸の辺りでわだかまっていた。すっきりと腑に落ちてくれない。

あの男の掌で踊らされているような不快感を、アイラスはどうしてもぬぐうことが出来なかった。

「おい、リム」

背後から呼びかけられて、リムは足を止めた。明るい声はラージヤのもので間違いないだろう。

振り返って確かめる。友の姿をそこに見て、リムは明るい表情を浮かべた。

「何か用か、ラージヤ」

「いや、見かけたから声をかけたただけだ」

そう言ってラージヤは、リムの隣に並んだ。

穏やかな陽光が降り注ぐ城内を、ゆったりと肩を並べて歩く。

「あれ？ お前、その目……」

何かに気づいたように、ラージヤがリムをのぞき込んだ。

額が触れそうなほど近距離からまじまじと見つめられて、居心地が悪い。

「目？ 何かおかしいか？」

問い返す声にはわずかに棘がある。それに気づいたらしいラージヤは、ごまかすように笑った。

「そう怒るなつて。ちよつといつもと違うように見えただけだよ」

「……何も変わっていないと思うが」

「そうだよなあ。色が違うように見えただが、気のせいかな」

ばつが悪そうにラージヤは頭を掻いた。

「真昼間から寝ぼけるなよ。大方、昨夜飲みすぎたんだろう」

軽い口調で返しながら、リムは内心安堵する。

どうやら呪いは成功しているらしかった。

例の占い師はすぐにみつかった。

サヴァロアンに報告を受けたリムは、宵闇に紛れるようにその占い師を訪ねた。昨夜のことである。

王城にほど近い裏路地に、その占い師の住まいはあった。

暗い路地は、それだけで気味が悪い。

灯火を片手に持ったサヴァロアンが先に立ち、リムはそれについていく形で路地を進んだ。

路地はすぐに突き当たった。見えてきたのは質素な木の扉。飾り気のないただの扉だ。にもかかわらず、その場に不似合いなほど、重厚な雰囲気放っていた。

サヴァロアンが、扉を叩こうとしたその瞬間。

「っ！」

伸ばした手が中空で動きを止める。

軋んだ音を立てて、扉は内側から開いた。

「こんばんは」

そう言って顔を出したのは一人の青年だった。

まだ若い。サヴァロアンと同じか少し年長のようだ。床まで届く純白のローブに身を包んでいる。蠟燭の火灯りに照らされる髪は、薄い金色だった。

彼はリムをみとめて穏やかな笑みを浮かべた。

「そろそろいらっしゃるのではないかと、思っていました」
言いながら身体を少しずらす。入れということなのだろう。

リムはサヴァロアンと一瞬だけ目を合せた。訪問を先触れしてあるのかと思ったためだが、サヴァロアンの表情を見る限り、そういうわけではないらしい。

リムは、胸に溜まった息をゆっくりと吐き出すと、男が促すままに室内へと足を踏み入れた。

「……またか」

入ってすぐに、リムはうんざりしたように呟いた。

ここに漂う気配には覚えがあった。それは図書館の奥——ザイファの部屋に立ち入った時に感じた空気と同質のものだった。

男は答えない。リムの言葉の意味をわかっているのか、それとも感心がないのか。表情からはどんな感情も読みとることは出来な

った。

「どうぞ」

男がテーブルを指し示す。リムとサヴァロアンは言われるままに席に着いた。

「ご用件を伺いましょうか」

「わかっているのではないのか？」

リムが問う。男はリムが訪ねてくることを知っていたようである。であれば、来訪の目的もまた承知の上ではないのか。

男はじいっとリムの双眸を見つめ、そして首を左右に振った。

「いいえ」

「わからない、のか」

「はい。私が知り得たのは、あなた方がここを訪れることだけ。それ以上は存じません」

「そうか」

それきり会話が途切れる。沈黙が重苦しい。

その息苦しさから逃れようとするかのように、リムは口を開いた。「瞳の色を変えたい。何か方法を知らないか」

単刀直入な問いに、男はわずかに笑みを浮かべたようだった。一度軽く目を伏せ、すぐに開く。薄青の瞳がリムを真っ直ぐに見つめた。

「結論だけ申し上げれば、方法はございます」

「本当か！」

「はい。ですが、それは可能性があるというだけのこと。現実とは申し上げられません」

「……詳しく聞かせてくれ」

そう言ったリムに、男はゆっくりと頷いた。

「今のあなたには、呪いの影が見受けられます」

「呪いの影？」

「はい。誰かがあなたに対して施した呪いの残滓——残り香のようなものです」

男の目がサヴァロアンに移る。その視線の意味を悟り、サヴァロアンが応じた。

「ええ、私が彼にかけたものです」

男は頷き、一呼吸を置いて再び語り出した。

「人に対する呪いの多くは、実は暗示です」

「暗示だって？」

「はい。相手の精神に暗示をかけ、それが肉体に反映されるのです。つまり、相手の意志が弱ければ弱いほど、呪いは成功しやすい」

「では、強い時は……」

「高確率で失敗、仮にかかってもすぐに効力を失うでしょう」

リムが真実を知ってしまった以上、呪い——暗示をかけることは難しいと、男は言いたいらしい。

だがそのようなこと、男は端からわかっていたはずだ。その上で先ほど「方法はある」と言ったのではないか。

「確率が低くても構わん。方法があるというなら教えてくれないか」

「方法は、たった一つ。あなたが自分自身に呪いをかけることです」
「俺が？」

「十分な力があるとお見受けしました」

それだけを言って、男は口をつぐんだ。

言いたいことはリムにもわかった。リムに、自分の両目は茶だったと思い込めということなのだろう。それが、自分自身を騙すことができるほど強い願いであれば、呪いは成功するのかもしれない。

だが、力があると言われた所で、まったく自覚はない。

自信がなかった。同時に、それ以外の方法がないことも、理解する。

リムは諦めたように息を吐いた。

「わかった、やってみよう」

頷いて立ち上がる。

リム達は男の元を辞した。

その翌朝。鏡を覗いたリムは、呪いが成功したことを知る。

それが、いつまで保つかはわからなかったが……

しなければならぬ仕事だけを片づけると、リムは早々に城を辞した。

ささいなきっかけで、瞳の色が元に戻らないと言い切れない。人前で戻ればほぼ確実に騒ぎになる。それはやはり避けたかった。この呪いが、その場しのぎの気休めに過ぎないことは、誰よりもリム自身が理解している。

問題は、それをいつまで引き延ばすことが出来るかだった。

もう少して良い。時間が欲しかった。自分に科せられた「何か」の正体を知るまでで構わない。

「この双眸に込められた意味……か」

昨晚の占い師の言葉を思い出す。

——その瞳は、あなたに負わされたものの大きさを示しています。それは色を変えた所で消えるものではありません。ゆめゆめ、お忘れなきよう。

負わされたものとは何なのか。自分は何をすべきなのか。

「教えてくれよ。俺は、どうしたらいいんだ？」

リムは空に向かって語りかける。まるでそこに「誰か」が居るかのように。

当然の事ながら、返事などあるはずがない。ゆったりと穏やかな風がリムの傍らを吹き抜けていっただけだった。

その夜、リムは夢を見る――

*

「これが、何だと？」

眼前の男が問うた。頭髮には白いものが混じり始めていたが、声には張りがある。

手に持った本は、先刻自分が手渡したものだ。男が問うたのは、その本についてだった。

責めるような視線に、白いローブの青年は小さく肩をすくめた。「ですから、時読みですよ。先刻からそう言っているでしょう？ もつとも、『予言』と呼んだ方が良いかもしれませんが」

「誰の時読みだ」

「エルハツシエの、ですよ」

答えると、眼前の男は眉をひそめた。

「——未来を読んだのか？」

「ええ」

あつさりと青年が頷く。男の表情はますます不快そうに歪んだ。

「愚かな！」

苦々しげに吐き捨てる。

男が何を指して愚かと言うのか、青年には良くわかっていた。

時読みとは、内なる力を引きずり出して行うものである。

既に起きてしまった出来事を読むことは容易い。それは大気にそして大地に宿る記憶だからだ。術者はそれをただ「視る」だけで良い。

しかし、未だ起きていないことを知るためには、相応の対価が必要になる。対価は能力者の「力」だ。潜在能力と言っても良い。術者にとって最も大切なものである「力」と引き替えに、術者は未来を知ることが出来るのだ。

当然ながら、遠い未来であればあるほど、必要な対価も大きくなる。そして、術の成否にかかわらず、一度差し出したそれが術者に戻ることとはなかった。

その本に書かれている未来を読むために、エルハツシエがどれだけの力を削ることになったかは想像に難くない。男がエルハツシエを愚かと言ったのは、そういう意味だった。

「確かに、そうでしょうね。エルハツシエ位に在った者とも思えない。地位にしがみついたためであれば絶対に冒さない愚挙だ」

「……口が過ぎるぞ」

言われて、青年は口をつぐんだ。呆れたように肩をすくめる。

「とにかく、これをどうするかに関しては、ゼファーに一任しますよ。煮るなり焼くなり、お好きにどうぞ」

言い様、身を翻して部屋を出ていこうとする。その彼を、男が呼び止めた。

「ヨル」

「……何です？」

名を呼ばれて、青年が足を止める。振り返らぬまま投げた声は、ひどく冷ややかに響いた。

「エルハツシエは、今、どちらにいらっしゃる？」

厳しい声を背中に受けて、青年は一瞬苦しげに眉根を寄せた。昨晚の、エルハツシエの言葉を思い出して胸が痛む。

——為すべきことは為した。これ以上、私にすべきことはない。

あの時感じたことが正しければ、おそらくあの人はもう——

「どこにも……」

居ない、という言葉を口にすることは出来なかった。それは、誰よりも青年自身が認めたくない事実だった。

エルハツシエが——血を分けた、最愛の兄がすでにこの世に居ないのだと、認めることが怖かった。

背後で息を飲む気配がする。

凍り付いた時を動かすように、青年は扉に手を伸ばした。

制止の声はかからなかった。

それは、奇妙な感覚だった。

誰かの存在を、自分の上に感じるのだ。

自分ではない、けれどとても近しい気配。その存在はザイファの部屋で、そしてイーロスの占い師の部屋で触れたものに、ひどく似ている気がした。

「彼」に触れるのは初めてではない。あの晩——リムの封印が解かれたあの時から度々感じていた。

封印を解き、橙絲記の一節を教え、そして夢を見せる。それは全て「彼」の力によるものだったのだろう。今ではリムにもそれが良くなる。

「彼」に触れた後に残る、優しく、しかし哀しい想い。それらはリムの心の深い部分に直接触れてくる。

2度目の夢を見て以来、ヨルと呼ばれていた「彼」の存在を、リムは今まで以上に身近に感じていた。

自室の窓からは庭がよく見える。

妹のロスが丁寧な世話をしているのだろう。様々な色に咲き誇る薔薇が見事だった。

リムの肌が風を感じた。窓はしっかりと閉じられていたにも関わらず、その風はどこからか吹き寄せ、リムに触れた。

——覚悟は、できたかい？

そんな声が響いてきても、リムは驚かなかった。彼と話ができる時を待っていたからかもしれない。

「『ヨル』？」

視線は窓の外に固定したまま、リムが問う。

——そうだよ。

「あの本に、呪いを記した？」

——そう、僕だ。ようやく君に声が届いたね。

ヨルが言葉を発するたびに、周囲には緩やかな風が起こる。まるで風が語りかけてくるようだと、リムは思った。

「あなたが、俺を？」

——うん。僕が、君を呼んだ。

「なぜ？」

橙絲記の滅びの予言。それを避けるための呪い。それにリムが触れたのは偶然ではないのだろう。眠る大地に目覚めを呼ぶという「光を宿す紅玉」が、深紅の左目と無関係とは思えない。

そのことは理解できる。しかし、理解することと納得することは別物だ。

リムは問わずにはいらなかった。

「俺に何をさせたいんだ」

——大地はずっと待っている。君が戻る時をね。

あの一節はリムを指しているのだとヨルは言う。リムの予想ははつきりと肯定された。

ヨルの声は静かだ。不安な思いに揺れ動くリムの心とはあまりにも対照的だった。

「……嫌だ、と言ったら？」

気づいたらそう口にしていた。同時に、ふつふつと反発が胸の内に沸き起こる。

冷静に考えれば、ヨルの呪いに従うことが唯一の道なのだろう。

この色違いの双眸でアーティノキアに居続けることは難しい。

だからといって、素直に是と言うことはできなかった。それではただ流されるだけのような気がする。

たとえ、失われてしまったリムの「居場所」が、そこにはあるのだとしても、簡単に受け入れられるものではない。

一瞬、思案するような空気がリムを包む。ややあつて響いてきた声は、リムが想像していたものよりもずっと穏やかなものだった。

——君が本当にそう思うなら、それで良いよ。

「なに？」

——確かに、君が目覚めるきっかけを与えたのは僕だ。けれど、選ぶのは君だからね。僕には、君に強制する権利はない。

ヨルの答えに、リムは哑然とする。拒絶が認められるとは思っていなかっただけに、あっさりと受け入れられて拍子抜けした。

「・・・それで良いのか、本当に？」

リムの声に、呆れた色が加わった。

脳裏に疑問が渦巻く。けれど、その程度の思いで俺を巻き込んだのかとヨルをなじることは、リムには出来なかった。

ヨルが残したという呪い。それは軽い思いから生まれたものではないはずだ。

本当にジェスタを救いたいと思ったからこそ、ヨルは呪いを施したのだろ。にもかかわらず、ヨルはリムの拒絶を受け入れようとしている。

——構わないよ。言っただろう？ 僕には答えを強要することはできないんだ。君が、決断するんだよ。

答える声は相変わらず穏やかだ。けれどそこには明らかな悲しみが宿っている。

その悲しみが風を通してリムに響いてきて、ひどく切ない。

「俺は、どうしたら良い？」

——判断を他人に委ねてはだめだ。これは、君に課せられたものなのだから。

リムは大きく首を振った。まるで子供が駄々をこねるように。

「でも、ヨル！ 俺には決められない。少なくとも、今はまだ無理だ。どうしたら良いのかわからないんだ！」

一瞬の沈黙。慰めるような優しい風がリムを包む。柔らかく暖かなそれは、どこか懐かしい思いをリムに起こさせる。

——ねえ、リム。答えを急ぐ必要はないんだ。君が、「答えを出すこと」から逃げ出しさえしなければ、それで良い。

ヨルの声がいたわりを含む。その声に促されるように顔を上げた。

「・・・本当に？」

——もちろん。決断は君のもの。後悔しないように、よく考えて。

「後悔しないように・・・。。それでも、ヨル。よく考えても、出た答えが君の望むものでなかったとしたら、どうするんだ？」

——仕方ないと言っしかないね。だって、それが君が選んだ「答え」なんだから。

「ヨル・・・」

——ね、リム。君がどんな答えを出したとしても、僕はそれを受け入れる。でもね、これだけは覚えていて。君は一族の血に連なる者。僕達の末裔^{すえ}。君がその瞳を持って生まれたことの意味を、どうか忘れないで。

「この瞳の意味・・・」

つぶやいて、天を仰いだ。何かをこらえるようにぎゅっと目を閉じる。

この瞳に宿るのは、ジェスタに眠る者達の思い。彼らの願いだ。それらを拒絶することなどできるわけがない。この身に流れるジェスタの血が、それを許さない・・・

——僕ら一族は、ジェスタという国と共に滅びてしまった。けれど、リム。君の瞳には緋色が宿っている。それは、一族が確かにこの世界に存在したのだという証でもあるんだ。リム。僕らが存在したと言っことを、歴史から消さないで欲しい。ジェスタの血を持ち、ア——ティノキアで育った君にならできるはずだ。

ヨルの声が——思いが響く。

リムは一度だけ大きく息をつくと搾り出すように言葉を紡ぎだした。彼の選んだ、その答えを。

「わかった」

包むような、穏やかな風が渡る。

——ありがとう・・・リム。

その声に、リムは首を振る。

感謝などいらなかった。彼が決断したのは、ヨルのためなどでは

ないのだ。

リムが再び大きく息をつく。
そうして次に目を開いた時、彼の双眸は本来の色を取り戻していた。

*

深夜である。

リムは自室の扉を開けると、闇に身を滑り込ませた。
今夜、イーロスを出るつもりだった。ここに戻ることは、もうないかもしれない。

幼い頃からずっとこの邸で育った。厳格な父と優しい母に慈しまれ、可愛い弟妹と共に過ごした年月。

幸福な日々だったと思う。血のつながりなどなくとも、彼らは皆、リムの家族だった。

もう、会うことはないかもしれないけれど……
「感傷……だな」

自嘲気味に笑う。暗い廊下に、リムの呟きが冷たく響いた。

足音を忍ばせて邸内を歩く。玄関の扉を押し開けた。今までに開いた中で一番重い扉だったかもしれない。

邸から一歩足を踏み出して、その影に気づく。

「行かれるのですね」

かけられた声はリムが想像していたとおりのもので、思わず苦笑が浮かぶ。

誰にも言わずに出ていこうと思ったのだが、彼がそれを許さないだろうことはわかっていた。

「やっぱりお前には見付かってしまったか、サヴィ」

彼の姿が見える位置まで歩み寄り、リムは更に苦笑する。サヴァロアンが、明らかに旅支度をしていたからだった。

「お供させて、頂きますよ」

「ああ」

素直に頷いた。思ったよりも一人で出ていくことを心細く思っていたようだ。自分の心が安堵の息を吐くのをリムは感じた。

反対するつもりなど、毛頭なかった。

「行こう、サヴィ」

リムがはっきりと告げる。サヴァロアンが微笑を浮かべて頷くのが見えた。

二つの影が、静まりかえった闇を進む。

迷いを断ち切るように門をくぐった二人はそのまま真っ直ぐに歩き続けた。

城門をくぐり、イーロスの街を足早に過ぎる。

彼らが後ろを振り返ることは、一度もなかった。

第3章 ファール・セ・リードに吹く風 - 1 -

吹き寄せる風には秋の気配が色濃い。

天気の良い日だった。

廊下を歩いていたレインは、ふと足を止めて窓の外を見遣った。色とりどりの薔薇が咲く庭は、彼の姉が大切にしているものだ。きつと姉は今日もその庭にいるのだろう。レインの足は自然に庭へと向かった。

赤い薔薇と緑の葉の間に、黄色い帽子が見える。白い羽根を飾ったその帽子は姉のお気に入りだ。レインは自分の予想が当たっていたことを知り、微笑を浮かべた。

「姉上」

近づきながら声をかける。姉が気づいて顔を上げた。

「レイン、ちょうど良い所に来てくれたわ。切り過ぎちゃって、どうやって運ぼうか困っていた所なの」

そう言ってレインの姉——ロスは華やかな笑みを浮かべた。

「姉上は本当に、この庭がお好きなのですね」

棘を落とすのを手伝いながら、レインは言った。ロスが頷く。

「ええ。手をかければかけただけ、綺麗な花を咲かせてくれる。植物は正直ね。自分が愛されているのか、ちゃんとわかっているのですもの」

「なるほど、名言だ」

割り込んだ声に、二人は驚いて顔を上げた。

声がしたのは門の方だ。二人の視線が一斉にそちらに向いた。声の主を見て、ロスが笑みを浮かべた。良く知った人だったからだ。

「ラージャ様！」

「やあ、二人とも」

言いながら、ラー ज्याは二人に歩み寄った。

ラー ज्याは時折、ヴェリア家を尋ねてくる。大抵は侯爵に面会するためだったが、その帰りには必ずロスとレインの相手もしてくれた。

ロスもレインも、この華やかな青年がとても好きだった。

「ラー ज्या殿、今日も父の所にご用事ですか？」

「ああ。君たちの父上にお知らせしたいことがあってね」

「それは、もしかして――」

ラー ज्याの言葉に、レインが瞳を輝かせる。だが、その思いを見透かしたか、ラー ज्याが申し訳なさそうに首を振った。

「残念だが、少し違う。別の用件だ。」

「そうですか……」

レインはがつくりと肩を落とした。慰めるようにロスが弟に手を伸ばしたが、彼女の瞳も落胆の色が濃かった。

レインとロスの兄であるリムは、1年前から行方が知れない。自筆の手紙が残されていたことから、彼が自分の意志で家を出たことは間違いないのだろう。

レインには、なぜ兄が姿を消したのかがわからなかった。

兄が赴任先の東部から戻ってからの数日。レインが兄と一緒にいられたのは、たったそれだけの時間だった。

綺麗で、優しく、強い兄。父よりも母よりも大好きだった。

それなのに。

レインに残されたのは一通の手紙だけ。

哀しかった。寂しかった。兄に逢いたかった。

何かを知っているはずの父は何も教えてはくれない。それは自分が幼いせいなのか。子供で、一人では正しい判断ができないからなのか。

だったら早く大きくなりたい。レインはそう思った。

そんな父に反発して家を飛び出そうとしたことも一度や二度ではなかった。その度にレインを止めるのは、姉であるロス役目だった。

哀しい瞳でロスは言ったものだ。「兄さまは必ず戻ってくるから」と。

ロスも確信していたわけではないのだろう。痛みに満ちた声は、誰よりも彼女自身に向けられたものだったから。

だから、リムの親友だというこの青年が、兄の消息を追っているのと聞いた時は嬉しかった。兄を案じている人が自分たち以外にいたことが嬉しかった。

けれど。

兄が消息を絶って1年。未だ、彼に関する情報はないに等しかった。

「気を落とすなと言うのは酷かもしれないが、あまり思いつめるなよ、レイン。お前を案じてくれる姉のためにもな」

「ラージャ殿……」

レインはラージャを見上げた。ロスは少し離れた所で別の薔薇の世話をしている。

ラージャは一步レインに近づくと、わずかに身をかがめた。

「任せろということは俺にもできない。必ず見つけ出すからと言う約束もできない。だが、少なくともお前達の気持ちはわかるつもりだ」

ロスの耳に入るのを嫌ったか、囁くような声だった。

「はい」

「何かあれば俺に言え。自分で探しに行きたいのなら最大限の助力をしよう」

「ありがとうございます……」

そう言って頷いたレインに、ラージャが笑みを浮かべる。

その真摯な表情を見て、レインは重く塞いでいた心が少し軽くなったのを感じた。

*

まったく……

ヴェリア家を辞したところで、ラージャは重い息をついた。

リムの行方は杳として知れない。

兄の行方を案じる姉弟の姿を目にするたびに、ラージャはやりきれない思いがした。

リムが姿を消したのには、それ相応の理由があるのだろう。

貴族階級を疎ましく思っていたとはいえ、「侯爵家の嫡子」という肩書きを背負っている以上、その責任の重さは自覚していた男だ。深い理由もなく、それらを放り出すとは到底思えない。

もちろん、その理由は軽々しく口にすることができないものなのだろう。だからこそ、あれほど可愛がっていた弟妹にさえ、一言も告げなかった。

黙って姿を消したらあの2人がどれほど悲しむか、わからなかったはずがない。

だが、敢えて失踪した。

今までの自分を捨てることさえ決意したというのか。

そこまでして成さなければならぬ「何か」とは一体何なのだろう。ラージャにはわからなかった。

「なぜ俺が、お前の騎士位剥奪を侯爵に報告せねばならんのだ……」

「」

吐き捨てる。

それが、今日ヴェリア家を訪ねた理由だった。

失踪直後から、騎士位剥奪という意見は出ていた。女王の怒りもかなりのものだった。

当然だろう。リムに対する女王の寵は深かったし、裏切られた気分だったはずだ。

にもかかわらず、結論がここまで引き延ばされてきたのは、女王

自身、リムが戻るのを期待していたからである。

もちろん、女王のみならず、アイラスやラージャが進言したのも大きかった。

しかしながら、1年を過ぎた今でも、消息すら掴めない。

これ以上彼を擁護することは、さすがに難しかった。

妥当な結論だとは思う。

相応の地位に就いておきながら、その責務を無断で放棄したのだ。謀反を疑われても仕方のない行為だ。

追捕命令が出なかったただけかもしれない。

だがまさか自分が、引責という形で謹慎を続ける侯爵にそれを告げる羽目になるとは思っていなかった。

「――馬鹿が」

再び吐き出した声はひどく苦々しく響いた。

「ラージャ」

背後から声をかけられた。

騎馬隊の詰め所へ戻ろうと、城門を越えた時だった。

思っても見なかった人物の出現に、ラージャは驚いて足を止める。

「これは……アイラス殿下」

振り返って片膝をついた。アイラスは小さく首を振ってラージャを立たせると、視線で壁際を指す。

どうやら人に聞かれない話のようだ。

ラージャは無言で頷くと、アイラスの後ろに従った。

「……彼の行方は？」

単刀直入な問いだ。

彼女の顔には陰りがある。ラージャは心苦しく思いつつ、首を左右に振った。

「いまだ何も。ザハリアの者にも何かあればすぐに知らせるように言っているのですが――」

「そう……」

ラー ज्याの答えに、アイラスは落胆の色を隠さない。

リムが失踪した直後、ラー ज्याはアイラスに呼び出された。行方を追って欲しいと秘密裏に命じられたのである。

彼女がこれほどまでにリムを氣遣うその理由を、ラー ज्याはその時まで知らなかった。

もちろん、はっきりと教えられたわけではない。だが、ラー ज्याもそこまで鈍くないつもりだった。

いつも毅然としていた王女。その瞳に浮かんでいた不安げな色。そこには彼女の暖かな想いが宿っていたのである。

王族が嫌いだと言っておきながら王女に手を出すとは、なかなか侮れん奴だ。そう思うと同時に、なぜかひどく納得できる氣もした。

ラー ज्याはこの命を二つ返事で了承した。

ラー ज्या自身、リムの行方は氣がかりだったし、アイラスに言われるまでもなく、彼の消息は追うつもりだった。

出世ばかりを目指す騎士達の中で、彼だけが唯一「友」と呼べる存在だったから。

「——今、ヴェリア侯爵にお伝えしてきたところです」

ラー ज्याは声を潜めて告げた。アイラスが顔を上げる。

「……侯爵は、何て？」

「陛下のご意向であれば従うのみ、と」

ラー ज्याの返答に、アイラスは更に表情を曇らせた。

「そう」

細く呟いて、それきり口を閉ざす。

二人の間に重苦しい沈黙が降りた。

先にそれを破ったのはラー ज्याだった。

「アイラス殿下」

「なに？」

「リムは戻ってくるような氣がいたします。いつとは申せませんが

……」

アイラスを慰めるためだけでなく、本心からそう思う。

あいつが、アーティノキアを捨てるわけがないのだ。

王家への不満を隠さなかったリム。それは裏返せば、アーティノキアを思うが故だ。

あいつはいつだって、国を——民を護る騎士であることを誇りに思っていた。

どんな形になるかは分からない。けれど絶対にリムはここに戻る。そんな気がしてならなかった。

「ええ、そうね」

ラージャの声にアイラスが頷く。

話はそれで終わりだった。そのまま黙って一礼する。

きびすを返したラージャの背中に、アイラスが声を投げた。

「……ありがとう」

その声には少しだけ明るさが戻っていたようにラージャには感じられた。

第3章 ファール・セ・リードに吹く風 - 2 -

今夜は満月だろうか。

明るいう月明かりに照らされる庭で、女は一人空を見上げていた。まだ夏の名残はあるものの、吹き寄せる風には秋の気配が混じり始めている。

「こんな所にいたのか」

背後からかけられた声。耳になじんだそれは、愛する夫のものだ。女はにこりと笑うと、後ろを振り仰いだ。

「ええ、今夜は月が綺麗だったから」

女が答えると、男は仕方なさそうに小さく肩をすくめた。

「確かに、今夜の月は美しい。けれど、もう遅い。あまり身体を冷やすものではないよ」

手に持った薄布を女に羽織らせて、隣に腰を下ろす。優しい瞳で彼女を見やった。

「腹の子が風邪をひいたら困るだろう？」

男が言くと、女は笑った。

大きなお腹を愛おしそうに撫でる。

母親の手の動きに応えたのだろうか。胎児がわずかに身動きした。

「そうね。それは確かに困るわ」

「だろう？ もう臨月なのだから大事にしないと」

そう言いつつも、男は無理に女を部屋に戻そうとはしなかった。

「次の満月は、この子と一緒に眺めたいものだわ」

女が月を見上げて呟く。

出産は、もうそれほど遠くはないだろう。

男の子だろうか、女の子だろうか。

どちらでもかまわなかった。愛するわが子に変わりはないのだから。

けれど。

「できることなら・・・」

言いかけて、女は口を噤んだ。

——できることなら、緋色を持たずに生まれて欲しい。

湧き上がった想いを胸の内に押さえつける。

ハツシエの子だからといって——否、ハツシエの子だからこそ、
緋色を持っていて欲しくなかった。

ゼファー内部の争いは醜い。

誰もが自身の力を誇示し、隙を見つけては他者を追い落とそうとする。

そんな殺伐とした世界に、わが子を巻き込ませたくなかった。

彼女はハツシエだ。一族の頂点に立つ者だ。生まれてくる子は「
ハツシエの後継たる者」として見られるだろう。そこに親や本人の
意思が介在する余地はない。

わが子に苦しい思いをさせたくない願うのは、果たして親の身
勝手なのだろうか。

女は表情を曇らせた。

男は、そんな妻の様子を静かに見守ることしかできなかった。

*

「リム？ どこ？」

呼ぶ声が聞こえる。

リムは億劫そうに、草の上に横たえていた身体を起こした。

衣に付いた葉を手で払い落とし、声の主の姿が現れるのを待つ。

白く伸びた道の向こうから、12〜3歳と思われる少女が近づい
てくるのが見えた。

「リム！」

少女は彼の姿をみつけると、大きな声で呼んだ。

「やあ、チェチェ」

飄々とした顔で答えるリムに、チェチェと呼ばれた少女は瞳を怒

らせた。

「こんなところで何をしているのよ!」

「何って、昼寝」

「もう、どれだけ探したと思ってるの!？」

リムはあくまで態度を崩さない。少女の怒りを逆なでしたいのだろうか。

案の定、チエチエは顔を赤くすると、更にリムに言い募った。

「出かけるなら出かけるってちゃんと言っておいてよね。おかげで私が怒られたじゃないの」

両手を腰に当てて、座ったままのリムを見下ろしてくる。

どうやら昼寝の時間は終わらしい。はいはいと軽く流しておいて、リムは立ち上がった。

「それで、サヴィは何だった？」

歩きながらリムが少女に問う。大方サヴァロアンに言われて探しに来たのだろうと当たりをつけたのだが、おそらくは間違っていないはずだ。

案の定、チエチエは軽く頷くと、渋い顔でリムを見上げてきた。

「知らないわ。サヴァロアンはいつだって、詳しく教えてくれないもの」

「まあ、そうだな」

苦笑しつつ、リムはチエチエの言に頷いた。

サヴァロアンは職業柄か、余計なことは口にしないことが多い。

リムからしてみれば説明不足だと思ふときもあるのだが、幼い頃から身に染み付いた習慣なのだから仕方がない。

「わかったら、さっさと帰りましょ。これ以上遅くなったらまたサヴァロアンの雷が落ちるわ。今度は私だけじゃなくて、あなたの上にもね」

その光景を想像したのだろう。チエチエはため息をついた。

確かに、わざわざリムを探しに来させるくらいだ、それなりの理由はあるのだろう。

サヴァロアの小言は長い。なるべくなら遠慮したかった。
「仕方ないな、少し急ぐとするか」
リムが言うと、ようやくチェチェは安心したように笑った。

*

セリテア大陸南部の小さな町、ディア・アルカ。

かつてジエスタと呼ばれていたその土地は、現在ではアーティノキア領土であり、住民の殆どはアーティノキア人である。

たった20年が過ぎただけだというのに、今ではジエスタという国が存在していたことさえ知らない人の方が多い。

意外なことではないかもしれない。

アーティノキアの侵攻によって、ジエスタ人の大半が命を奪われた。世界は広い。あの大火の中、生き延びた人々は居ただろう。だが、悲しい記憶の残るこの地にとどまるものは皆無に近かったに違いない。

イーロスを出奔したリムとサヴァロアは、すぐにこの地に落ちていたわけではなかった。アーティノキアを見てみたいとリムが望んだからだ。

騎士団に居ては見えないことも多い。現在の国の姿を自分の目でみることは確かに意味のあることかもしれない。

半年間、放浪に近い旅を続けた。

リムの顔を知る人の多い東方地域さえ、リムは自分の足で歩いた。税がどのような形で納められているのか。民の暮らしはどうか。生活は厳しいようだった。だが、民間には穏やかな流れがある。国の姿勢がどうであろうと、彼らは自分達の生を営むだけだ。

その傾向は、首都イーロスや各騎士団の本拠地などの大都市から離れれば離れるほど強くなる。けれど、それに比例するかのように、貧困層も厚くなっていくようだった。

ディア・アルカに到着したのは、今から三ヶ月ほど前のことにな

る。

旅費が尽きかけていた。

リムは、時として、剣の腕を生かして傭兵のような仕事をしていたが、その稼ぎには限度がある。国内はほぼ回り終えたし、しばらく腰を落ち着ける必要がありそうだった。

そんな時、この町にたどり着いたのだった。

ここが、かつてジェスタの町が置かれていた場所だと知るまでに、時間はかからなかった。

チエチエという少女に出会ったのは、彼らがディア・アルカに入って10日ほど経った頃だ。

彼女は、こともあるうちに、リムの財布を掏り取ろうとしたのである。

だが、イーロスにいたときと違い、現在のリムには寄付をしてやるだけの余裕がない。結果、チエチエはすぐに捕まり、今までの所業を洗いざらい喋らされることになった。

盗むのは、生きるためだ。身寄りのない子供が、一人で生活費を稼ぐためにはこうするほかなかった。チエチエはそう言った。

なるほどその通りだ。リムにもサヴァロアンにも、返す言葉はなかった。

縁とは不思議なものである。何が彼女の気に入っただのかは知らないが、以来、チエチエはリムたちの元に入り浸るようになった。

聞けば路上で野宿をするような生き方だったらしい。

結局、なし崩し的にチエチエを養うことになってしまったというのが実際のところだった。

ディア・アルカの中心部から少し離れたところに小さな家がある。お世辞にも立派とはいいがたい。だが周囲に建つ家はどれも似通ったものだ。この町で立派な建物といえば、町長の家くらいだろう。外はまだ陽が高い。しかし室内は幾分薄暗かった。

サヴァロアンは手元にある書簡に視線を落とすと、小さい、けれど重い息を吐いた。

差出人は「ハルラ」とある。

知らない名だ。けれど、その内容はサヴァロアンの心を押しつぶすには十分な力を持っていた。

——東方の紫紺石しこんせきがファール・セ・リードを照らすだろう。

心せよ。

目覚めの時は近い。

この言葉が何を示すかは、少し考えればすぐにわかることだった。紫紺石というのは、その名の通り、濃い紫色の石である。希少性が高く、高価な宝石だ。

これはアーティノキア王家の象徴石でもある。

ディア・アルカから見てイーロスはおおよそ東北東に位置することから、「東方の紫紺石」とは「国王」を意味すると考えて間違いないだろう。

そしてそれが照らし出すと言う「ファール・セ・リード」とは——
「ただいま」

不意に戸口から飛び込んできた明るい声に、サヴァロアンは思索を妨げられて顔を上げた。

「お帰り、チェチェ。リム様は？」

「もう、開口一番にそれ？ もちろん、探してきたわよ」

そう言っただけで笑ったチェチェは実に得意そうだった。褒めてくれと言わんばかりの様子にサヴァロアンも苦笑するしかない。

からりとした性格はこの少女の長所だろう。良くやったと声をかけると、チェチェは満足そうに頷いた。

「それで、俺の昼寝を妨げてまで呼び戻すほどの用事とは何だ？」

チェチェの後に続いて入ってきたリムが問う。

「ええ……」

サヴァロアンの返事は歯切れが悪い。何かを察したチエチエは、ぼんと一度手を叩くと明るい声を上げた。

「晩御飯の買い物に行かなきゃいけないんだった。全く、サヴァロアンが用事を言いつけるから、すっかり忘れちゃったじゃないの」
軽くサヴァロアンを睨みつける。二人の返事を待たずにチエチエは、じゃあねと手を振ると扉を出て行ってしまった。

まったく・・・

彼らに気を使って席を外したのだろうチエチエに、サヴァロアンは内心で舌を巻く。

チエチエは、周囲の感情に敏い娘だった。

リムも同じ思いだったのだろう。サヴァロアンと視線を合わせると、参ったというように苦笑した。

が、すぐに表情を改める。

サヴァロアンと向かい合うように腰を下ろした。

「さて、それじゃ詳しく聞かせてもらおうか」

そう声を潜めて言うリムに、サヴァロアンは神妙な面持ちで頷く。手に持った紙片を主に差し出した。

「王都から届いた書簡です」

サヴァロアンの言葉に、リムの顔が凍りついた。

「……イーロスからの書簡だった？」

問い返した声はひどく歪んでいた。

リムは、サヴァロアンから受け取った書簡を手早く開いた。記されているのはたったの一節。神経質そうな硬い文字だ。

見知った筆跡ではない。そのことに安堵する自分がいた。

居所を突き止められたわけではないようだ。自分で意識している以上に、見つかることを恐れていたのかもしれない。

だが、それも一瞬のことだった。すぐに、文面の不審さに気づく。あまりに抽象的過ぎる文章だ。

嫌な感じがリムを覆った。ざわざわと、濡れた手が背筋を辿るような不快感を覚えた。

整然とした書簡だ。だが、整然としすぎていて逆に気持ち悪い。リムはその不快感を払うように、小さく身を震わせた。

「東方の紫紺石は国王のことか。このファール・セ・リードというのが良くわからないな」

ざつと目を通してリムは呟いた。

「ファール・セ・リードと言うのは、このことですよ、リム様」

「ここ？」

「はい」

頷いて、サヴァロアンが説明をする。

「ファール・セ・リードは『祝福されたもの』という意味です。古代ジェスタ語ですね」

「へえ。ジェスタの民はこの場所を、祝福された土地だと思っているのか」

「ここがディア・アルカと呼ばれるようになったのは、アーティノキアに併呑されて以降です」

「なるほどね」

サヴァロアンの説明でようやくリムにも合点がいった。

どうやら、手紙の差出人はリムに忠告をしてくれたらしい。国王がリムの居場所に気づく時は近いと言いたいのだろう。

「ご丁寧なことだ。」

「で？ この『ハルラ』ってのは？」

差出人の名前を指して、リムが問う。知らない名だが、わざわざ書簡を送ってくるくらいだ。自分達と無関係の人間とは思えない。

誰かが偽名でも使って送ってきたか。そう疑いたくもなるが、あいにくリムには、こんな予言めいた文章を書く知人はいなかった。リムの問いにサヴァロアンもまた、首を左右に振って否定する。

「わかりません。心当たりはありますが――」

「誰だ」

自然、語気が強くなった。リムの居場所を突き止め、頼んでもいない忠告を送ってくる。不審なことこの上ない。

「占い師ですよ」

サヴァロアンは神妙な顔つきで言った。声も、表情に負けず劣らず苦味が強い。

だが、その内容がリムを驚かすことはなかった。

リム自身も予想していたのかもしれない。否、それは確信と言い換えても良かった。

この文面を見た瞬間から、リムの脳裏にはある男の姿がちらついていたのだ。

「確証はありませんが、恐らく間違っていないと思います」

「だろうな。俺もそう思う」

リムは肩をすくめた。

あまりに予想通りの結果に、少々気が滅入る。

いかにも胡散臭かった例の占い師。何もかも承知と言わんばかりの態度をとるくせに、はつきりと告げようとはしなかった。

温かみの失せた、感情の宿らない表情を思い出せば寒気がする。

それがなぜ、今になってこんな書簡を送ってくるのか。それ以前

に、なぜリムがここにしているののかも大いに疑問だ。
敵か味方かもわからない。そんな男の忠告を喜んで受け入れるほどおめでたくはない。

リムは不吉な物でもあるかのように、忌々しげにそれをテーブルに放り出した。

「どうする？」

視線は書簡から離さずに、リムは問うた。

サヴァロアンは主の質問の意味を正確に読み取ったようだ。首を左右に振る。

「これだけでは、判断のしようがありませんね」

「一体、何者なんだろうな、このハルラという男は」

わかりませんと答えておいて、サヴァロアンは先を続ける。

「少なくとも、我々と無関係ではなさそうです」

「関係、ね」

リムは嫌そうに顔をしかめた。

「関係があるうがなかるうが、はっきり言ってどうでもいい。わざわざ忠告を下さったんだ、ありがたく受け取っておこうじゃないか」
嫌味満載の口調でリムは言った。もちろん本心ではない。本音を言えば、ちつともありがたくななどないのだ。

サヴァロアンは反論しなかった。リムの言葉に同意したわけではない。いくら怪しいといっても、この書簡は無視できない重みを持っている。サヴァロアン自身、そう考え、受け止めるのが賢明だと判断したからだった。

サヴァロアンはテーブルから書簡を取り上げた。元通りに小さく折りたたむ。

話は終わりだとばかりにリムが立ち上がった。

纏わりつく重苦しい空気を振りほどくように大げさに伸びをする。

「ただいま」

様子を伺っていたのかと思わせるような絶妙の頃合で、チエチエの明るい声が室内に飛び込んできた。

＊

今夜は満月か。

リムは自室の部屋から夜空を見上げて思った。直後、苦笑が彼の顔を彩る。

昼寝していた時に見た夢とそっくりな物言いだと思ったのだ。

「あれは、いつの話なんだろう」

虚空に向って呟く。

腹の大きな女と、その夫らしき男の会話。

女は緋色の双眸で乳白色の月を見上げていた。

幸福そうだった。出産が近いのだ、母親としては当然だろう。

だが、男の方は沈鬱だった。

彼にとつても生まれてくる子は我が子だろうに、何をそれほど憂うことがあるのか。そう尋ねなくなるほど冴えない表情が、強く印象に残っている。

リムは良く夢を見る。

状況を客観的に見ることもあるし、登場人物の誰かの意識に重なるようにして見ることもある。

男性女性はもちろん、老人になったり子供になったり、その時によつて様々だ。

ヨルに触れて以来、過去を夢に見る回数は少なくなかったが、この地に落ち着いてからは更に増えた気がする。

夢見。どうやら、それがリムの力——占呪師としての能力らしかった。

大地に、そして大気に宿った記憶が夢という形で現れる。

意識を保っているときはまだ良いのだ。力が強いとはいえ、白昼夢を見ることはほとんどない。

だが、少しでも気を緩めると、それらはすぐ意識に忍び込んでく

る。ちよつとした午睡の時にも見るものだから、リムとしては気軽に転寝もできない。うたたね

過去を読みたいと望んで眠ったこともある。しかし、得てしてそういう時ほどうまく行かないものだ。

自分の意思で能力を制御することは難しい。身に付けようと努力はしているが、未だ上手くできずにいた。

「そつえば……」

ふと、何かを思い出してリムは呟いた。

夢の中の女はハツシエだった。そう言っていたと思う。

ヨルの時代はエルハツシエという呼称だったはずだから、それほど昔の話ではなさそうだ。

リムはあの夢を見た時、近いと思ったのだ。あの二人は、自分に近いと。

彼女の気配を懐かしいと感じた。

リムはレス一族の血に連なる者だ。直系ではないかもしれないが、ハツシエであつたあの女性と血のつながりがないとは言ひ切れない。もちろん、あの二人が自分と深い縁を持つなどと思っているわけでもない。だが、そうであつたら良いと思う気持ちが、心のどこかにはある気がした。

腹の子は深く慈しまれていた。愛情を注がれ、誕生の時を心待ちにされている。

自分はどうかつたのだろう。リムはそれを考えずにはいられなかった。

侯爵に拾われたとき、リムとサヴァロアンはみすばらしい形をしていたという。

リムも、そして力が弱いとはいへサヴァロアンも緋色を宿している。二人とも、レス一族の生まれだと見てほぼ間違いない。

レス一族はジェスタの中枢を担う者だ。貧しい暮らしをしていたとは考えにくい。にも拘らず、彼らの衣服は粗末なものだった。

それはなぜか。

出自の真相を知りたいと思った。

昼間見た夢のように、慈しまれて、望まれて生まれてきたのだと信じたい。

「そう思うことは甘えだろうか」

リムの声は、夜の闇に吸い込まれてゆく。

生みの両親がどんな人間だったかを知りたいわけではない。全く興味がないわけではないが、重要な事柄ではなかった。

リムが知りたいこと、それは彼の生に意味があるのかということだ。

普通に考えれば意味はあるのだろう。それはヨルの言葉が証明している。

ジエスタにとってリムは重要な存在だ。呪いを現実のものとし、ジエスタに目覚めをもたらす。

だが、それは飽くまでジエスタにとってだ。リムにとっての意味ではない。

リムは知りたかった。

自分は、ただ一つの生命として、必要とされていたのかどうかを

—
*

暗闇に響く足音は二人分。ばたばたと荒っぽく、ずいぶんとあわただしい。

「お待ちください！」

甲高い女の声が飛んだ。先を走る人影に向って声を張り上げている。

言葉遣いから、追う者の方が低位であることが伺えた。

「……待てないわ」

返事があった。こちらにもまた女の声だ。追う女よりも幾分高いが落ち着きがあり、ひどく冷やかだった。

どうしてこんなことになってしまったのだろう。逃げながら女は思う。

追いかけてくるのは、自分付きの侍女だ。

止まるわけには行かなかった。

「ごめんね、愛しい子。もう少し我慢してちょうだい」

女は腕に抱いた赤子に向って囁く。生まれたばかりの赤子に理解できるはずもないが、母の心を感じるのか、泣くこともなくじっと抱かれていた。

「良い子ね」

語りかける声は柔らかく暖かい。

女はひたすらに、走り続けた。

「ハッシエ！ 後生ですから！」

侍女が叫ぶ。こちらは泣きそうな声だ。

この侍女は氣立てが良い。よく働くし、氣も利く。とても氣に入っていた。

ここで自分が姿を消せば、侍女はその責を負うことになるはずだ。そう思えば可哀想な氣もしたが、だからといって立ち止まるわけにはいかなかった。

立ち止まれば、この子は奪われてしまう。

「ハッシエ！ そんなに走っては、お身体に障ります！」

「私はどうなっても構わないわ。……この子を渡すわけにはいかな
い」

女は逃げる。侍女が追う。

産後間もない身体に、このような疾走は苦痛以外の何物でもない。我が子を守るためでなければできないことだ。

大きな扉が見えた。あの扉さえ抜ければ、建物の外に出ることができる。

外に出たからといって安全が確保されるわけではない。

けれど、今夜は新月。闇に紛れれば、逃げ切ることも不可能では

ないはずだ。

女は自分を鼓舞しながら、尚も走る。

足が重い。息は絶え絶えで、よく倒れないものだと思っても思いつ。子供を守るという気力だけで女は走り続けた。

あと一歩で扉に手が届く。その瞬間――

「叔母上」

暗がりから、別の声が割り込んだ。

幼い子供の声だった。

「叔母上、こちらへ」

女は逡巡し、そのまま眼前の扉へ手を伸ばした。大きくて重いそれを渾身の力で押す。

鍵はかかっていない。耳障りな音を立てて、扉は開いた。開いておいて、身を翻す。

扉は自重で再び閉じ、その音に紛れて、女は声が聞こえた暗がりへと転がり込んだ。

「ハッシエ……！！」

切羽詰った侍女の声と足音とが通り過ぎてゆく。

侍女が女を追って表へ出たのだろう。扉が開閉する音が周囲に響いた。

女は、赤子を抱えたままうずくまった。できるだけ静かに深呼吸を繰り返す。

きりきりと痛む肺が落ち着くまでは時間がかかったが、その間に女が誰かに発見されることはなかった。

なぜここにいるのか。

視線だけで女は問うた。目の前には幼い少年がいる。

叔母上と呼ばれた時点で、女にはそれが誰なのか理解できていた。彼女を叔母と呼ぶ者は、この世に一人しか存在しない。

女には3歳違いの姉がいた。5年前、出産時に落命したのだが、その時産み落としたのがこの子だった。

腕に抱く赤子の次に、自分に近い血を持つ、甥。

「ぼくが、連れてにげます」

密やかだが意志の強い声だ。女は息を飲んだ。

「そんなこと、させられないわ」

女もまた、断固として首を左右に振った。

少年は姉の忘れ形見だ。その子を、追われる立場に置くわけには行かない。

「それでは、その子はどうなるんです？」

誰が連れて逃げるのかと、少年は訴えた。じつと赤子を見つめる。彼女は赤子を抱く両腕に力を込めた。

この子は「約束」を背負った子。相反する役目を一身に担うことを定められて生まれてきた。

絶対に、失わせるにはいかなかった。

この子を失うということは、一族の未来を失うということに等しい。

「私が何とかするわ。この子だけは守ってみせる」

「叔母上には無理です」

遠慮も躊躇いもなく、はつきりと少年は言い切った。

現実的に考えても、彼女に赤子を連れて逃げることは無理だと言っても良い。

それは誰よりも、彼女自身が理解していることだ。

腹部はずきずきと痛んでいるし、おそらくは出血もしているだろう。

この状態では、どこまで逃げられるかわからない。

それでも、やらなければならぬのだと女は思っている。

これは自分の役目だ。姉の忘れ形見にまで担わせて良いものではなかった。

「確かに、この子は大切な子。この身に代えても守るべき命だわ」

女は一度言葉を切る。真っ直ぐに見上げてくる少年と視線を合わせると優しく微笑した。

「けれど、私にとっては、あなたもこの子と同じくらい大切。この子はあなたにとって重荷になる。可愛い我が子に重責を背負わせないと思う親はいないでしょう」

「叔母上……」

「すぐに自室に戻りなさい。私と一緒にいるところを誰かに見られ

でもしたら、あなたまで疑われる。だから――」

女の言葉が最後まで紡がれることはなかった。

はつきりと女の脳裏に真紅が閃いて、息を呑んだからだった。

ざわりと肌を撫でる禍々しい気配。街が燃える様子が、幻覚のよう
に彼女の思考を埋め尽くした。

ついに来てしまった。女は思った。自然、赤子を抱く腕に力がこ
もる。

橙絲記とうしきに約束された滅びの時が訪れたことを、女は全身で感じ取
っていた。

まだ猶予があると思っていた。それがこれほどまでに早いとは――
今夜赤子をつれて逃げようと思ったのは、忌色を持った存在を、
ゼファーが認めようとしなかったからだ。

ジェスタで忌色といえば、紫。日没を思わせるその色は滅びに繋
がるとして嫌厭される。

ただ、紫をその身に受けたからというだけの理由で、ゼファーは
赤子の命を奪おうとしている。そのことに気づいたからだ。

だが、今の幻影で若干事情が変わった。変わったからといって、
彼女が取るべき行動自体は何も変わらないが。

我が子の命を奪おうとするものが身内ゼファーであるのか他国であるのか
の違いだけだ。

しかし、状況はさらに厳しくなったとも言えた。

ゼファーの目をくらませるためであれば、ジェスタ内部であつて
も良かったのだが、他国の侵略となれば、どうあつても国外へ逃が
さなければならぬ。

今の自分に、果たしてそれが可能だろうか。

「叔母上」

凍りついたように動きを止めた女に、少年が呼びかけた。

現実に戻されて、女は少年と目を合わせる。

「え……？」

思ったときには既に遅かった。腕にかかる重みが不意に消え去る。

赤子は、少年の腕の中に抱き取られていた。少年が、女から距離を取るように数歩退く。

「ロアン！……くっ」

少年の名を呼んで、赤子を取り戻そうと一歩踏み出した。が、腹部に強烈な痛みが走ってその場に膝をつく。

女は、少し離れた場所に立つ少年を見上げた。

彼の顔には静かな笑みが浮かんでいた。5歳の子供とは思えないほどの落ち着いた表情だ。

そこに彼の覚悟と決意を感じて圧倒された。

「叔母上——いいえ、母上。ぼくには本当の母上の記憶がありません。でも、ぼくは幸せです。ぼくには、ちゃんと母上がいる。弟もいる。この子は、僕が守ります」

「ロアン……」

「きつと、守ります。だから、母上——」

女の頬に涙がこぼれた。少年の思いが深く彼女を揺さぶった。

「わかったわ。あなたに任せます」

女は頷いた。

少年が女に歩み寄って跪いた。赤子を差し出す。

女は赤子を再び自身の腕に抱きしめると、頬にそっと口付けを落とした。

これが今生の別れになるだろう。私はこの子が成長した姿を見ることはできない。

女の胸に愛おしさが溢れた。

「愛しているわ。私の可愛い子」

それだけを告げて、女は赤子を少年の腕に預けた。

「……この命に代えても、必ず」

少年がしっかりと頷いた。その様子に、女は少しだけ笑った。

「あら、だめよ」

「え？」

「命に代えてなんて、絶対だめ」

女は両手を広げて少年を抱き寄せた。しっかりと腕に包み込んで、頬に口づける。先ほど赤子にしたのと同じように、愛おしさを込めて。

「あなたがいなくなってしまうたら、この子は一人ぼっちになってしまっわ。だから――」

女は、濡れた瞳を上げて真っ直ぐに少年を見た。

「あなたも必ず生き延びなさい」

厳しいことを言っているという自覚はある。この状況で子供二人が逃げ切るのがどれだけ難しいかなど承知の上だ。

それでも、彼女はそれを願った。

少年に、彼女の心は届いたのだらう。彼は満面の笑みで女に応えた。

子供らしい、あどけない笑みだった。

「――はい、母上」

少年はしっかりと赤子を抱きなおすと、女から身体を離れた。そのまま身を翻す。

二人の姿が夜に溶け込んでしまっても、女はしばらくその場を動くことができなかった。

このまま闇にまぎれて、少しでも遠くへ。彼女にできたのは、そう願うことだけ――

*

「さて、どうしたものだらうな」

リムは机に頬杖をついた。目の前には例の書簡がある。

結局の所、リムたちには術がない。国王が動くとして、その目的がわからなかった。

リムは当然お尋ね者だらう。国に叛意ありと受け取られていると考えて間違いない。

だが、彼一人を処刑もしくは捕縛するために国王自らが動くとは

思えなかった。

アーティノキアからみれば、確かにリムは謀反者ということになるのだろう。リムが取った行動を思い返せば妥当な線だが、胸は痛んだ。

とはいえ、たった一人ために国を動かすとは考えにくい。

「王都は今どうなっているのか」

リムが出奔した以上の何かがイーロスでは起こっているのだろうか。そしてその原因がリムにあると考えられているとか？

そうでなければ辻褄が合わなかった。

今現在、リムにはアーティノキアに対して仇為すつもりはない。

アーティノキアは祖国だ。ジェスタと自身に流れる血のために離れはしたが、戦いを起こそうなどという大それた思いは抱いていないのだ。

力が必要になることはあるかもしれない。けれどそれは最終手段だ。相手が武を持ってリムらを排除しようとするならば応じざるを得ないが、できることなら避けたかった。

平和主義を気取るつもりはない。ヨルとの約束を反故にするつもりは、もつとない。

だが、力に任せて事を起こしても、結果として不利益をこうむるのは自分自身であり、一般市民なのだ。リムには、一国と戦うだけの力などない。

リムはもはや「アーティノキア騎士」ではないだろう。失踪しておきながらまだ騎士位を保っていると考えるほどおめでたくはなかった。

だが、位などなくとも、リムの心はなんら変わっていないかった。

守ると決めたアーティノキアの民を害することは、リムの騎士としての誇りが許さない。

「一度探りを入れるか」

「イーロスに行かれるつもりですか？」

「……」

突然割り込んだ声に、リムは一瞬背筋を凍らせた。

まったく、いつからそこにいたのか。リムは止まった息をゆっくり吐き出すと、声のした方を振り仰いだ。

「……気になるんだ。何が起こっているのか知りたい」

「イーロスに行ってもわからないかもしれないよ」

サヴァロアンはリムの向かいに座った。書簡を挟んで、二人の間に沈黙が降りる。

先に沈黙を破ったのはリムだった。

「それでもいい」

「リム様」

「わからなくてもいいんだ。だが、遠くでただ待っているのは性に合わない」

突き詰めればそういうことだった。

ハルラという男が何者で何を知っているのかはわからない。ただ、落ち着かないのだ。

極端な話、あの占い師に会うだけでも良かった。自分自身の気持ちを納得させることさえできれば、この上ない収穫だと思う。

そうすれば、この揺らぐ心も少しは安定するかもしれないから。選ぶべき道が見えてくるかもしれないから。

ハルラが何を望んでいるのか。ヨルの——ジェスタの願いをどう扱うべきか。リムの運命を乗せた天秤の針は、まだどちらに傾くのか定まっていない。

サヴァロアンがため息をついた。リムに見せ付けるような、大げさでわざとらしい仕草だ。

その態度に少々むっとしながらも、自分の意見をサヴァロアンが容認したことを知った。

「あなたは昔から言い出したら聞かない。わかりました。行ってい

らっしゃい」

「サヴィ！」

「その代わり、一つだけ条件があります」

「条件？」

「チエチエを同行させてください」

「チエチエを？」

リムは意外な心持でサヴァロアンを見やった。

どんな条件をふっかけられるかと身構えていたのだが、チエチエを連れて行けというのは全くの想定外だった。

「あなたはイーロスでは顔を知られすぎている。細かく動ける人間がいた方が良いでしょう」

「それはそうだが……」

「チエチエは良く気が回る子ですし、身軽です。役に立つでしょう」
きっぱりとサヴァロアンは言い切った。

確かにその通りかもしれない。

褒められたことではないが、チエチエはスリを働いていた経験上、身軽で素早い。

イーロスではリムの顔を見知っているものが多いため、彼本人が無闇に動き回るのは危険だった。

彼女であれば、リムが自由に動けない間もきつとよい働きをしてくれるはずだ。

リムが条件に応じると返事をする、サヴァロアンは安心したようだ。が。

「くれぐれも気をつけてくださいね」

そう念を押すことも忘れなかった。

リムは神妙な表情で頷いた。くれぐれも、という言葉に含められた意味を重々承知しているからだ。

イーロスに戻れば、出奔したことを後悔するかもしれない。戻りたいと願ってしまうかもしれない。

だが、今のリムにそれを望む資格はない。少なくとも、自分の目指すものさえ確かではない状態では、抱いてはいけない想いだった。懐かしさにかまけて気を抜くようなことは、絶対に避けなければならない。

「サヴィ」

リムはおもむろに呼びかけた。目の前に座る——従兄に。おそらく間違いないはずだ。あの夢の赤子が自分であり、そしてロアンと呼ばれていた少年は……

「なんです？」

サヴァロアンはいつもと変わらない視線でリムに応じる。

意思の強い瞳は、幼い頃から変わっていない。彼が約束を守ってくれたからこそ、今の自分があるのだ。

「ありがとう」

「あなたのわがままは、今に始まったことじゃありませんから」

サヴァロアンが苦笑を浮かべた。

イーロス行きを許したことに對する謝意だと勘違いしたようだ。もちろん、今の話の流れから考えると、そう受け取るのが自然だし、立場が逆ならばリムとて同じように思っただろう。

そういう意味じゃないんだが。そんな思いを、リムは飲み込んだ。自分の思いが伝わらなかったことは少しだけ残念だったが、これでよかった気もする。

なによりも、詳しく説明するのは気恥ずかしい。

リムは気持ちをこまかすように、笑みを浮かべた。

衝動的に笑いが湧き上がってきて、リムは声を上げた。

くつくつと身体を二つに折り曲げるようにして肩を揺らした。

何がそこまでおかしいのか自分でもよくわからない。様々に入り混じった複雑な思いが、笑いという形をとって噴出したようだった。

ようやく波が収まり、感情が落ち着いてくると、リムは急に表情を改めた。笑いの余韻が残る濡れた双眸でサヴァロアンを見やる。

「お前がいてくれてよかったよ」

そう言ったリムの声は、直前の様子とは打って変わって真摯である。

「どうしたんです、突然？」

面食らったようにサヴァロアンが眉を顰めた。不審そうにリムを

見つめ返してくる。

言葉にも脈絡がないし、サヴァロアンでなくとも戸惑うことだろう。

「別に、どうもしないさ。ただ、言いたかっただけ」
不思議そうに首を傾げるサヴァロアンに、リムはそれだけを口にした。

ちゃんと説明になっていない。そう返されるかと思っただけ、眼前の従兄は仕方なさそうに苦笑を浮かべただけだった。

深夜である。

しんと静まり返った室内に、ぱらぱらと乾いた音が小さく響く。
机の上には一冊の本。窓から差し込む月明かりに照らされたそれを、吹くはずのない風がめくってゆく。

「兄上」

つぶやいてみた。

おそらく、音にはなっていないだろう。

実体を持たない彼に発声は不可能だし、仮にできたとしても、それを聞くための耳もない。

誰に聞かせるつもりもない呼びかけだった。

なぜ、こうして本に宿るように意思が遺されたのか、彼——ヨルにはわからない。

命がついえるとき無意識にそう願ったか、あるいは記した呪いの力にひきずられたか。

いずれにせよ、ヨルは自我を保ったまま、長い時を過ごしてきた。もつとも、その大半は眠っていたようなものだったが。

実際に目覚めたのは、彼の呪いを具現化する存在——リムがこの世に生を受けた時だった。

ヨルの先代エルハツシエである実兄——アスティローダ。彼の遺した予言と自分の施した呪いを一身に受ける形で、リムは生まれた。彼の双眸の色が異なるのはそのためだ。

それは、相反する宿命を背負っている証であり、予言と呪いとが「生きて」いることの証明でもある。

日没、つまり「沈む」ことを意味するとして、ジェスタにおいて最も不吉とされる色——紫。リムの持つ紫は、アスティローダの滅びの予言を示したものだろう。

一方、貴色の緋色はヨルの呪いの結果だ。ジェスタの滅びを眠りへと転じるために、そして大地に目覚めをもたらすためには、占呪師としての能力が絶対的に必要だった。

もちろん、リムの緋色の瞳は、彼の母親から受け継いだものであり、ヨルの呪いが色を換えさせたわけではない。ヨルの呪いがなければ、リムの瞳は両方とも緋色だったはずだ。

リムが占呪師としての力を受け継いでいたから、ヨルの呪いを具現化できるだけの能力を持っていたから、リムは橙絲記に選ばれたのだ。

いかにジェスタのためとは言え、自分がリムに与えた影響を考えると胸が痛かった。

呪いなど受けずに生まれたほうが、リムにとっては幸福だったかもしれない。たとえそれが一族の滅び、ひいては自身の死につながったとしても。

少なくとも、重い宿命など背負うことはなかった。

迷いと後悔がヨルの心に漣のように押し寄せた。自分には後悔する権利などないのに。

いくら悔いようと、どれだけリムに恨まれようと、ヨルにはそれを受け止める責任と義務があるのだから。

今のヨルを見たら、兄は何というだろう。

無責任なことをしたと、叱るだろうか……

——彼に、会いたい？

ヨルの内心を読んだかのように、風が応えた。涼やかな女性の声が大気を揺らした。

驚いた。まさか彼に応える存在があるうとは、思っていなかったのだ。

「シェ・リール？」

懐かしい名が、ヨルの口をついて出た。

ヨルは風使いだ。幼い頃から風の声を聞くことができた。

彼が扱う占いや呪いは、その殆どが風の力を借りて行っものだった。

た。力を貸してくれた風の名がそれだった。

——そうよ。……どうしてそんなに驚くの？

応えたシェ・リールの声は意外そうだ。ヨルの反応は、どうやら彼女の予想とは異なっていたらしい。

ヨルは少しだけ困ったように笑った。

「だって、またこうして君と話ができるとは、思っていなかったから」

——ばかね。

言葉は悪いが、その声は優しい。嬉しそうだともいえる。

「そうかな？」

——そうよ。あなたはもはや風の一部。私と同じ存在。こうして話ができるのは当然のことだわ。

「風の一部？　僕が？」

——他に誰がいるの？

心底呆れたようなシェ・リールの声。記憶の中の彼女と寸分変わらない物言いに、ヨルの心に懐かしさと安堵が流れた。

同時に、暗く塞いでいた心が晴れていくような気もした。

「そうか。……よかった」

——あなたの肉体が土に還ったとき、あなたの魂は風に還ったのよ。今は呪いがあなたをその書物に縛り付けているけれど。

「……兄上もまた、どこかに還っていったのかな？」

ぼつり、つぶやく。

還っていったのなら、良い。大気を巡り大地を辿り、いつか再び会えるかもしれないから。

——彼が恋しい？

ヨルの問いには答えず、シェ・リールが問いを返した。

「もちろん」

ヨルは素直に肯定した。

——あなたって本当に、憎らしい子ね。

風が周囲を揺らした。ため息のような風が橙絲記を撫でた。

窓を閉じた室内に風が吹く。それはとても奇妙なことだったが、風使いであるヨルにとってはごく自然なことだった。

「そうかな？」

——ええ。存在が失われてからも、あなたの心を占めているのは彼のことばかり。……妬ましいわ。

「確かに、大部分を占めているのは兄上のことかもしれない」

——！！　そういうことを平然と言つてのけるから、憎らしいというのよ。

橙絲記を取り巻く風が、少しだけ強さを増した。ひゅうと音を立ててヨルをなぶる。

言葉はきついが声音は静かだ。むしろ愛情さえ感じる。

それがわかるから、ヨルは微笑で応じた。

——悔しいわ。あの男は生きている間も死んでも、あなたの一番なのね。

「やきもち？　ふふ、可愛い」

——ヨル！！

「シエ・リール」

ヨルが、彼女の名を呼んだ。直後、風が止んだ。

「シエ・リール、君はさっき言つたじゃないか。僕はもう風の一部だつて。君と同じだつて。今の僕が一番そばにいるのは君だよ。それではご不満？」

囁くように語り掛ける。彼女の心に優しく届くように。

大気が震えた。

——本当に、憎らしい。

憎らしいといいつつ、その声に溢れているのはヨルへの深い思いだ。

彼女の思いがくすぐつたくて、ヨルは少しだけ照れたように笑つた。

「僕は、君が好きだよ」

——……そんな言い方はずるいわ。でも、今日の所はその告白に免

じて許してあげる。

浮き立つようなシエ・リールの声。強気な言い方がいかにも彼女らしくて、ヨルは少しおかしかった。

「ありがとう」

——どういたしまして！

声が響くとともに、風がヨルを優しく撫で、直後曇った。ため息のような音がヨルに触れた。

「……どうしたの？」

——……

風は答えない。返答に窮する気配に、ヨルは怪訝そうに彼女を呼んだ。

「シエ・リール？」

——あの子が心配だわ。

あの子。風が誰を指して言っているのか、ヨルはすぐに理解する。「リムのことだね」

一瞬の間が空いた。それは明らかな肯定の意を持っていた。

——あの子は似ている。……似すぎている。

「確かにそうかもしれない」

シエ・リールはまた、それ以上を言葉にしなかった。

言葉などなくとも、ヨルには、彼女の言いたいことが手に取るようにわかっていた。

リムと、ヨルの兄——アスティローダは似ている。

二人とも力がありすぎるのだ。ゆえに、見なくても良いものまで見えてしまう。

アスティローダはその重さに耐え切れず、全てを捨てた。

一族も位も、唯一の肉親であった弟も。そして、自分自身さえ捨てたのだ。

ジェスタの滅びを知り、運命を変えることのできない無力さに傷つき、そして絶望した。

そうせずにはいられないほど、その絶望感は深かったのだ。

兄のことを思い出して、ヨルは思う。それこそが、アスティローダの弱さだったと。

硝子の杯のように透明で繊細な彼の心は、未来を受け止めきれなかった。

容量を超え、あふれてしまった。杯ごと、壊れてしまったのだ。

けれど、あの子は違う。……違うと思いたい。

「大丈夫だよ、リムは大丈夫だ」

——そう願うわ。

ヨルの心を読んだか、風がつぶやいた。

しかしそれは肯定というよりも、祈りに近い声音だった。

*

男は、室内に入ると纏っていたローブを無造作に脱ぎ捨てた。

柔らかな絹のそれが、音もなく足元に落ちた。

床に触れたら純白のローブは汚れるだろう。しかし男はまったく頓着しない。

男は、苛立たしげに金色の髪をかきまぜた。

「……まだか」

思ったより、流れが遅かった。

動き始めてからもう一年が過ぎた。もどかしい思いは焦燥に形を変え始めている。

彼の読んだ未来、彼が望んだ結末はすぐそこまで迫っているはずだった。

だが——

「私の力が劣っているとしても？」

脳裏に浮かぶのは意志の強そうな色違いの双眸。滅びと目覚めとを併せ持った、あの青年だ。

自分の能力が、彼に敵わぬと思いたくはなかった。

「橙絲記の呪いは、それほど強いのか……」

男は苦々しげに吐き捨てた。

あの青年を取り巻く、不可思議で強大な力。それが橙絲記に由来するものであることはわかつている。

彼こそが、橙絲記に望まれた存在なのだという事とも。

その証拠に、彼が力に目覚めたと思われる頃から、自分が読んだ未来は少しずつ歪んできたではないか。

「いや、まだだ」

男の青い双眸に鋭い光が宿った。冷たくて暗いそれは、しかし強烈な強さで男を焼く。

約束を違えるわけにはいかない。

あの人が願ったものをこの手におさめるまでは、退くわけにはいかないのだ。

「見せてくれ、時の流れを——」

室内に、軽い水音が響いた。彼が触れるのは清らかな水を湛えた水盤だ。そこに誰かがいるかのように語りかける。

水に手を浸した。沈むと同時に、指先が色を変えてゆく。

まるで染料を塗布したように緋い——爪。

冬が近い。水はかなり冷たかった。だが、それにはかまわず、男は水盤に手を浸す。

男が手を動かすたびに水面は波立ち、清かな音を奏でた。

彼は願う。望んだ未来が映し出されるように、祈りをこめて水に触れる。

水が鏡のように像を結ぶさまを、男はただ黙って見守っていた。

空の狭さは相変わらずか。リムは目抜き通りを歩きながら思った。
アーティノキア首都——イーロス。

以前この通りを歩いていた時と、なぜこうまで立場が変わってしまったのだろう。複雑な思いでリムは王都の町並みを眺めた。

「本当に、大きな街ね」

隣を歩くチエチエは大きな目を輝かせて、露天に見入っている。

リムと異なり緊張感の欠片もない声に、リムは苦笑した。と同時に、肩が異様にこわばっていたことに気づいた。

どうやら必要以上に警戒をしていたらしい。これでは逆に怪しまれる。

チエチエの明るさがリムの緊張を解いた。サヴァロアンの言うとおり、彼女を連れてきたのは正解だったかもしれない。

「ああ、そうだな。セリテア大陸の中心地だ。大陸の流通の大半はこの街を通るから、珍しいものも多い」

何を見ているのかと横から覗き込むと、そこは銀細工を売る店だった。

どれも年代物だが、黒ずんでいない所から見ても、丁寧に手入れをされているに違いない。

おそらく、かなりの高値が付いているはずだ。

——っ！

リムの内側で、彼が震えた。

悲しいような痛いような、そんな思いがリムにも伝わる。

「ヨル、どうした？」

——あの耳飾は……

それきりヨルは沈黙してしまう。

耳飾と言われて再び棚を見ると、一つだけ、リムの目を捉えたものがあつた。

「店主、その耳飾を見せてくれないか」

指差して商品を示すと、店主は意外そうな目をリムに向けて寄越した。

「気に入ったかい？ でもあれは少々値が張るよ」

「構わない、見せてくれ」

「ああ、いいとも」

店主が陳列棚からそれを取り、リムに手渡してくれた。

ずいぶんと質素な耳飾だ。子供の小指ほどの大きさの銀板と、鎖につながれた小さな紅玉が飾りとして付けられている。銀板に施された彫り物はかなり精緻で美しい。

だが、見たところ普通の耳飾だ。さしたる逸品とも思えない。

隣にあった耳飾の方がよほど高級そうだが……

「これは何の模様？」

「さあね。花だってことはわかるが、名前までは知らないな」

——ユーリカだ。

「ユーリカ？」

ポツリとつぶやいたリムに、店主が不審そうな目を向けてくる。

それを適当にごまかして、リムはヨルの言葉を待った。

——ユーリカはジェスタの国花。夏に白い花が咲き、その後小さな赤い実を付ける。木は大陸中で生育するけれど、ジェスタの地でなければ花は咲かない。当然、結実もしない。

そんな木があるのか。リムは声に出さずに頷いた。

——その耳飾は……兄の物だ。

「なんだって!？」

思わず叫んだ。店主とチエチエがぎょつとしたようにリムを見る。リムはそれには一切構わず、鋭い視線を店主に向けた。

「先ほど、この耳飾は値が張ると言っていたな。何か曰くでもあるのか？」

「……俺も詳しく知っている訳じゃないがな、その耳飾には妙な力が宿っているんだと」

「妙な力？」

「ああ、未来だか過去だかが見えるとか」

——まさか！？

ざわりと心が騒ぐ。ヨルが息を詰めたのをリムは痛いほど感じた。
「そんなことが……あり得るのか？」

「知らん。これをつけたものは全員、直後に死んでいる。真偽など俺にわかるはずもない」

——あの耳飾には兄上の力の欠片が宿っている。欠片とは言え、普通の人間には強大すぎるものだ。

受け入れきれずに命を落とすのは当然……ということか。ヨルの言葉を引き継いでリムは内心重い息を吐いた。

「……あんたは付けたことがないのか？」

リムの問いに、店主が呆れたように首を左右に振る。

「俺は命が惜しいんでね」

「そうか」

「安く売って死人を増やしても寝覚めが悪いからな。それでも良いって言うやつに、それなりの値で売ることになっているんだよ」

わかったら返せと言わんばかりに、店主がリムに手を伸ばす。

だがリムはそれを拒絶するように耳飾を握り締めた。

「店主、すまないがこれをもらいたい」

言いながら、リムは自分の腕につけていた飾りを外した。

銀の台座に緑柱石と碧玉を配した美しい腕輪だ。もちろん安くない。
い。

いかに年代物とはいえ、小さな耳飾だ。代価としては十分見合うはず。

店主が探るような視線でリムを見た。おそらく、覚悟があるのか
図っているのだろう。

「いいだろう。だが、付ける時は自己責任で頼むぜ」

言って、店主はリムから腕輪を受け取った。目を凝らしてそれを眺める。布で磨き、陽にかざす。それを何度か繰り返し、満面

の笑みで頷いた。

「ずいぶん逸品だな。その耳飾だけじゃ釣りが来る。もう一つ何か選びな」

耳飾と腕輪とを交換し、リムは露店を眺め続けるチエチエに視線を落とした。

「チエチエ、お前が選んでいいよ」

「いいの？」

「ああ、俺にはこれ以外に欲しいものはないからな」

「ありがとう！」

嬉しそうに物色し始めるチエチエを眺めつつ、再び内なる声に耳を傾けた。

——ありがとう、リム。

「いいさ。着けても？」

周囲に不審がられない程度の小声で問う。

リムは能力者だから、身につけてもおそらく死ぬことはないだろう。だが、この耳飾は、謂わばヨルの兄の形見だ。無断で身につけるのは気がひける。

——構わないよ。むしろそうしたほうが良い。兄の力が、いざというとき君を護ってくれるはずだ。

「承知した。ではありがたく使わせてもらおう」

リムは、今付けている耳飾を外すと、買ったばかりのそれと付け替えた。

耳元で飾りが揺れる。銀板と鎖とがこすれるのか、さらさらと涼やかな音がした。

興味津々という様子で、店主が視線を送ってくる。

確かに、力のようなものを感じた。が、生命にかかわるような何かは感じられない。

「特に問題はないようだな」

「ほ、本当か？ み、未来は見えるか」

「見える——」

「えっ!？」

「——わけないだろう。ただの耳飾だよ」

意地悪くリムが笑うと、店主はがっくりとうなだれた。やはり、多少は何かを期待していたのだろうか。少々気の毒な気もする。

「安心しろ。偽物を掴まされたから腕輪を返せとは言わないから」

俺にとっては本当に価値のあるものだったのだから。言葉にはせずに呟く。むしろ、自分が手に入れるべきものだった。不用意に売り払わなかった店主に感謝してもいいくらいである。

ふとした疑問が浮かんだ。

リムは確かに能力者だ。しかも能力値的にはヨルや彼の兄に近いゆえに、耳飾の力とリム自身の力とが相殺しあって時を読むことはできない。生命に干渉することもない。

では、耳飾の持つ力よりも弱い能力の者だったらどうなるのだろうか。

まったく力がない者がつけた場合の結果は過去の例から明らかだが、多少の力を持つ者——たとえばサヴァロアンのような——が付けたら、もしかして時が読めるようになったりするのだろうか。

ためしにつけさせてみようか。

そこまで考えて、リムは苦笑してその考えを追い払った。

サヴァロアンにも多少の能力はあるが、かといって死なないという保証はない。

サヴァロアンに死なれては困る。

「リム、私これに決めたわ」

チエチエの明るい声が、リムを詮無い想像から現実に戻した。彼女が手に持っているのは、首飾りだった。飾り部分は花を象った物で、花の中心部分には小ぶりの金剛石がはめられている。

「お嬢ちゃんもなかなか良い目をお持ちのようだ。それもかなりの年代物だよ」

「ほう」

リムもそれを覗き込んで、感嘆の声を上げた。

本当にわずかだが、その首飾りからも力を感じる。耳飾同様、ジエスタで作られたもののようだ。

護符として、多少の役には立ってくれるかもしれない。

リムのそばにいる限り、当然チエチエにも危険がつきまとう。

気休めかもしれないが、それでも何も無いよりは安心できそうだ。「貸してみる。付けてやる」

チエチエの手からそれを受け取ると、リムは器用に金具を外した。そういえば、いつだったか妹のロスにせがまれて、こうして首飾りをつけてやったことがあった。

今のチエチエよりも、もう少しだけ幼い頃だったと思う。

あれは確か、毎年初夏に開かれる建国祭だったはずだ。アーティノキアを産んだとされる女神——アルティナをたたえ、祖国の繁栄と平和を祈る祝祭。

露天で売られていたそれは高価なものではなかったが、どうしてもそれがいいのだと、ロスは強請った。

ロスはあまり意識していないようだが、彼らは名家の生まれだ。

上流階級には上流階級としての、守らねばならない最低限度の品格があった。

リムとしては、あまり粗悪な物を身に付けさせたくはなかったが、ここで機嫌を損ねられても困る。

大きな祭でもない限り、城壁の外へ出してもらえない幼い弟妹のことを思うと、明るい気分に水を差すのは気が引けた。

結局、ロスにはその首飾りを、弟のレインには細身の腕輪を買ってやった。二人ともとても嬉しがって、しばらく外さずにいたのをよく覚えてる。

脳裏によぎった懐かしい面影に、リムの手が止まった。

ロス、そしてレインは元気だろうか。

血の繋がらない弟妹だとわかったからとて、二人を可愛いと思う気持ちはそう簡単に変わるものでもない。

「リム？」

怪訝そうな視線が、下から見上げてくる。

哀愁を振り払うように首を左右に振り、リムは首飾りの金具を留めた。

「チエチエ、なるべく服の下に隠して、外からは見えないようにしておくといい」

「なぜ？」

「見る人が見れば値打ち物だとわかる逸品だ。そうでなくとも、服装にそぐわない飾りだろう。そんなものを付けているのが知られれば、あつという間に身包みを剥がされるぞ」

「そうなの？」

「ああ。イーロスは何物だからな」

「わかった」

素直に頷くチエチエに、リムもまた頷く。

「お守りだ。外すなよ」

自分が背負ってしまった重責から生じる火の粉がチエチエに降りかかるのを、少しでも防げればいい。

リムは、無邪気に喜ぶ少女の顔を見て思った。

細い路地を、少女が人目を避けるように歩いている。

身なりは良いとはいえないが、粗末という程でもない。簡素というのが一番近いかもしれない。

——寒い。

少女はふるりと身体を震わせた。羽織っている上着は薄手で、深まり始めた秋の夜気を防ぐにはいささか心もとない。

ずいぶん遅くなってしまった。宿では彼女の連れが痺れを切らして待っていることだろう。

帰ったらお説教かな。苦笑交じりに内心でぼやき、少女は小路を曲がった。

「——！」

瞬間、少女が足を止める。

眼前には5人の少年たちの姿があった。少女を逃がすまいと取り囲んでいる。

主格と思われる少年は、彼女と同じくらいか少し上だろうか。それ以外は全員彼女より幼い。

——逃げられない……かな。

ちらりと隙をうかがうが、さすがに5対1では分が悪い。囲みを突破するのは厳しそうだ。

「僕たちの縄張りでいろいろかぎまわっている奴がいるって聞いたんだけど、君——だよな」

声も言葉も穏やかだ。だが問いではなくすでに確認であることが気に障る。

「知らないわね、何のことかしら？」

「とぼけるなよ！」

別の声が飛んだ。

これまたずいぶんと使い古された脅し文句だ。怯えるでもなく、

少女はただ笑っただけだった。

「とぼけてなんかいないわよ。本当に私には関係ないことだもの」
ここがあなたたちの縄張りだってことは。そう続くはずの言葉を、
あえて少女は飲み込む。

誰の縄張りであろうが、少女の目的にとっては大した問題ではないのだ。必要な情報さえ手に入れば、それでいい。

少女は、少年達を順番に見ていく。

どの少年も、強い瞳をしていた。

貧しい生活にも負けない、生きるための強さだ。

彼女にも似たような生活をした経験があるからわかる。

彼らは自らの縄張りを荒らされたと怒っているわけではない。ただ必死で、自分たちの生きる場所——世界を守ろうとしているのだ。自分たちの世界を脅かす存在を見つけ、排除する。今こうして少女を問い詰めているのは、ただそれだけが理由なのだろう。

「少なくとも、わたしはあなたたちと事を構えるつもりはないから」
「嘘を吐け！ おまえが役人たちのことを探る所を見た奴がいるんだ」

「それだけじゃないぞ。役人達の懐から財布を掏ろうとしたって話も聞いている」

やれやれ、何処で見えていたんだ。少女は呆れたようにため息を吐いた。

ここで少女が騒ぎを起こせば、当然役人達の目はこの界限に住む少年たちにも及ぶだろう。捕縛される者がでくるかもしれない。彼らはそれを恐れているのだ。

少々浅はかだったかもしれない。ようやく少女はそのことに思い至った。間違いなく、彼女の不手際だ。

掏ろうとしたのは財布ではない。だが、そんなことを言っても詮無い。彼らの生きる場所を危険に晒したことに違いはないのだから。だが、ここでそれを認めることはできなかった。彼女が捕まれば、宿にいる彼が危険だ。

少女はただ黙るしかなかった。

そんな彼女に、苛立たしげに少年が怒鳴る。

「おい、何とか言えよ！」

少年の手が少女の襟元に伸びた。

逃げ出す算段をしていた少女だったが、さすがに手を出されては勝ち目がない。少女は少しだけ後ずさった。

が、後ろは壁だ。避けることすらできず、少年の手が少女の襟を引いた。

「ちよつと、やめてよ！」

抵抗したのがまずかったか、少しだけ上着が肌蹴る。

露になった少女の首もとを見て、少年の表情が変わった。

彼の目が捉えているものは――

「首飾りだ。しかも銀の」

ぽつりとつぶやく。少女は慌てて少年の手を振り払うと襟を合わせた。

別の声が割り込んだのは、その時だった。

「おいおい、よってたかって一人の女の子を襲うなんてずいぶんじゃないか」

少々間延びした、大人の男の声だった。

「まずい！」

少年達が急に顔色を変える。

主格の少年がちいと舌打ちして身を翻した。

他の少年たちも後に続き、あつというまに辺りは静まり返ってしまった。何事もなかったかのように。

残されたのは、少女と男。彼女は困惑したように、けれど油断なく周囲をうかがった。

男は一人だ。だが腰には剣を吊っている。軍装ではないが、一般人とも違う雰囲気だった。

身なりは良くもなく悪くもなくといった所だが、それだけで男の立場を判ずるのは難しい。

助かったとは言いがたかった。

この男、強い。

無造作にしているが、おそらく剣の腕はそれなりに立つはずだ。しかも、あの状況で口を挟んだということは、先刻の話は聞かれていたと考えるべきだろう。

役人に突き出されるかもしれない。

「安心しろ、兵士に売り渡したりはしない」

声は朗々としていて、暗い部分を感じない。

だが、それが信用に直結するわけでもない。

「そんな怖い顔で睨むなよ」

男が苦笑を浮かべる。

「——どこから見ていた？」

「あそこの角から」

言つて、男は自分の背後を指差した。

「そういう意味じゃない！」

「わかってるつて。悪い、冗談だよ——君が役人の財布を掏ろうと
していたって辺りかな」

やはり聞かれていた。

まずい。少女の心に焦りが生まれた。

「それにしても、何だつて掏りなんて働こうとしたんだ？ いい首飾りをしているんだらう？ それを売ればしばらくは食うには困らないだらうに」

「これは売れないわ」

反射的に応えて、少女は首元に手をやった。その下にある固い感触を確かめる。

「親の形見とか？」

「違うけど。——大事なお守り」

「君、イーロスの子供じゃないだらう？」

「……………」

言い当てられてどきりとした。

服装もさっきの少年らとあまり変わらないし、旅装というわけでもない。

「――どうしてそう思うの？」

「少しだけ、言葉になまりがある。東方の方言に近いな」

「出身自体はあなたの言うとおりだけど、それだけではここの住人ではないという証左にはならないわ」

少女の反論を、男はさらりと受け流した。

飄々とした表情からは、ただ面白がる様子しか感じ取れない。そのくせ、隙は欠片もない。

好奇心からたずねているという風を装っているが、少女は尋問でもされている気分だった。

「あいつらはこのあたりの、言ってみれば顔役だね。あいつらと面識がないということが、君が他所から来たものだという証明になるんだよ」

「……………」

「さて、お嬢さん。俺はあまり職務熱心な方じゃないし、今は時間外だ」

「だったら放っておいてくれればいいのに。少女は思ったが、口には出さない。」

やはり役人だったかとも思ったが、この考えも少女は飲み込んだ。「女の子に無体な真似を働くのも気が進まない。だから、君のことについて話してもらえないかな？」

「まず先に、あの子達を捕まえたほうがいいんじゃないの？」

「まあ、あいつらは悪さもするが、基本的には生きるためにしていることだからな。しかも、今のイーロスにはあいった子供が多い」だから捕まえることは根本的な解決にはならない。とはいえ、多少なりとも治安は守らなければならない。

矛盾した考えだ。

「それで、君は誰だ？ 女の子が一人で街を歩くには、今のイーロスは少々物騒だ」

話をすり替えようとした少女のもくろみはあっさりと打ち碎かれた。

男は穏やかで人当たりの良さそうな笑みを浮かべている。が、目に宿る光は彼女に言い逃れを許してくれない。

「……ある人のおつかいよ」

「兵士から財布を掏るのが？」

「お金が欲しかったわけじゃないわ」

「では何が欲しい？」

「……言えない」

詰問しなれている話の運び方だ。あやうく答えてしまいそうになる。

「ある人って、誰だ？」

「南方からの旅行者よ。あなたの知らない人」

「しかし、そいつも嫌な奴だよなあ。女の子に盗みを命じるとは」

「盗んで来いといわれたわけじゃないわ。彼が必要としているものを兵士が持っているのがわかったから、譲ってもらおうとしただけ」
ふうん、と男は気のない返事を寄越した。

「まあいい。とりあえず、今日の所は行っていていいよ」

「見逃してくれるの？」

「俺は、イーロスの警備が仕事じゃないし、君を捕らえるのは越権行為だ。それに、今すぐ捕らえる必要があるほどの悪事を働いたわけではなさそうだ」

「これから働くつもりかもしれないわよ」

「その時はその時だ。憲兵共が君を追いかけて捕まえるだろうさ。いずれにしろ、俺の仕事じゃない」

男はつまらなそうに伸びをした。

服装こそ豪華ではないものの、身のこなしや所作の一つ一つには、街の男たちのような荒々しさはない。

街人を装っても、育ちのよさは誤魔化せないものだ。
おそらくこの男、それなりの身分ある人なのだろう。

そんな人に目を付けられたのはまずかったかもしれない。

「……………」

「どうした？　目をつぶってやろうというのに、睨むな。それとも王宮にでも引き渡したほうが良かったか？」

男の口調に、薄く揶揄が混じった。

少女が、警戒心を解かないまま首を左右に振る。

「見逃してくれるのは嬉しいわ。私が捕まったら、あの人が困るから」

宿屋で待つ人のことを考える。

少女は男から視線を外すと、正面に向かって歩き始める。

眼前に立つ男の傍らを通り過ぎるが、彼は指先一つ動かさなかった。

「縁があれば、また会つかもな」

軽い口調で、男が声を投げてくる。

少女はそれを背中受ながら、夜の闇へと身を投じた。

——もう、会いたくない。

男の、油断なく彼女を判じようとする視線の鋭さを思い出す。次に会う時はきっと、こんな簡単には終わらないはずだ。

——もっと気をつけなきゃ。

宿で待つ人のためにも、彼女を信頼してイーロスへ送り出してくれた人のためにも、今はつかまるわけには行かない。

少女はきゅっと唇をかみ締めると、宿へと走り出した。

*

小さく扉が鳴った。

窓の外を見るともなしに眺めていたリムは、弾かれたように席を立った。

「……………ただいま」

「遅い！！」

おずおずと開かれた扉に向かって怒鳴る。

しゅんと落ち込んだ少女が、隙間から顔を出した。

「ごめんなさい」

つぶやく少女を室内に入れ、リムが厳しい視線を彼女に向けた。

「いくら身軽とは言え、イーロスの夜は治安が良くない。陽が落ちる前には帰って来いと言っただろう」

「うん、ごめん」

すっかりとうなだれて、少女がうなずく。

リムは小さく息をついた。

彼女に危険を強いているのはこの自分なのだ。こうして叱る権利など、本来であればリムにはない。

それでも、自分の都合で彼女を巻き込んだ以上、彼女を守る義務がリムにはあった。

「チエチエ」

「はい」

「頼むから、俺を心配させるな。絶対に、自分から危険に飛び込んではいけない」

「うん」

チエチエが弱々しく返事をした。

リムはうつむく少女の頭に手を乗せた。ゆっくりと撫でてやる。

「今の俺の味方はお前だけなんだ。頼れるのは、お前だけだ。頼むよ」

こくりと、無言でチエチエの頭が動く。

「……つく」

嗚咽が漏れた。

ぎよつとして、リムがチエチエの顔に手を滑らせる。

「チエチエ、泣いているのか？ 何かあったのか？」

「……怖かったよ、リム。怖かったんだよ」

ぎゅつと、リムにしがみつくと手に力がこもった。

段々と嗚咽が大きくなる。

「どうしよう、見つかったらどうしよう……！」
小刻みに少女の身体が震える。

どうやら、チエチエの身に何かあったらしい。
だが、今の状態では聞き出すことは難しいだろう。

「チエチエ、落ち着け。大丈夫だから」

リムは幼い子供を慰めるように頭を撫で、軽く背を叩く。

気丈なチエチエがこれほどまでに怯えて泣くのだ、相当怖い思いをしたのだろう。

「俺が悪かった。無茶をさせたようだ」

リムの言葉に、チエチエが激しく首を左右に振る。

チエチエの泣き声が大きくなった。

リムはただ黙って、少女を抱きしめた。

彼女が泣きつかれて眠るまで、ずっとそうしていた。

泣きつかれて眠ってしまったチエチエを一人宿に残し、リムはイーロスの街を闇に隠れるようにして歩いた。

旅装である。

イーロスの中心部には深夜まで営業している酒場が数軒あり、夜半まで飲み歩く姿は別段珍しいものではなかった。

街人ばかりでなく、大都市に出てきた開放感からか、遅くまで歩く旅行者も少なくない。

もちろん、酔いが回った旅行者から金品を頂戴しようと狙っている夜盗の類も紛れているのだが、今のリムのように、ひっそりと行動するにはうってつけの状況ではあった。

目指す場所はずぐにみつかった。かつて一度だけ訪れたことのある、占い師の住まいだ。

到着してみても、リムは眉を顰めた。

その家には人気がなかった。

他家を訪れるには相応しくない時間だからかとも思ったが、質素な扉はしっかりと閉ざされていて、ここしばらく開閉された形跡がない。

軽く扉をたたいてみるが、応答もない。

「いない……のか？」

住居を変えたのかもしれない。

状況を考えれば、待っていて帰宅するとは到底思えず、リムは早々に諦めることにした。リムが自由に動ける時間は少ない。無駄に費やす余裕はなかった。

元より路地裏の、さらに奥まった場所だ。周囲にゆくえを聞いて回ったところで、明確な行き先が明らかになる可能性は低かった。もしかしたら、そんな男が住んでいたことさえ知らない住民も居よう。

仕方がない。

リムは小さく息を吐いて、きびすを返した。

次に向かったのは、酒場だった。

人々の集まる場所には、自然と情報も集まるものだ。イーロスでは有名な占い師のようだったし、上手くすれば人々の話題にのぼるかもしれない。

単なる噂話に聞こえる話でも、時として真実を含むこともある。

同時に、危険性も内包していた。王宮勤めの兵士らが飲みに来ることも多いため、リムを見知った者と鉢合わせしないとも限らない。一旦目抜き通りに出てから、酒場を探した。

かつてイーロスにいた時によく利用した店の前で思わず足を止める。

入るべきか止めるべきか。一瞬リムは迷った。

危険を避けるためであれば止めるべきだ。だが、リム達を通ったように、アーティノキア中枢部の事情に詳しいもの達が集まっている可能性は高い。

（あいつが、居るかもしれない――）

不意にそんなことを考えた。

アーティノキアで唯一友と呼べる男――ラージャ。

他の顔見知りであれば、誤魔化す自信はあった。

自分で言うのも妙な話だが、王国騎士という身分を捨てて以来、随分と面変わりしたと思う。

おそらく、今のリムを見て「侯爵家の若様」だと考える人はいないに違いない。

瞳の色も、普段はリム自身が施した呪いによってごく一般的な色に変えているから、それほど人目を引く心配もないはずだ。

目や髪の色を変える作業は、リムにとってはそれほど難しいものではなかった。

1年前のリムが聞けばがっかりするかもしれないが、脳裏にその色彩の自分を思い描くだけで良かった。それだけで、リムが願った

通りに変化するのである。

ただし、これは自身に呪いをかける場合にだけ言えることであって、他者に対するものはまた別の話だった。

リムの能力は強い。これは潜在能力的に強いという意味で、術者としてはまだまだ未熟である。

力を引き出す技術においては完全に初心者だった。

呪いは経験が物を言う部分が大きい。その意味では、サヴァロアンと比しても格段に劣るだろう。

だが、最近はかなり落ち着いてきていた。ヨルに言わせると母親の夢を見たことがリムの気を安定させた上、リム自身がジエスタの地になじんできたことが理由らしい。

確かに納得できる理由ではあったし、時読みの精度が上がったことはリムも自覚していた。

気が付けば、瞳の色を変えることなど造作もなくなっていた。自由自在とまでは言わないが、不都合はない。

「いらつしやい」

気が付いたときには扉を押していた。店内から明るい声が飛ぶ。

真夜中だというのに元気なものだ。

店内は思ったよりも人が多かった。これだけ混んでいれば、それほど目立つこともないだろう。

空いている卓に席を取ると、すぐに店員が注文を取りに来た。若い女性だ。取り立てて美女というわけではないが、人懐こい笑顔は好感が持てる。

リムの記憶にある顔ではなかったから、ここ一年の間に入ったのかもしれない。

「ラムアン酒を」

アーティノキアの西部——やや乾燥した地域では、石榴の栽培が盛んである。その実を潰け込んで作られたのがラムアン酒だ。

甘味があつて強すぎず、飲みやすい。色も薄紅色と綺麗なので、若い女性を中心にとっても人気のある酒だった。

「あら、ちょうど良かったわ。昨日、今年採れた実で作られたラムアン酒が届いたばかりなの。出してあげるわね」

「今年は氣候が良かったから、期待できそうだな」

短い雑談の後、女性は酒を用意するために戻っていった。

一人になって、リムはさりげなく周囲を見渡した。ざっと見た感じ、知った顔はなさそうだ。

リムは一般的に顔を知られていない。

ヴェリアという名は確かに有名だ。だが、その長子であったとはいえ、当時のリムには大した地位も肩書きもなかった。名札をつけて歩いているわけではないから、名が知れることは少ない。

現に、リムが1年前にイーロスに帰還した時に会った兵士も、警備隊の司令官でさえ、名乗らなければ気づかなかった。

運ばれてきた杯の中身を舐めるように飲みつつ、リムは周囲の会話に耳を傾けた。

仕事の愚痴、妻への不満。聞こえてくるのはそんな話ばかりだ。

世間の男達は、存外鬱憤を抱えているものらしい。

干した無花果をつまみながらちびちび飲んでいると、やがて気になる話題がリムの耳に飛び込んできた。

「なあ、あの噂は本当だと思うか？」

「陛下が結婚するとかいう話だろう？　どうか」

（――陛下が結婚だと？）

思わず耳をそばだてる。

本当に決まっていることであれば、もっと大々的に話題になっているはず。だが、イーロスに入ってからそれに関する話題は一度も耳にしたことがない。

ということは、単なる与太話の類なのだろう。だが、このような場末の酒場にまで届いている事実は軽視できなかった。

同じ卓で飲んでいるのは中年の男3人。平服ではあるが、態度や発言から考えると、兵士かもしれない。

「相手の男は平民なんだろう？　羨ましいぜ。一気に王族の仲間入

りだ。大出世じゃないか」

「長い間、隣国オルセリアの王子との縁談を蹴りつづけてきたのは、想う男がいるからだと専らの噂だったが、そいつが相手だったんだなあ」

「いや、違うな」

それまで黙って酒を飲んでいた3人目が口を挟んだ。2人の目が一斉に彼に向いた。

「違っつて？」

「陛下の想い人は貴族の若様だつて話だ。その男が行方不明になつたらしい」

どきりとリムの心臓が大きな音を立てた。

もしかして自分のことを言われているのではないかと疑った。女王の想い人であるという話は別にしても、「行方不明になつた貴族の若様」がたくさんいるとも思えない。

「行方不明つて……このご時世にか？ 貴族だつてんなら騎士としての地位も持つているだろう。そんな奴が行方不明になるつて、何が起きたんだ？」

「さあな。だが、その男が消えて悲しみに沈んでいる陛下を支えたのが平民出の占い師で——」

占い師！！

リムははっと息を飲んだ。手にもった杯を取り落としそうになり、慌てて握りなおした。

明らかに拳動不信だったが、周囲を見回して安堵する。どうやら誰もリムに注目している者はいないようだ。みな自分の酒と愚痴に忙しいのだろう。

噂話の一つでも聞ければいいと考えていたのが、まさかこれほど都合よく欲しい情報が手に入るとは思っても見なかった。

「それで恋が芽生えたつて？ 安っぽい小説の読みすぎじゃないのか」

「だが、女王が召し上げて、わざわざ城に一室を与えたくらいだぞ

？」

なるほど、イーロスの住まいが空だったのも道理か。

「王宮の女官の間じゃまことしやかに囁かれているらしい。女の噂だ、どこまで当てになるかはわからないが」

「まあ、もともと占いの類がお好きな方らしいからなあ。それにしても占い師とは、胡散臭い奴を選んだものだ」

「まったくだ。あの王様は何を考えているんだろうな？ 王家というのは血の正統さが物を言うつてのに」

「まあ、アイラス殿下がいらっしゃるし、酷いことにはなるまいよ」

「あの方が最後の砦だな。陛下が妹君の言葉に耳を傾けてくださればの話だが」

「陛下がああでは、妹姫も苦勞が多いだろうに。いつそ逆だったら良かったのか」

酒は口の滑りを良くする。だが今の発言はかなり問題があった。

聞きよによつては、今の国王を廃して妹姫を王位に付けようとしているように受け取られかねない。

酔った勢いだとしても、大事に発展する危険性を十分に含んでいた。

さすがに男達もそれに気づいたのだろう。同席していたほかの二人が顔色を変えた。

「おい、滅多なことを言うもんじゃねえ」

「誰かに聞かれていたらどうする？ 明日から路頭に迷うことになつても知らんぞ」

「こんな酒場での会話、誰も聞いているもんか。聞いていたとしても、単なる噂話、覚えている奴なんていないさ」

……ここに一人いるんだが。そんな呟きをラムアン酒と一緒に飲み下し、リムは席を立った。気まずい雰囲気を払拭するためか、男達の話題が別のものへと変わっていったからだ。

この後、さらに新しい情報が出てくとも思えない。十分な収穫はあった。長居は無用だ。

卓に代金を置いて店員に声を掛けると、リムは何食わぬ顔でその場を離れた。

夜風が火照った頬に心地よい。

あの日――初めてヨルに触れたのも、こんな晩だった。たった一年過ぎただけだというのに、ずいぶん懐かしい気がする。

「結局俺は何一つ捨てられずにいるのだな……」

城壁の少し手前で足を止め、リムは遥かにそびえるイーロス城を見上げた。

夜間であっても、城壁の周囲は王都警備兵による巡回がある。

兵士らから見ればリムは明らかに不審者だろう。旅人が深夜に近づく場所ではない。

見咎められてはやかいなのに、リムは来ずにはいらなかった。「俺はまだ迷っているんだろうか」

通いなれた酒場を訪れ、そして城にまで近づくなど、感傷ではなくもはや未練だ。

戻れるはずがないと思うのは、そう考えてしまうのは、どこかでそれを望んでいるからではないのか。

全ての縁を切るつもりで決意したはずが、なんと中途半端なのだろう。

この内に住むことを厭っていたくせに、見上げていると落ち着く部分は確かにあるのだ。

――兄上！

不意に、自分と呼ぶ声を感じた。それと同時に、リムの傍らを少年が走り抜けてゆく。

少年はリムの正面で足を止め、くるりと振り返ると、にこやかに手招きをした。

――兄上、姉上！ 早く来ないと僕の勝ちですよ！
よく知る面影。思わず叫んだ。

「レイン!?」

——待ちなさい! 一人だけ先に走り出すなんてずるいわよ!

少女が、少年と同じようにリムを抜いて走ってゆく。

どちらも懐かしい形だ。

「ロス!」

リムが少女の名を呼ぶと少女——ロスがリムを仰ぎ見る。

——兄さま、そんな所で立ち止まってどうしたの?

きょとんとリムを見上げて、ロスが尋ねる。その後ろで待つレインは得意顔だ。

妹に歩み寄ってその頭に手を伸ばす。

撫でてやろうとしたその指が、まったく抵抗さえなく空を切った。直後、二人の姿が揺らぐ。

水面に映りこんだ影よろしく、たゆたうように闇ににじんで——消えた。

随分古い記憶だった。

二人ともまだ小さな子供の姿をしていた。あれはいつのことだろう。

確か、忙しい両親の代わりにイーロスの街へ連れ出してやった帰りで、城壁まで競争しようと言い出したのは弟のレインだったか。

リムが本気で走っては幼い弟妹を振り切ってしまう。ゆえに城門の手前で足を止め、二人を待ったのだ。レインは楽しそうに走ってゆき、ロスは手を抜くなと怒っていた……

——リム。

密やかな女性の声がりムを呼んだ。

弟妹と入れ替わるように、リムの眼前に一人の女性が駆け寄ってくる。

長い髪を高い位置で結い、革鎧に剣を佩いただけの軽装だ。

装備品はどれも汎用品である。女性兵士といった風情で、身分を示すような物は一切身に付けていない。

だが、そのような物などなくとも、彼女の正体をリムはよく知っ

ていた。

「イル……」

——珍しいわね、あなたの方が早く来ているなんて。

「あなたも人が悪い。私が陛下の命で動いていたことをご存知の上で、そのような意地悪を仰る」

記憶に残るそのままの言葉をなぞるように囁いた。くすぐったそうに笑うアイラスは、リムの思い出の中に棲む彼女と寸分変わらない。

——姉上が呼べばあなたはすぐに登城するのに、私の時はいつだって後回し。たまには意地悪の一つも言いたくなるわ。

なじる言葉の裏には嫉妬と甘えが見え隠れしていた。

どちらかといえば男女の関係に対して淡泊な彼女にしては珍しい言動で、ひどく驚いたのを鮮明に覚えている。

「消えてくれ」

搾り出すような声だった。目の前に佇む恋人の影に告げる。彼女の顔が悲しみに染まった気がした。

リムは両手を握り締めた。爪が手のひらに食い込んで血がにじむほど、強く。

これは現実じゃない。ロスモレインもアイラスも。全ては、リムの迷いが見せた幻であり、過去だ。アーティノキアに残してきた思い出の欠片なのだ。

幻影を追い出すようにきつくまぶたを閉じる。

心の奥にはうずくような痛みがあった。それさえも振り払うように、リムはかすれた声で呟く。

「見たくない——思い出したくないんだ。俺を惑わせないでくれ。頼むから……！」

叫び声と同時に、何かが割れる音がした。泡が弾けるように、見えていた幻が消えうせた。

周囲に漂うのは、夜の静寂ばかりだ。

愛しい者たちの姿を見てしまえば、思い出に引きずられてしまう。

迷いたくなかないのに。

いつそのこと感情を殺してしまえばいいのだろうか。アーティノキアも、そしてジェスタも忘れてしまえば楽になれるのだろうか。

「愚問、か」

それが簡単にできるのであれば、とうにやっている。できないからこそ、こうして女々しくも悩んでしまうのだ。

全てが動き出すまで、もうあまり時間はない。イーロスにいと、それを肌で感じる。

ジェスタを目覚めさせると言われたものの、具体的な方策がみつからない。無為に過ごしているつもりはないが、気ばかりが焦った。

自分は、正しい道を選び取れているのだろうか。ジェスタにとつてもなく、アーティノキアのためでもない。ただ、自分のために正しい道を。

冷たい夜風がリムの髪を乱した。

答える声はない――

夕陽が、町並みを朱色に染め上げている。明るい陽の下では薄汚れて見える外壁も、美しく思えるのだから不思議なものだ。

そんなことを思いながら、チエチエは目抜き通りに行く。

イーロス人は人が多い。

彼女は生まれも育ちもディア・アルカだ。出たことがないとは言わないが、他の町に暮らしたことは一度もない。

孤児同然に生きてきたから、おおよそ旅に縁はなかった。リムたちと知り合わなかったら、一生経験することはなかったかもしれない。

人ごみにはいまだ慣れないが、だからこそ旅人を装うこともできるといふものだ。

木を隠すなら森に。昔から云うとおり、人通りの多い場所ほど、個々に対する印象は薄くなる。隠密行動というほど大袈裟ではないが、目立つのは避けたい。そんなチエチエにとって、ありがたい環境ではあった。

「ここを曲がるとイーロス城よね」

「そうだよ」

返事があった。

今のは独り言だった。応答があつてはおかしい。特に、唯一の知人であるリムが宿にすることがわかつているこの状況では。

チエチエは弾かれたように背後を振り返った。

「よお」

ずいぶんと気楽な声と表情で、その人物が軽く手を上げた。見たことのある男だった。

「……何か用？」

自然、語気が強くなった。

「別に。ただここを曲がるとイーロス城かと尋ねられたから答えた

までだが？」

「あなたに聞いたんじゃないわよ！　そもそも独り言だし、返事なんて期待してないから！」

飄々と答える男に、チエチエは顔色を変えた。ぞわりと、以前にも感じたことのある寒気が背筋を這い上がってくる。

怒り、焦り、不安。様々な感情がない交ぜになって、彼女は口調を強めた。

だがチエチエのその態度にも、男は表情をかえない。

「まあ、そう噛み付くなよ。城へ行きたいんだろう？　案内してやるるか」

「結構です」

申し出をすげなく却下して、チエチエはようやくあることに気づいた。男の姿を上から下までゆっくりと眺める。

磨かれた上等な甲冑に、落ち着いた色彩に染めたマントが美しい。襟元につけられた止め具には見慣れない獣の絵が彫られている。

どれ一つとつてみても高価そうだ。相応の身分と地位でなければ身に付けることなどできないはずだ。

「あなた、もしかしてお城の騎士……だつたりする？」

「だつたりするな」

恐る恐る尋ねたチエチエに、男はあっさりと頷いて見せた。

リムには、警備兵はともかく騎士団員には注意するように言われていた。

兵士などたくさん居る。その見分け方をリムに尋ねたことがあったはず。

——見ればわかる。

記憶を探って思い出したリムの言葉がそれだ。

あの時は、適当なことを言うと思ったものだが、こうして実際に会ってみると、なるほどリムの表現もあながち間違っていないと妙に納得してしまった。

彼ならば城の中も見せてくれるかもしれない。心の片隅で、頼ん

でみようかと思ったが、やめた。危険は冒すべきではないだろう。

「別に、お城に用があるわけじゃないの。ここから遠い町とはいえ、アーティノキアに住む者として一度くらいお城を見てみるのも良いかと思ったただだから」

じゃあね、と言い置いて、チエチエは来た道を戻り始めた。

おのぼりさんを装ってみたのだが、果たして上手くいったのだろうか。

不安は残るが、振り返って男の様子を確かめる勇氣は、チエチエにはなかった。

男は、少女が去った後も、ずっとその姿を目で追った。

「……………」

しばらく考え込んでいたが、少女の姿が完全に人込みにまぎれる直前に、動いた。見失わない程度に距離を保って、後をつけ始める。氣配を殺す必要はなかった。これだけの人出だ、特定の人物一人の氣配を探るのは簡単ではない。

正式に訓練を受けている彼でさえそうなのだから、あの少女にはおそらく不可能だろう。尾行されていることに彼女が気づく危険性はないに等しかった。

少女は迷うことなく路地を進んでいく。

イーロスの路地は入り組んでいる。大通りなら話は別だが、一旦裏道に入ってしまったえば、方向感覚に欠けた者であれば、迷うのは必ず至のはず。

得てして初めての場所でも迷わない者はいるが、仮に彼女がそれだったとしても慣れすぎである。

先日の小競り合いのこともあるし、確かめておいたほうが良さそうだ。

少女が向かっているのは、所謂下町のようだった。イーロスの中心地から離れるにしたがって人は少なくなっていたが、尾行に支障が出るほどでもない。

(……宿か)

少女が入っていった建物を見上げて、納得した。

先日会ったときに、連れがいるといっていたはずだ。おそらくこの宿にいるのがその男なのだろう。

「あまり使いたくない手ではあるが……この際仕方ないか」

男はそう一人ごちて、宿の扉を押し開けた。

「いらつしゃい」

どこか陰気さを漂わせた宿主が声を掛けてきた。奥は酒場になっているようだが、さすがにまだ日が落ちていないせいか人影はまばらだった。

「すまないが、宿帳をみせてもらえないか」

「宿帳を……でございますか？」

明らかに胡散臭そうな視線を向けられて、男はじろりと眼光を強めた。

「ちよつと話を聞きたいと思っている人間が、この宿を利用しているようですね」

いいながら、ゆっくりと襟元に手をやった。

人間の目には、動くものを追う習性がある。殊更に大きく手を動かしたのは、相手の注意を引くためだ。

思惑通り、宿主の視線が男の手を追い——それにぶつかった。

刹那、宿主の顔色が変わった。下町住人といえども、階級章の意味は知っているらしい。

「っ！ あんた、城の……！」

「静かに。隠密行動中だ」

「あ、ああ……で、宿帳を見せれば良いのか？」

手のひらを返したように従順になってしまった宿主が少々気の毒だが、男はあえて尊大に頷いた。

「その通り。心配しなくても、騒ぎを起こしたりしない。話を聞くだけで。そう、穏便にね」

含みを持たせた笑みを口元に這わせる。我ながら芝居がかった態

度だと、男は内心苦笑した。

「……わかった」

宿主はしぶしぶながら頷くと、引出しから冊子を取り出した。使い古されて綻びさえあるそれを無言で男に差し出す。

男はそれを受け取ると、手早くめくった。宿帳には名前と年齢が記載されている。

宿泊者数は多くはない。探す相手はすぐに見つかった。

「ふうん」

男女の二人連れ。年齢から考えるにおそらく間違いないだろう。知らない名だった。何か理由があつて動いているのだとすれば本名を書くはずがないから、偽名だとは思うが……。

「協力に感謝する」

宿帳を宿主に返して、男は懷を探った。そこから金貨を一枚だして宿帳の上に乗せてやる。

金貨一枚といえば、この宿の収入の優に一月分はある。下町あたりじゃ流通することもないだろう。

宿主は一瞬ぼかんと金貨を眺めた後、慌ててそれを握り締めた。

その間に、男はさつさと宿の奥へと向かう。

「じゃ、よろしく頼んだぞ」

言外に「干渉するな」と含ませて、男は階段を上った。

二階の最奥。

「角部屋か」

一人つぶやき、男は室内の様子を伺った。

密やかに行動するのであれば、他者との接触は極力避けたい所だ。角部屋であれば、隣室と接しているのは一面だけである。二面が窓であり、残りの一面は廊下になる。

外から見る限り、窓に手すりはついていなかった。窓を乗り越えて侵入される可能性も低い。逆に、踏み込まれた場合には、窓を破って外に逃れることもできるだろう。密談をするには、確かに好都

合かもしれない。

（さて、何が出てくるか——）

室内からは人の気配がする。人数まではわからないが、少なくとも先ほどの少女は居るはずだ。

男は来訪を告げるため、軽く扉を叩いた。

——コツコツ。

室内に、小さく扉を叩く音が響く。

チエチエはびくりと肩を揺らして入り口を振り返った。リムの顔にもわずかに緊張が走る。

宿主には、よほどの用がなければ近づかないように言っている。そのために多めに代金も支払ったのだ。宿主以外に尋ねてくる者に心当たりはない。

怯えたように、チエチエがリムを見上げた。

「リム——」

「静かに」

何かを言おうとする少女を鋭く制して、リムは視線を扉に固定した。

音は軽かった。力に任せて叩いたわけでもなく、ただおとないを告げるためだけの行為に思える。

来訪者はたくみに気配を紛れさせているようで、不審な様子はない。

「もしかして、私つけられていたのかもしれない」

声を潜めてチエチエがつぶやいた。目線だけで、リムが少女に続きを促した。

「あのね、前に夜道で男の人に会ったって言ったでしょう？ あの
人に、また会ったの。——ついさっき」

リムが小さくうなずく。

「間違いなさそうだな。どんな男だ。特徴を言え。早く」

あまり応答がなければ、外にいる人間に不審がられる。チエチエ

はそれを悟ったのか、男の容姿を簡潔に描写し始めた。

短く切られた茶褐色の髪に、艶やかな黒色の瞳。背はリムよりも高い。だが、威圧する感じは殆どなかった。紺色に染められたマントと高価そうな鎧が美しかった。

「それから、襟元に絵入りの止め具をつけていたわ」

「どんな模様だった!？」

険しい表情でチェチェの話聞いていたリムだったが、最後の一言で思わず声を荒げた。

それに少し気おされながら、チェチェは模様を説明する。

「見たことのない獣。首の周りの毛がふさふさしていて――」

「!」

一瞬にして、リムの顔色が変わった。

「――あいつだ」

呆然と、そうつぶやく。

紺色のマントに獅子の止め具。リムが知る限り、それらを同時に身につけることができるのは、今のイーロスにはたった一人しか居ない。

――コツコツ、コツコツ。

催促するように再び扉が鳴った。これ以上待たせるわけにはいかない。

痛みをこらえるように、ぎゅっと扉を睨んで、しかしすぐに諦めたようにため息を吐いた。

「チェチェ、開けていい」

「いいの？」

危険はないのかと言外に問われて、リムはうなずいた。

あいつなら、状況を見ずにいきなり斬りかかってくることはない。

「ああ、危険はない。大丈夫だ」

チェチェはまだ不安そうだったが、リムの言葉は信じているのだろ。小さく頷くと、取っ手に手をかけた。

「よお」

掛けられた声は相変わらず陽気である。だが、纏っている気配は決して気楽なものではない。

リムは、ちょうど扉から死角になる位置に立っていたが、その声を聞いて全身が粟立った。予想はしていても、事実を突きつけられた衝撃は大きい。

応対するチエチエの声も幾分緊張しているようだった。

「こんな所まで来て、何の用？」

「お嬢さん一人か？ 連れの男は留守かい？」

「いや、ここにいます」

探りにきたことを隠しもしない男に、リムが扉の影から答えた。そして戸口に進み出る。

瞬間、男の顔色が一変した。

「久しぶりだな、ラージャ」

「……リム、お前——」

男——ラージャが呆然とつぶやき、直後、リムは強烈な力で壁に叩きつけられていた。

油を撒いた床に火種を放り込んだときのように、感情が一気に燃え上がる様子はつきりと見て取れた。

「リメルテス・ユニ・ヴェリア。お前、こんな所で何をしている！？」

ぎりぎりと容赦なく締め付けられる。リムは一切の抵抗をせず、されるがままになっていた。

「リム！！」

悲鳴のように叫ぶチエチエを片手で制し、リムはまっすぐにラージャと対峙する。

この男が激昂するのを見たのは、これが2度目だ。だが、以前に見たその時でさえ、これほどではなかったと思う。

長くはないが、短いともいえないこの男との付き合いの中で、ラージャが感情的になるのを殆どみたことがなかった。

大抵のことでは動じず、自分ための怒りはやわりと受け流してしまふような男だ。にもかかわらず自制心を放り出して声を荒げるとは、彼の憤りはそれほどまでに深かったということだろう。

リムには抵抗などできるはずがなかった。

イーロスに來れば、こうなることはわかっていた。遅かれ早かれ、ラー ज्याには気づかれるだろうと。

否、もしかしたらどこかでは見つかりたいと思っていたのかもしれない。でなければ、自分の心の内側に流れるはつきりとした安堵感に、説明がつかない。

リムの襟を掴むラー ज्याの手が細かく震えている。それは怒りのためかそれとも――

「あの子達がどれだけ悲しんだか。あの方がどれだけお心を痛められたか。お前は知っているはずだ！ それなのになぜ！ ここに居るんだ……っ！？」

「……………」

激情に震える声はわずかにかすれ、それがリムの胸を締め付けてくる。

リムは答えられなかった。一言で済む問題ではないし、簡単に説明できる事情でもなかった。

ラー ज्याがリムから手を離す。放り出される格好になって、リムはよろめくようにそのまま壁に身体を預けた。軽く咽るように咳き込んで、荒くなった息を整える。

何かをこらえるようにしつかりと両手を拳に握り締めて、ラー ज्याは真っ直ぐにリムを見据えた。

「説明してもらおうか。アーティノキアを、お前を愛するもの達を捨ててもなさなければならぬこととは何なのか。俺に、納得の行く説明をしてくれ」

「――わかった」

話さなければならぬ。リムはラー ज्याの苛烈な視線から逃れるように目を伏せると、ゆっくりと頷いた。

沈黙が重苦しい空気を作り出していた。リムは憔悴した表情で、無言のラージャを見ている。

外にはすでに夜の帳が下りていた。隙間の多い安宿だからか、階下の騒ぎ声が小さく聞こえるのが酷く耳障りだった。

これまでの経緯を語るためには長い時間が必要で、三人が卓についてから優に一刻は経っているだろう。

詳しい事情はチェエにも話したことがない。ゆえに、少女は不安そうな表情で、驚きを隠そうともせずじつと耳を傾けていた。が、さすがに疲れたのだろう。しばらく前から寝入ってしまった。た。

「それで、どうするつもりだった？」

じつと考え込むようにしていたラージャが、擦れた声で尋ねる。眠っているチェエを気遣ったか、密やかな声だった。

「わからない。自分でも決めかねているんだ」

「ふざけるなよ。この一年、俺たちがどんな思いをしていたと思っているんだ。わからないの一言で片付けられて堪るか」

「……すまん」

押し殺したような声が、ラージャの怒りの大きさを雄弁に物語っている。リムには返す言葉がなかった。

だが偽ることはできなかった。この場を収めるために誤魔化しを口にするのは時間の無駄だ。気楽そうに見えて、鋭い男である。あっさりと見抜くに決まっている。

ならば最初から嘘などつかぬほうが良い。

「怒りももちろんだが、それ以上に心配もしたし、なぜ相談してくれなかったのかと哀しくも思ったさ。信頼されていなかったのだと悔しくもあった」

「……………」

ラージャは苛立たしげに褐色の髪を掻き混ぜた。なめらかな身のこなしで席を立つ。

「ラージャ」

リムは扉へと向かう友を追うと、その背に呼びかけた。

ラージャは戸口に立ち、取っ手に手をかけたところで動きを止めた。リムが背後に立っていることは当然気づいているのだろうが、振り返ることはなかった。

「答えを出すことだ、リム。どうするのか、どうしたいのか。それが決まったら遣いを寄越せ。お前の覚悟くらいは聞いてやる」

「承知」

一瞬の間が空き、ラージャが扉を押した。濃紺のマントを閃かせて、隙間から室外へと身を滑り込ませる。

蝶番が鈍い音をたてた。それが自分と、そして彼の心の軋みを表しているようにリムには聞こえた。

「ヨル、頼みがあるんだ」

そう切り出したのは、空が白み始めた頃だった。

眠ろうとしたものの寝付けず、悩んだ末に選んだ手段がそれだった。

隣の寝台からは小さく寝息が聞こえてくる。チエチエはぐっすりと眠っているらしく、リムの声にも目を覚ます様子はなかった。

——珍しいね、君が頼みごとなんて。いいよ。僕にできることであれば、喜んで。

「ありがとう」

——それで、僕は何をすればいいんだい？

「夢を——過去を見たい」

リムはずっとアーティノキアで育った。しかし、リムは考えてみたのだ。自分がどれほどアーティノキアのことを理解しているのかを。

こういう状況になるまで、リムはアーティノキアがジェスタを滅ぼしたことを知らなかった。

それだけじゃない。イーロスの片隅で、必死で生きている人々が居ることなど考えたこともなかった。

アーティノキアは、豊かな国だと思っていた。

だが、自分の足で歩いた祖国は、リムの想像以上に劣悪だった。

豊かさや幸福を享受できているのはほんの一部だけで、殆どの民は日々を生きていくだけで精一杯だ。毎日の食事さえまならない人も少なくない。

認識と現実の間には大きな差異がある。

そしてそれはジェスタに対しても同じだった。いや、ジェスタの方がおそらく知らない事柄は多いだろう。

リムにとってのジェスタは、未だ遠い存在だった。イーロスの王

立図書館でザイファに聞いた話と、夢で見た過去が、彼にとっては全てである。正しい選択をするための情報としては、圧倒的に足りなかった。

それゆえに、視てみたかった。

どちらの国にも優しい結論というのはありえない。だが、どちらを取るにしても、選ばなかった方を棄てるような扱いをすることは絶対に避けなければならなかった。そのためには、双方をよく知ることから始める必要があった。

自分の感傷に引きずられた追憶の影ではなく、真実の過去を知らなければならぬ。

——わかった。力を貸そう。

「どうすればいい？」

——簡単だ。ただ、思えばいい。

「思う？」

——そう。見たいと思う場面を思い描くだけだ。人でも物でも、場所だって構わない。頭の中で想像してみるといい。

「頭の中で、想像する」

——やってごらん。今の君なら、色々考えなくてもきつとできるから。さあ、目を閉じて。

促されるままに目を閉じると、急に緩やかな眠気が襲ってきた。

先刻まではまったく感じなかったのに、不思議なものだ。

意識が眠りに沈んでしまう前に、リムは意識を集中させた。ヨルに言われた通り、見たいと思う過去を思い浮かべる。

ふわりと身体が浮くような錯覚にとらわれた。ヨルの気配が増し、リムを支えるヨルの力が低く波動のように響く。

まずは、ジエスタを。

記憶にある彼を脳裏に描き、リムは眠りの波に意識を投じた。

珍しく彼は平服だった。

普段は職業柄、ローブをまとっていることが多いので、簡素な服装で歩くことは少ない。

だが、今日ばかりはローブを着るのは嫌だった。触ることさえ厭わしかった。

彼には時の流れがよく見える。時として、望まぬものまで視えてしまう程に。

今の彼の心を支配しているものは、先刻視たばかりの禍々しい未来図だった。

未来を読むことは、いつだって気が滅入る作業だ。職務上、代価が必要とわかっていても、時読みをしなければならぬ時もあるのだが、今回は違う。

まさに、視せられているという感じがした。視せているのは神か、悪魔か――

視えた未来はひどく鮮明だった。鮮明であればあるほど、その結果は真実に近くなる。せめておぼろげであつたのならよかったのに「ふう」

彼は胸にたまつた息をゆっくりと吐き出した。

鬱々とした気分を払うために、彼は職務を放棄して抜け出してきたのだ、せめてここに居る間は安らぎがあった。

彼が現在いるのは小高い丘の頂上付近だった。そこには大きな櫟の木があり、夏の日差しを遠ざけてくれる。眼下にはファール・セ・リードの街が広がっていて、神殿や塔が一望できた。

この国は美しい。そして豊かだ。資源に恵まれ、神の加護にあふれている。

彼は無造作に身を横たえた。

草は毛足の長い絨毯のようにやわらかく彼の身体を支えてくれる。寝心地は最高だ。仕事を放り出してきたのだから、なおさらだった。「こんな所にいらしたんですか、エルハツシエ」

声が聞こえた瞬間、爽やかな風が吹き抜けた。優しく彼の黒髪を

撫でてゆく。

彼は目を閉じていたが、呼びかけたのが誰であるのかは見ずともわかった。

「ヨル」

弟の名を呼んで目を開けると、覗き込むようにしている青年の顔が視界一杯に飛び込んできた。

「最長老が呼びですよ」

明るい表情で厄介ごとを持ち込んでくれた弟に、彼——アステイローダは苦笑で答えた。

最長老といえば、ジェスタにおいてはエルハツシエに次ぐ高位の職だ。エルハツシエはゼファアの決議を承認するのが主な職務になるから、事実上、最長老がジェスタの実権を握っているといっても過言ではない。

しかも現在の最長老は齢52才で在位も長く、アステイローダを軽視するきらいがあった。事実、最長老に比べれば若造であるから、反論もしにくいのだが。

「行きたくないな」

ヨルが渋い顔をするだろうことは承知の上で、ぼそりと呟く。案の定、ヨルは諫めるように首を左右に振った。

「いけません、エルハツシエ。あなたが居なければ、物事は何一つ決定しないのですから」

この弟は、ひどく自分を買ってくれているとアステイローダは思う。

アステイローダ自身は、あれこれ指図されるのが苦手だし、人の上に立つ性質ではないと自覚しているのだが、弟からしてみると、アステイローダ以上の適任者はいないということになる。

自分はただ、緋色の瞳を受け継ぎ、人よりも少しだけ時読みの力が強いだけだと思うのだが、それをヨルに言えば全力で反論されることがわかっていた。

兄弟というのは生を受けるときに素質を分け合うものなのだろう

か。時読みを得意とするアステイローダとは反対に、ヨルは呪いの力の方が強い。場合によってはアステイローダの上に行くはずだ。だが、それをヨルに伝えても、本人は自覚がないのか謙遜しているのか、必ず否定された。兄上の方が優れている、と。

アステイローダは、自分よりもヨルの方がずっと執政者として適任だと思っていた。

このまま何事もなく時が過ぎれば、いずれヨルはゼファー上層部へと組み込まれるはずだ。長老となり、もしかしたら最長老になるかもしれない。

仮にアステイローダが早くに退位すれば、彼に代わってエルハツシエとして立つ可能性だってある。

飽く迄も、ヨルが自覚をすればの話だが。

「仕方ない、行くか」

「はい、そうしてください」

考えても詮無いことを思い悩むのは時間の無駄だ。

アステイローダは空を見上げた。夏空は、目が痛くなるほど青く眩しかった。

この空のように、いつまでも明るい未来が広がっているのだと思っていた。彼らが生きている間も、その先もずっと。

彼の占いの結果は必ずしも芳しいものではなく、そのことが心を暗く沈ませる。

だが、彼ら兄弟が——否、ジェスタという国そのものが、どのような未来へと進んでゆくのかはまだ定まっていないはず。

アステイローダは願わずにはいらなかった。いずれ訪れる結末が少しでも、民にとって優しいものであることを。

できることなら避けたかったが、おそらく今のアステイローダには難しいだろう。

そのためにも、アステイローダには一つだけ、弟に言っておきたいこと——言っておかなければならないことがあった。

未来への鍵を握っているのは自分ではなく、この弟なのだから。

「ヨル」

先に戻り始めた弟を呼び止めて、アステイローダは穏やかな笑みを浮かべた。

「なんです？」

「私に何かあった時には、この国を頼むぞ」

ヨルは一瞬きょとんとアステイローダを見た。アステイローダの表情が深刻でないことを見て取ると、笑みで応じる。

「どうやらアステイローダが軽口をたたいていると判断したようだ。なにを仰るかと思えば。僕には国を背負うことができるほどの資質はありませんよ」

屈託なく、しかしきっぱりと否定する。

この弟は自身を過小評価する傾向があった。劣等感というほど暗い感情ではないのだろうが、兄であるアステイローダの能力を絶対的に信じているから、結果として自分は取るに足らない存在だということになるのだろう。その信頼には一点の曇りもなく、揺らぐこともない。

「そんなことはないさ、ヨル。おまえにはそれだけの力があるよ」

「力なんて、エルハツシエに比べれば足元にも及びません」

頑ななまでに自分には力がないと思い込んでいる弟に、どうにかして気づかせてやりたかった。その気になりさえすれば、ヨルに敵う者がいるはずがないのだということに。

優しく素直なレイヨル。兄と比較されることも多かっただろうに、心を歪ませることなくまっすぐに育ってくれた。この柔軟な気質を彼に授けた神に感謝したい。

彼はきつと人々に愛される。良い指導者になるだろう。

「ヨル」

「はい」

「神は、力のない者に緋色の双眸を与えたりはしないものだ」

「……兄上？」

アステイローダは弟の頭に手を乗せた。幼い頃よくそうしたよう

に、ゆつくりと撫でてやる。

子ども扱いだと反発するかと思ったが、くすぐったそうに苦笑するだけだった。

「おまえに足りないものがあるとするれば、それは自信だ、ヨル」

「自信……」

「おまえはちゃんと神に認められているんだよ。その瞳の深紅が何よりの証拠だ。だから、堂々としている。俺の弟なんだから、絶対に大丈夫だ」

「あなたがそう仰るなら、きっとそうなのでしょうね」

「よし、では塔へ戻るとするか」

そういつて、アステイローダはすたすたと歩き始めた。今度はヨルが後を追う形になった。

「エルハツシエ、ありがとうございます」

「早く自覚を持って、俺に楽しさせてくれよ」

真意を笑顔の下に隠して、アステイローダは殊更に明るく振舞う。いつか訪れる「時」のために、自分にできることは何だろうか。

少しでも、この心優しい弟にかかる負担を減らすためにはどうすればいいのだろうか。

決して、彼に苦勞をさせたいわけではないのだから――

*

墨を流したように暗いらせん状の階段を、ヨルは灯りの一つも持たずに下っていく。

灯火の既に落とされた深夜であつたが、目はだいぶ暗さに慣れているから、歩行に支障はなかった。

ゼファー中枢部――俗に「審判の塔」と呼ばれる建物の地下にそれは納められていた。

それを知ったのはつい先頃のこと。ヨルがエルハツシエとして立つたばかりのことだった。

先代であるヨルの実兄アスティローダが、占呪師としての生命とも言える能力の全てを賭して記したその預言書を、あるうことかゼファーは塔の地下に封じたのだ。占呪師たちに知らせることもなく、適切な手段を講じることなく。

ヨルには、それが許せなかった。兄が軽んじられているように思えた。

誰もがただの占いに過ぎないと言い、その重要性に気づいていない。

ならば、自分が動くしかなかった。

あの書物に記された予言を、現実にしてはならない。

ヨルはアスティローダから直接この国を任された。最長老がなんと言おうと、それだけがヨルにとっての絶対的な真理だった。

だからこそ、ヨルは今、この場所にいる。禁を犯して。

地下書庫に入室するためには、長老たち全員の承認を得た上で、長老一人以上の立会いを要する。エルハツシェといえども例外ではなく、無用に立ち入ることはできない。

見つければ厳罰を受けることになるだろう。それでも、今は行かなければならなかった。

審判の塔には強力な結界が張られていたが、ヨルは塔内に執務室を持っている。結界がヨルの行く手を阻むことはない。

しかし、塔全体を覆うものとは別に、地下書庫は更に強固な結界で守られていた。

破りはしない。結界は、それを張った術者との間に深いつながりを持つ。この結界は長老の手によるものであることから、無理にこじ開けようとすれば、即座に術者である長老の知るところとなるはずだ。

ヨルは自分自身を結界で包んだ。眼前にあるそれと同質で、同等の強さで。

その状態を保ったまま、ゆっくりと扉に手を伸ばした。書庫の結界に少しだけほころびが生じる。そこに身体を滑り込ませた。

石鹼の泡は、乾いた手で触れれば弾けるが、手を石鹼水でぬらしておけば壊れにくくなる。それと同じ原理である。

かくして、ヨルは無事に室内に滑り込むことができた。

もとより占いよりは呪いの力に秀でた彼のこと。注意さえ怠らなければこの程度のことは造作もなかった。

地下である。

窓もなく日も差さないその書庫はさぞ湿度が高いだろうと思っていたのだが、そこは意外なほど乾燥していた。地下という言葉から連想させる陰気さはまったくくない。

どうやら室内には呪いがかけられているらしかった。

確かに、書物に湿気は禁物だ。同時に陽光も大敵であるため、呪いを施してさえおけば、意外と書庫には向いているのかもしれない。あった。

ヨルがここに足を踏み入れるのは初めてのことだった。

机に置かれた燭台に火を燈して、ヨルはゆっくりと周囲を見渡した。

天井まで届くほど背の高い書架が多数おかれている。背表紙が火灯りを反射してぼんやりと浮かび上がった。

目指すものはすぐに見つかった。アステイローダの気配を追えばよいのだから簡単だった。

仕舞い込まれていたとはいえ、エルハツシェが記した書物である。丁寧に保管されていて、そのことには安堵した。

「さて、始めようか」

懷から道具を取り出して机に並べると、裏表紙を開いた。

本当はもう一度はじめから読みたかったのだが、そうも言っていない。内部に異物があると結界は弾けやすくなる。手早く作業を終える必要があった。

アステイローダが記したのは、ジェスタの滅びだった。実際どのような経緯があってその結果に至るのかまではわからない。

だが、ヨルにはわかっていることが一つだけあった。

それは、祖国を滅ぼさせるわけにはいかないということだ。

呪いを使って運命を歪めることには抵抗がある。

占呪師にも道德観念はあり、呪いに関しては禁忌も存在した。未来を変えることは、その絶対的な禁止事項に抵触するものだった。

幼い頃から徹底的に叩き込まれたその考えが棘となってヨルの良心を刺す。それでも、ヨルの決意は変わらない。

絶対に、為さなければならなかった。

「僕はいい死に方をしないかもしれないね」

誰にともなく呟いた。率先して法を守らなければならない立場なのに、破ってばかりだから。

インク瓶の蓋を開けて、ナイフを手取る。

「……っ」

鋭い刃を静かに指先に滑らせた。熱さに似た痛みが走った。

珠のように膨らんだ鮮血を、インク瓶に数滴落とす。

辺りを汚さないよう手早く傷の処理をして、瓶の中に筆先を浸した。ゆっくりとかき混ぜる。

術の効果を強めるために、時として術者の身体の一部を使用することがある。髪でも爪でも、何でも構わない。

特に血を媒体にして施された呪いは、強い効力を持つ。だが、術者との結びつきが強くなりすぎるため、普段ならば滅多に使われない。

けれど、ヨルは敢えてそれを選んだ。絶対に、効力を発揮してもらわねば困るのだ。

全ての準備は整った。後は書くだけだ。

ヨルは一度深呼吸をした。気分を落ち着かせ、精神を集中させるために。

筆先が滑らかに羊皮紙を撫で、文字が意味を持ち始める。

強く呪いをかけながら、一文字一文字丁寧に記した。

ジェスタは滅ぶのではない。ただ一時、深い眠りに落ちるだけだ。いずれ、運命を背負った子供が生まれるだろう。彼が、彼だけが

目覚めを呼ぶことができる。

ジェスタに夜明けは必ず来る。彼は暁を告げる使者となることだろう。

何かに憑かれたように、ヨルは一心に筆を動かしつつけた。

どれだけかかっただろう。随分長い時が過ぎたような気がするが、蠟燭の減り方から考えると、実際にはそれほど経っていないのかもしれない。

「これで……いい」

書物を元の場所に戻し、インクと筆を再び懐にしまう。

蠟燭の明かりを消すと、周囲は闇に沈んだ。

来た時と同じように結界を潜り抜けると、ヨルは胸にたまったものを静かに吐き出した。

両肩にかかった緊張が解れていくのを感じる。

思った以上に強張っていたらしく、疲労が押し寄せてきた。

この予言が——呪いが現実のものとなるのはいつのことだろう。おそらく自分はこの目でそれを確かめることはできないはずだ。だから、未来に託すしかないのだ。

「どうか、ジェスタに祝福を——」

祈るように、闇に向かって告げた。彼にできることは、そう願うことだけなのだから。

目が覚めてまず、リムは大きく息をついた。

ヨルの緊張がまだ身体に残っている気がした。

立て続けに夢を見たせいだろうか。眠ったはずなのに、疲労感が
澱のように凝っていた。どことなく頭も重い。

アステイローダの願いを、ヨルの祈りを強く感じて、胸が痛かつ
た。

兄弟の、ジェスタという国に対する無条件の愛情が、リムの感情
を揺さぶってくる。

彼らは必死だった。大切なもののために自身さえ捧げた。

二人が全てをかけて守ったものを、無駄にしたくないと思った。

見た夢に引きずられたわけではなく、自身の心の深いところがそ
う訴えているのを、はつきりと感じていた。

けれど。

彼らの願いを知り、何よりも強く感じたのは愛惜の念だった。す
でに滅びてしまったのだという寂寥感が拭い去れない。

この状態で結論を下すことはできなかった。

夢の影響は少なからずある。リムは当事者であるから客観的な判
断は難しい。過去を知ったからといって正しい結論が下せるとは言
い切れないが、少なくともどちらかに偏った見方だけは避けられる
はずだ。

外はまだ暗い。夜明けまで、もうしばらく猶予がある。

「次はアーティノキア、だな」

自分に言い聞かせるように呟いて、リムは再び目を閉じた。

*

「父上！」

少女は、勢いよく扉を開けて室内に飛び込んだ。仕官養成学校の制服のままである。見習い騎士の位を示す浅葱色のマントが、荒くなった呼吸につられて揺れる。まるで彼女の心の動揺を表しているようだ。

普段の彼女であれば絶対にしない無作法さであった。幼い頃から叩き込まれた嗜みをどこかに置き忘れてきたらしい。それほど慌てていた。

「お静かに、アイラス殿下」

その場に同席していた白衣の老人が彼女を諫めた。アイラスははっとしたように足を止めると、足音を忍ばせるようにゆっくりと寝台の傍らに膝をついた。

寝台に横たわるのは、彼女の父である国王——ガスフォール・ウィン・レム・アーティノキアだ。その顔に血の気はなく、身体は微動だにしない。

その様子に、アイラスの胸を矢のような痛みが走り抜けた。

まさか、父はもう——

「姉様、父上は……っ!？」

「今は眠っていらっしやるわ。大丈夫よ。大丈夫だから、泣いてはいけないわ、イルー」

アイラスよりも先に来ていた姉のセリスタが静かな視線を向けてきた。そのまなざしの暖かさに、更に涙がこぼれそうになる。

姉の声もまた小さく震えていた。

父に残された時間がもうわずかもないことは、火を見るよりも明らかだった。それをわかっていながらも気丈に振舞う姉の姿に、アイラスは胸が締め付けられるようだった。

ここで父が他界すれば、継承権第一位のセリスタが王位に就くことになる。セリスタは、その責任を知っているのだろう。だからこそ、アイラスのように取り乱したりせずに、強いて顔を上げているのだ。

姉妹の母であるアーティノキア王妃は、二人がまだ幼い頃に亡く

なっている。父親が、姉妹にとっては唯一の肉親だった。

「父上……」

アイラスがそつと呼びかける。返事はなく、まぶたも開かない――けれど。

握った父の手は、暖かい。

その温もりが失われたのは、翌日のことだった……

「ね、イルー。母上が亡くなったときのことを覚えている？」

祭壇には大きな棺。死者を悼むために黒色に塗られ、大きな国旗が包むように掛けられていた。

左右に置かれた三又の燭台には蠟燭が灯っていて、この火は三日三晩絶やされることはない。

棺は4日目の朝に礼拝堂から運び出され、国葬が行われる。葬儀が終われば廟に埋葬され、ここで漸く一般国民の弔問が許されることになっていた。

棺に背中を預けるように、姉妹が座り込んでいた。

日が落ちた後の礼拝堂はしんと静まり返っている。二人のほかに人影はなく、声は意外なほどよく響いた。

「……いえ。母上のことは、殆ど」

「そうよね。当時あなたはまだ4つ。幼かったものね」

「姉様は、覚えていますか？」

「私も、あまり詳しくは覚えていないわ。でも、とても優しくて、心の強い方だった。いつも朗らかでお元気で。なのに流行り病が、簡単に命を奪ってしまったわ」

セリスタの声はとても静かだった。昔を懐かしむ色だけがそこにはあり、悲しみは感じられない。

「人の命とは、儚いものなのですね」

「もうずいぶん長い時が過ぎたと思ったけれど……不思議なもので、最期の言葉は今でも鮮明に覚えているわ」

「母上は、何と？」

「『お父様とアイラスを、守ってあげてね』」

「！」

息を飲むアイラスに、セリスタが小さく笑った。周囲は暗闇に沈んでいるから細かな表情まではわからない。

「子供の使命感ってすごいわよね。私、約束したのよ。絶対守るから、安心してくださいって」

「……………姉様」

「こうして大人になってみると、自分の力のなさを思い知る。私は——父上を支えることさえできなかった」

「姉様はいつでも一生懸命父上のお力になっていました。父上も、姉様がおそばにいる時はとても穏やかで優しくかった。大丈夫、母上はそれをちゃんと見ておいでです」

アイラスの言葉にセリスタが微笑む。どこか淋しげで儚い笑みだった。姉を慰める言葉さえ満足に口にできないのが口惜しい。アイラスは小さく唇を嚙んだ。

「母上との約束も満足に守れていないのに、今度は父上からもっと大きなものを預かってしまったわね」

「国——アーティノキアのことですね」

「心配だわ。不安でたまらない。代々受け継がれてきたものを、私が壊してしまいそうで——怖いの」

セリスタの肩が小刻みに震えている。

王位継承者という地位が背負わなければならない責任とはなんと重いのだろうか。

代わりに背負うことはできない。アイラスにできることはごくわずかしかない。となれば、自分が為すべきことはたったの一つだけ。「私がいいます。盾となり剣となり、姉様を守ります。あなたを害そうとする者全てから。だから——」

「ありがとう、アイラス。あなたがいてくれてよかった」

「いえ、そんな……」

「どうか、これからもこの愚かな姉を助けて頂戴ね」

「及ばずながら、ずっとお傍におります」

気負うように頷くアイラスに、セリスタが悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「もちろん、貴女がお嫁に行くまでで構わないわよ」

「姉様！」

ふふふ、とセリスタが軽く笑う。つられて、アイラスも笑う。

暗い礼拝堂に、姉妹の柔らかな笑い声がいつまでも小さく響いていた。夜の闇に、零れ落ちそうな涙を隠して――

*

セリスタは少々苛立っていた。

決済しなければならぬ書類は山と積み上げられ、それに埋もれるように机に頬杖をついている。

「陛下、お聞きになつていらっしゃいますか？」

嫌味満載の口調でそう彼女に問うているのは、女官長だった。

女官長の言い分は、セリスタにはよくわかっていて、簡単にいうと、早く配偶者を得て世継ぎをもうけるということなのだが、こればかりはおいそれと頷ける問題ではない。

そもそも、国家君主の婚姻である。安易に決められることではなかった。

現在名前の挙がつている婚約者候補は2名いた。一人は隣国オルセリアの第2王子。もう一人はアーティノキア重鎮、シェズ伯爵家の長男である。

セリスタとしては、どちらも承服しがたい相手だった。

即位してまだ半年。まだ結婚などしたくないという個人的な感情ももちろんあるが、それが理由ではなかった。

隣国オルセリアとの関係は、彼女の祖父である先々代国王が条約を結んで以来良好である。だが、隣国の王が、隙あらばアーティノキアから領土を削り取ろうと眈々と狙っているのをセリスタは知っ

ていた。

その状態で、オルセリア王子を女王の配偶者としてアーティノキア王家に迎えるのは、非常な危険を伴う。猫の子を預かっていたはずが、育ってみたら虎だったということになりかねない。

条約の有効期限もさほど長くは残されていないから、関係が破綻した場合、何らかの権利を主張されることは目に見えていた。子でも為そうものならなおさらである。

シェズ伯爵家は、古参の臣だ。だが、過去に一度も王家血族と婚姻を結んだことがない。たまたま年齢に見合う者がいなかったというだけなのだが、他の貴族家は大抵王家と縁続きである。シェズ伯爵家にしてみれば、のどから手が出るほど王家とのつながりは欲しかろう。

女王の配偶者となれば、これ以上ないほどの後ろ盾を得ることになる。諸侯に対する立場も格段に向上する。子でも得ようものなら、その関係は更に強固なものになるだろう。爵位を上げるという要求程度で済めば良いが、国政における発言力が強まるのは歓迎できなかった。

アーティノキアにおいて、それほどまでに王家の力は強い。

外戚としての権力を確たるものにしようという伯爵家の思惑に乗るのは、どうしても納得がいかなかった。

「わかつているわ、女官長。でもね、彼らは駄目なの」

セリスタは、自分に政治能力があるとは思っていない。自分の役目は飽くまでも「中継ぎ」だと理解していた。

代々受け継がれてきたものを、沈めることなく乱すことなく時代へと渡す。それこそが自分の為すべきことだと思っていた。

そのために、後継者は優秀でなければならない。

優秀な後継者を得るためには、より優秀な伴侶が必要になる。それゆえに、安易な選択をすることは許されなかった。

本音を言えば、早く王位を退いてしまいたい。玉座に座ることの意味を知っているからこそ、そう思う。自分には相応しくない椅子

だと。

だが、重責から開放されたいからという理由で早々に結婚相手を決めてしまうことができない程度には、セリスタは自身の責任を承知していた。

「……難しいわね」

女官長の視線を避けるように、セリスタは書面に目を落とした。

それは、今年の仕官養成学校合格者一覧だった。内容を見て意外そうに首をかしげる。

「今年は合格者が少ないのね」

書かれていた名前は5名分だった。その内2名は、城壁内に居を構える名家の子弟である。

「リッケルとヴェリア、二大侯爵家の子は同じ年なのね。二人とも一度目の試験で合格してくるなんて、さすがだわ」

「どちらも武門ですから、優秀なのも頷けます。陛下とお年も近いことですし、将来はきっと側近としてお力になってくださるでしょう」

「そうね」

主従であるから、親しい関係は築けないかもしれないが、それでも多少は期待してしまう。

「どちらかが陛下と結婚なさると我々も安心なのですけれど」

「いやね、女官長。彼らはまだ14よ？」

セリスタは軽く笑う。当のセリスタとてまだ18になったばかりだ。

時期がくれば、全てが収まるべきところに収まるだろう。今はただ、その時が訪れるのを待つ、それが自分にできる最善だとセリスタは思った。

*

目を覚まして、室内に人の気配がないことに気づく。どうやらチ

エチエは早くから出かけてしまったらしい。

のそりと寝台から起き出して、リムは時間を掛けて身支度を整えた。

見たばかりの過去を知識として整理するために、一人で考える時間があるのはありがたかった。

鏡の中には、色違いの瞳をした自分が映っている。力を使ったせいで呪いが解けてしまったようだ。かけ直さねばならないのがひどく億劫だったが、そのまま外出するわけにもいかない。

目を伏せて、深く呼吸をする。ひとつ、ふたつ、みつ。脳裏に色が変わった自分を思い描きつつ、ゆったりと呼吸を数えた。

この作業にも大分慣れてしまった。それが良いことなのか悪いことなのかはわからないが。

今日も失敗することはないだろう。そう確信しつつ、リムはまぶたを開く。

「……よし」

茶褐色の双眸が、鏡の中から自分を見返していた。

通りには人が多かった。

忙しそうに行き交う人々を眺めながら、人並みを縫うようにして歩く。

露台に席を設けた飲食店から良い匂いが漂ってきて、リムの嗅覚を刺激した。

急に感覚が戻ってきたのか、唐突に胃がもの欲しそうな音を立てて空腹感を訴えた。

そういえば、昨夜食事をとって以来、何も口にしていない。昼食には早い時間だからか、店も空いている。

「何か食べよう」

気が付いたら、ふらりと店に足を踏み入っていた。

店主に簡単な食事を頼んでから、店内に席を取る。人目に触れやすい露台は避け、しかし通りはよく見渡せる位置を選んだ。

店内は清掃が行き届いているらしく、清潔で居心地が良かった。裏道にある店とは大違いである。

路地を一本入るだけで、イーロスの町は途端に貧民街のようになる。この格差が今のイーロスを象徴しているようだ。

豊かな者は贅沢を楽しみ、貧しい者は日々の糧にさえ困窮している。

全国民が平等である国など不可能だ。リムとてそれはわかった。

リムにできることなどないに等しいが、それでも現状を知っているのと知らないのでは天地ほどの開きがある。

せめて、女王がこの現実を認識してくれさえすれば、アーティノキアも少しは変わるかもしれないのだが。

不意に昨夜見た夢でのセリスタの様子が、頭をよぎった。

——代々受け継がれてきたものを、沈めることなく乱すことなく時代へと渡す。それこそが自分の為すべきこと……

「何もしないことが、最善の方法ではないのですよ、陛下」

国王の行動は、確かに騒乱の契機となることがある。だが、何もしなければ何も起こらないと考えるのは早計に過ぎるし、逆にそれが反乱を生む場合もあるのだ。

現在、アーティノキア重鎮と呼ばれる人々は、先代国王の時代から仕えてきた者が殆どだ。入れ替わったのは一握りと言って良い。

女王が全幅の信頼を寄せられる人間は、その中でも数えるほどしか居まい。

彼女もそれはわかっていたらしい。だからこそ、リムとラージャに期待したのだ、側近として信頼できる関係を築きたい、と。

もう長い時間考え続けてきた。

既に失われた国——ジェスタと、これからも発展する余地のあるアーティノキア。自分にとって、大切なのは果たしてどちらなのだろうか、と。

いつだって真っ先に浮かぶ答えは「両方」だった。どちらも自分

にとってはかけがえのないものだ、それだけは自信を持って断言できた。

だからこそ気持ちは揺らいだ。どちらかを選び、選ばれなかった方は棄てねばならないのだという思いがリムの決断を鈍らせてきた。だが。

自分にとって意味のあるものは全て「ここ」にあるのだとリムは思った。双方の過去を覗き見て強く思ったことがそれだ。

大切なのは「国」ではない。守りたいものは「名前」ではないのだ。アーティノキアと呼ばれようがジエスタと呼ばれようが、リムにとって価値のあるものは、彼を——そして彼の大切な存在たちを育んできたこの「大地」なのだから。

もう迷う必要はなかった。

ジエスタとアーティノキア。別々に見えるが、どちらも繋がっている。どちらにも深い関わりを持つリムの存在がその証明になることだろう。

ジエスタを滅ぼしたものが、失われる運命にあった一族の血を助けたのは皮肉なことだが、それとて必然だったのかもしれない。

生も死も、未来を紡ぐ流れの一つでしかない。

「それさえわかれば……」

どうしても片方を選ばなければならぬわけじゃない。

大切な物は複数あつて良い。

人に聞かれれば、安直な答えだと言われるかもしれない。悩む必要などなかったと笑われるかもしれない。

だが、こうして悩んで苦しむことが、リムにとっては必要なことだった。超えねばならない壁だったのだ。そのために費やされた時間は決して無駄ではなかったはずだ。

そうして得た答えだからこそ、真実になり得るのだから。

ヨルは言った。リムが出した結論であれば受け入れると。

これが答えだと自信を持っていえる結論が、今のリムの内にはあった。

「よし」

晴れやかな声でリムが顔を上げる。不審そうに店員がこちらを見ていたがそれには頓着せずに、運ばれてきたままにしていた料理に手を伸ばした。

ヴェリアであつた頃には決して口にしなかつただろうそれらは、お世辞にも上質とはいえない。

けれど、今のリムにはとても美味しく感じられた。調理法も素材も特に手の込んだものではないのに。

気持ち次第で味覚まで変わるものかと少々おかしくもあつたが、リムは久しぶりに解き放たれた気分で食事を終えたのだつた。

城壁の警備は意外と緩い。特に日中は一般市民にも開放されているため、厳しい身元確認をされることはなかった。もちろん、城へ入る時は正式な許可申請が必要だし、不審な行動を起こせばすぐに警備兵が飛んでくる。が、余程のことがない限り、城門で止められることはなかった。

というのも、イーロスの城壁内には住宅街があるからだ。知人を訪ねるのにいちいち申告が必要となると、人々の城への足は遠のく。国民に開かれた城であると示す意図もあった。

夕刻の朱色に染まったイーロスの街が美しい。だが、それをゆったり眺める時間はなかった。

もうすぐ閉門時間である。

城門が閉ざされると警備兵らによって巡回が行われ、とりたてた用もなく城壁内に残っている者達はイーロスの街へと帰される。

今日のリムには行かなければならない場所があった。途中で兵士に見つかって追い返されるわけには行かない。そのためには、開門時間内に内側へ入り、巡回をやりすごす必要があった。

リムは子供時代をこの城壁内ですごしている。どう隠れば良いかは知っていた。

少年期にはよく家を抜け出したものだ。夜遅くまで遊んでいて父親に叱られたことも数回ではない。

昔を懐かしく思い起こしつつ、リムは目的地のすぐ傍までやってくると身を潜めた。

こうしてそのまま息を殺して、日が落ちるのを待つのだ。

*

記憶だけを頼りに、リムはその窓に近づいた。極力気配は消して

いる。

途中で見咎められれば投獄は免れない。それはリムが追われる立場であることは全く関係なく、単なる不法侵入だ。盗人と判断されて即座に斬られたとしても、リムに文句は言えない。

そこは、イーロス城を左手に臨む位置にある、ラーゼンリート侯爵邸の庭先であつた。

目的の窓は床から天井まである大きな物で、記憶の中と寸分変わらない。

広い露台を乗り越えて、リムは軽く窓を叩いた。

反応がない。が、二度三度繰り返すうち、窓辺に足音が近づくのが聞こえた。ややあつて紗幕が揺れる。

その隙間から、ラージャが不審そうに顔を出した。

リムの姿を認識した瞬間に顔色が変わる。立て続けに紗幕と窓とが開かれ、ラージャが声を張り上げた。

「馬鹿か、お前は！！ 遣いを超越せと言っただろ！ こんな所にのこのこ現れて——お尋ね者だという自覚はあるのか？」

「静かに、ラージャ。ここまで誰にも気づかれないように来るのはそれなりに大変だったんだ。俺の苦勞を無駄にしてくれるな」

「あ、ああ、すまん。……って、おい。何故俺が謝らねばならんだ」

ラージャは複雑そうに顔をゆがめたが、リムのことを気遣つてか、先ほどよりも随分と密やかな声だった。

そんな友の様子に、リムは心が温かくなった。

口調は厳しいが、ラージャがリムを受け止め、きちんと正面から向き合ってくれているのがわかったからだだった。

「この件に関して、俺には説明する義務と責任がある。自分から出向くのが筋つてもものだろう？」

「それはそうだが……」

「細心の注意は払ってきたから大丈夫だ」

そう言つてもまだ腑に落ちない様子のラージャだったが、この状

況でリムを外に置いておくわけにも行かない。身体をずらしてリムを促した。

「まあいい。入れよ、不法侵入者」

さすがに正面玄関を利用するわけには行かない。非常に無作法ではあったが、リムは窓から室内へと足を踏み入れたのだった。

ここへ来るのは久しぶりだ。

最後に来た時には、彼らはまだ士官学校を出たばかりの騎士見習という身分だったと思う。

あの頃と違っていているのは、執務机に書類が積みあがっていることと、お互いの立場だけだった。

「結論を先に言おう。——俺はアーティノキアを棄てない」

「ということは、ジエスタを——」

「ジエスタも棄てない」

自信にあふれた声で、リムは堂々とそう宣言した。当然の反応だとは思うが、ラージャは虚をつかれたように目を丸めた。

少しだけ笑って、リムは一つずつ胸のうちのうちを語り始めた。

「なるほどね」

一通り話を聞き終わったラージャは、そうつぶやいて革張りの椅子にどっかりと身を沈めた。

「正直、具体的な方策など何も決まっていらないんだ。ただ——」

「ただ？」

「俺は、女王陛下にお尋ねしたいことがある」

リムの言葉に、ラージャが意外そうな顔をした。ラージャは、もしかしたらリムがすぐに事を起こすのではないかと思っていたのかもしれない。

「陛下に？ 何だ」

「アーティノキアをどうするつもりなのか」

「……というと？」

「今まで、陛下は安穩と暮らすばかりで国のことを考えていないのだと俺は思っていた」

影に隠された部分に気づくことなくただ毎日を過ごしているだけではないか。そう疑っていた。あの夢を見るまでは。

静観してはいるが、彼女なりにアーティノキアのことを考えているのかもしれない。そう思い始めたのだ。

表から見える女王の姿が本当に真実なのかを確かめてみたかった。そして、街で聞いた噂が真実だとすれば、件の占い師などを懐近くまで引き入れたその真意を知りたかった。

「それで、聞いてどうする？」

「聞いてから考える」

リムは、そう言って笑った。アーティノキアを倒すつもりはない。女王の答えが納得できるものであれば、それでいい。もし納得できないものであったなら、どうするかはその後で考える。それがリムの選んだ、現時点での「道」だった。

ラージャの顔色に呆れが混じる。判ずるようにリムを真っ直ぐに見据えた。

「お前らしくもない、行き当たりばつたりのやり方だな」

「まあ、そうだろうな。だが、それ以外に良い方法が見つからなかったんだ」

「ふうむ……だが、詭弁とも言い切れぬ、か」

ラージャ唸る。両腕を胸の前で組んで、考え込むように天井を見上げた。

何を考えているのかとリムが声を掛けようとした刹那。

「よし！」

ラージャがぽんと両手を叩いた。

「ラージャ？」

「いいだろう。俺も付き合おう」

今度はリムがあっけに取られる番だったようだ。ラージャの唐突な申し出に、口にするべき言葉が見つからない。

「……なんだって？」

「俺も付き合おう。そう言ったんだよ、リム。お前の決意とやらが甘い『理想』に過ぎないのかどうか、俺がこの目で確かめてやる」

ラージャはにこにこ笑っていて、それがリムには理解できない。リムのしようとしていることは、一步間違えば反逆罪に問われるものだ。正規の手続きを踏まずに事を済ませようとしている以上、騎士として女王に謁見に出かけるのとは訳が違う。

「お前、自分の言っていることがわかってるか？ 捕縛される可能性だってあるんだぞ！」

「それならそれで構わないさ」

「お前はいいかもしれないが、リツケルの家はどうする！？」

「この家は大丈夫だよ。俺には兄も姉もいるんだぞ？ 俺一人くらい居なくともあの二人が何とかするだろうさ。だがな、リム」

ラージャはそこで一度言葉を切ると、リムのほうに身を乗り出した。人差し指でリムの胸元を軽く突く。

「お前には俺が必要だろう？」

「！？」

にやりとラージャが不敵に笑う。

「アーティノキアを捨てないと決めたのだろう？ お前がそう言うのなら、そうそう悪いことにはなるまいよ。大丈夫、お前なら上手くやるさ」

「無責任に言うなよ」

ようやく、リムはそれだけを呟いた。ラージャが得意げに笑っているのが見えた。

「無責任じゃないさ。お前を信頼しているんだよ、リム」

そう答えたラージャの声はとても真摯で、リムは胸が熱くなる。

「ラージャ……何故、そこまで——」

声がかすれているのをリムは自覚した。

「俺たちは友だろう。違うか？」

友と言われて、不意にリムの視界が滲んだ。そのたった一言がこ

れほどまでに重く、そして熱く響くものだ」とリムは初めて知ったのだった。

「いや、違わない。……ありがとう、ラージャ」

リムは、机に額が触れるほど深く頭を下げる。しっかりと握り締めたその手は、わずかに震えていた。

「莫迦なやつだな。いい歳をして、男が泣くなよ」
ぐりぐりとラージャの手が頭を撫でた。

泣いてなどいないさ。そう反論しようとして、失敗する。

リムの意思に反して、声は咽喉から出てこなかった。
そして。

机の上には光る雫が数滴こぼれていた……

空が朱から藍へと色を変える頃のことである。

部屋を訪れる人影があつた。

「おい、誰か居るか？」

なんとも間延びした声に、チエチエは軽く脱力する。

「居るわよ」

知っている声だった。チエチエとしてはあまり歓迎したくない相手だったが、追いつ返すわけにもいかない。

扉を開けると、ラージャが気軽な様子で片手を挙げた。内部を一瞥して、小首をかしげる。

「リムは？」

「外出中。もうじき戻ると思うけど」

ふうんと呟いて、ラージャは手に持った瓶をチエチエに手渡した。

「なに、これ？」

「土産」

ラベルも何も貼っていない。大小1本ずつある。

「……お酒？」

「大きいのはな。小さい方はお前さんにやる」

「私に？ 何？」

「砂糖に漬けた葡萄を絞って作った果汁だ。水で割って飲むといい」

「ありがとう。いただくわ」

「どういたしまして」

ラージャはにこりと笑って、窓際に置かれた椅子に腰をおろした。ここ数日、決まって日没後にラージャはリムを訪ねてくる。取り留めない雑談が主だったり、城や国王の話が飛び出したりと、話の内容は様々だった。

ラージャのチエチエに対する態度は紳士なものだ。女性の扱いに慣れているのか、チエチエのことを邪険にすることはない。

嫌いなわけではないのだ。けれど、少しだけ面白くなかった。

ラー ज्याが訪ねてきたときのリムはとても嬉しそうで、それが羨ましい。自分と話す時の表情とは明らかに違うのだ。

席を外せとは言われないものの、会話の半数以上はチエチエにはわからないことだし、疎外感を覚える。もちろん、二人ともチエチエを蔑ろにするわけではないから、彼女が一人で勝手にそう感じているだけなのだが。

それに加え、チエチエには疑問に思っていることがあった。リムが居る時には絶対に口にできない疑問が。

いい機会かもしれない。

「あなたは、お城の騎士なのよね？」

前触れなく尋ねると、窓の外に向いていたラー ज्याがチエチエに視線を巡らせた。

「ああ、そうだ」

今更何を、という表情でラー ज्याが頷く。けれどその顔は真摯で、茶化すような色はない。どうやら真面目に答えようとしてくれるようだ。

リムとの会話を聞いている限り、適当なことを言って誤魔化すような男ではないことはわかっていた。それでも、チエチエを部外者として扱わなかったことは嬉しかった。この男に対する評価を改めても良さそうだ。

視線に促されるように正面に座り、チエチエは単刀直入に聞いてみることにした。

「どうして、リムの味方をするの？」

疑問を口にした瞬間、ラー ज्याの瞳が鋭さを増した気がした。初めて会った夜に感じたように、射すくめられた気分になる。

ラー ज्याは答えない。真意を探るような見定めるような視線が痛かった。

「俺も聞きたい。お前さん、なんでリムにくつついている？ お前さんにとってはリムは他人だろう？」

質問に質問で返すのは反則だと思う。とはいえ、反論してラージヤに勝てる自信はない。

チエチエは素直に頷いた。

「確かに、他人といわれれば他人だわ。でも、リムは私を嫌悪したり、好奇の目で見たりしなかった」

「……というത്？」

「私はね、孤児なの。物心ついたときには路上で暮らしてた。親の顔なんてみたこともないわ。……棄てられたのか、死んじゃったのかはわからないけど」

「よく生きてこられたな」

ラージヤは感心したように目を見張った。そこには驚きはあるが、蔑むような響きはなかった。

あの日のリムと同じだった。

「物乞いもしたわ。盗みもした。石を投げられたことやぶたれたことなんて、一度や二度じゃきかないわ」

「そうまでして、どうして？ 生き抜くのは楽じゃなかったらう？」

「そうね。でも、死にたくなかったから。生きていたかったから。理由はそれだけよ」

「そうか」

「私、リムの財布を掏り取ろうとしたの」

「へえ。成功したのか？」

「掏り取るのはね。でもすぐに見つかって捕まったけど」

「やるじゃないか。あいつの隙を突くとは」

「財布を取り上げられて、こんこんとお説教よ？ そんなこと初めてだったわ。初めて、人として扱われた気がして……嬉しかった」

「……ふふ、リムらしいことだ。あいつにはちょうどお前さんと同じくらいの妹御がいる。放って置けなかったんだらう」

「それから後も、ことあるごとに付きまとう私に、リムもサヴァロアンもはちゃんと相手をしてくれた。上から見下ろすんじゃないくて、対等な立場で」

「サヴァロアン——ヴェリアの執事か。リムと一緒に姿を消した。従兄弟だと言っていたか」

「そう。サヴァロアンは怖かったわよ。少しでも私が悪さをしようとすれば、容赦なく手を叩かれたもの」

「ほう？」

「最初の頃は、どうして叩かれるのかわからなかった。でもサヴァロアンもリムも、根気良く私を教え諭してくれた。途中で投げ出したりしなかった」

「ああ。いい男だろう？」

ラー ज्याは自分のことのように胸を張る。チエチエはこくりと頷いた。本当に、ラー ज्याの言う通りだ。二人とも、いい人過ぎる。

「彼らは、私を闇から引き上げてくれた。住む場所と食べ物を与えてくれた。……私に人として生きること教えてくれたの。そんな彼らを大切に思うことはおかしいことかしら？ 私にできることがあるなら、手伝いたい。彼らが、私にそうしてくれたように」

「いいや」

ラー ज्याの瞳からは陰が消えていた。ふわりと笑みを浮かべる。

包み隠さず全てを語ったチエチエを誉めるように。

お前を認めよう。彼の瞳はそう語っていた。

「俺も同じだ。リムは俺にとって大切な友だ。このアーティノキアで唯一信頼に足る男だと思っている。あいつになら、たとえ背後から斬られたとしても文句は言わんよ」

友。その言葉にこれほど重みを感じたのは初めてだった。

絶対的な信頼関係が彼らの間にはあるらしい。詳しい話など聞かなくてもそれがわかる。

一緒に居ない時間が長かったとしても変わらないものがある。それがチエチエには羨ましかった。

この人には勝てないかもしれないと、チエチエは思った。

自分の、リムに対する気持ちが悪く思っているとは思っていない。けれど、リムはどうだろう。彼がラー ज्याを信頼するほどには、チエ

チエは大切に思われていないのかもしれない。

リムがどういう身分の人だったのか、ラージャと再会するまで一切教えてくれなかったのがその証左に思える。

と、そんなチエチエの気持ちを讀んだのか、ラージャがにやりと笑った。

「リムに大事にされていないとか、くだらないことを考えるなよ？」
「え？」

「リムは、身内に対しては情が深い男だが、他人に対してはかなり素っ気無いところがある。あいつは自分の意志でお前さんを傍に置いてるんだろう？ 他人だと思っている者を、たとえ一時でも近くに寄せたりはしない男だ」

「本当に？」

「ああ。ことが済んだら聞いてみるといい」

「……うん、そうする」

「よし、良い子だ。リムがお前さんを可愛がる理由がわかる気がするよ」

「そう？」

「素直で、少々お転婆で。明るくて、一生懸命。加えて、リムのことが大好きときた。お前さんはロスに似ているんだ。顔立ちも雰囲気も全く異なるのに、不思議なものだな」

「似ている？ —— ロスって、リムの恋人？」

「イーファロッサ・セル・ヴェリア。さっき言っただろう？ リムの妹だよ」

「なあんだ」

答えておいて、一瞬考えた。

恋人ではなかったと安堵する反面、妹に重ねて見られていたかと思つと少し残念な気もする。

なぜそう感じるのかよくわからないが、複雑な心境だった。

それよりも何よりも、今はリムに大切にされていることがわかって嬉しい気持ちの方が勝っていた。

それだけで満足しておくことにする。

——コツコツコツコツ。

小さく扉が鳴った。短く4回。それがリムのノックの癖だ。

「帰ってきた」

扉が開くと同時に、チエチエは席を立った。姿をあらわしたリムに駆け寄る。

「ただいま、チエチエ」

「邪魔をしている」

「ああ、ラージャ。来ていたのか」

返事を待たずに、リムはラージャの正面に座った。チエチエは先ほど渡された酒の瓶と硝子の杯を机に並べると、注ぐのは任せてリムの隣に席を取った。

リムの好みに合わせてか、ラージャが持参したのは果実酒らしい。瓶を開けると甘い香りが周囲に広がった。

軽く杯を合わせる音が、室内に響いた。

「ちょうどよかった。聞きたいことがある」

「聞きたいこと？」

ああ、と頷いて、リムは杯を一気にあおった。酒に弱いリムらしくない飲み方である。

「城にいる占い師を知っているか」

「もちろん。若い男だろう？ 陛下が好きそうな美形の」

「その男の素性を詳しく知りたい」

「ふうむ……」

なぜそれを問われるのか腑に落ちないようすで、ラージャは首をひねった。空いた杯に手酌で酒を満たしつつ、思案を巡らせる。

2杯程飲み干して、ラージャは杯を卓に戻した。

「陛下に拝謁するようになったのがいつ頃かはわからんが、城に部屋を与えられたのはお前が失踪してから3ヶ月ほど経った頃だったか」

「陛下がそれをお望みになったのか」

「ああ。アイラス殿下や宰相殿は反対なさったようだが、それを押し切る形でな。感情に乏しい男だというのが、俺の第一印象だった」あの男が鍵を握っているとリムはにらんでいる。女王の懐近くに入り込んだのは何か思惑があつてのことだろう。

「そういえば」

何かを思い出したように、ラージャが軽く手を叩いた。

「うん？」

「アイラス殿下に聞いたんだが、あの占い師、予言をしたらしい」

「予言？」

「なんて言っていたか……」

記憶を探るように、ラージャがうなる。

ざわりと肌があわ立った。嫌な予感がした。不安——否、恐怖と呼んでもおかしくないほどの不吉な気配。

「東から南へ、風だか嵐だかが吹き抜けるとか」

「風？ 東から南へ……まさか——」

それにきづいて、リムは顔から血の気が引くのを感じた。

リムが赴任していたフェッセ騎士団が置かれていたのはアーティノキア「東」部の街であり、イーロスを出た彼らが身を隠していたのはセリテア大陸「南」部のディア・アルカだ。そして——「風」。

「その予言が示しているのは、俺だ」

「……え？」

「間違いない」

「だが、陛下はその予言を聞いてお前を呼び寄せたんだぞ？ その風だか嵐だかからアーティノキアを守るために」

「だから、それが占い師の示した『予言』だったということさ」

「どういう意味だ」

「俺が、陛下の命で呼び寄せられ、失踪し、そしてアーティノキアに嵐を巻き起こす、と。それこそが占い師がみた未来だったんだよ。陛下は図らずも占い師の予言どおりの未来を導いてしまったという訳だ」

これ以外にも、その占い師は正確な未来を予言しているようだし、時読みの精度はかなり高いらしい。正しく時の流れを知ることができるという点では、占い師の方が優位な立場に居ると考えるべきだろう。

「お前は未来を知ることができないのか？」

「そういえば、やったことがないな」

今までに見たことがあるのは全て過去だった。やり方はおなじだろうし、理論的には可能だろうが自信はなかった。

安定してきたとはいえ、自在に力を操れるほど、占呪能力に長けているわけではない。

それを伝えたと、ラージヤは小さく首を傾げた。そしてリムの胸元を軽く指差す。

「ならば『橙絲記』殿に聞いてみたらいい。占呪師の長だった人なのだろう？」

「……ああ、なるほど」

今まで考えてもみなかった選択肢に初めて気づく。確かにヨルに読んでもらえるのならば、その方法が一番良さそうだ。

だが。

——すまない、それは無理だ。今の僕は意識のみの存在だから、君を支えることはできても占呪師の能力を行使することはできない。そもそも僕の場合は呪いに特化したものだったから、時読みは上手くないんだ。

「難しいようだぞ。だが、それでいいと俺は思う」

妙にさっぱりとした言い様に、ラージヤが不思議そうな表情を浮かべた。

確かに、時の流れを知ることができれば行動は起こしやすくなるだろう。けれど、それはジェスタの力に頼ることになる。

だから――

「俺の占呪能力は、俺が決心する助けとなってくれた。それで十分だ。俺はアーティノキアを棄てないと決めた。これ以上ジェスタの

力を使うのは間違っている気がする」

「間違っている？」

「ああ。俺は、アーティノキアに住む者の一人として行かなければならない」

それこそがリムの決意だった。

「なるほどね。ま、お前がそう決めたならそれでいいさ」

ラージャは自分が納得しなければどんなことでも素直に承服しない男だ。彼が是と言ったのなら、彼の中で同意を得られたということだろう。

「ジェスタの力を使わない以上、お前の助けが必要だ。よろしく頼む」

「任せておけ。で、決行はいつにする？」

「それなんだが……」

リムは一度言葉を切ってチェチェエに向き直った。

「チェチェエ、一人で馬には乗れるか？」

「リムとサヴァロアンに徹底的に仕込まれたから大丈夫だと思うけど」

「よし。お前に行って欲しい所がある」

「サヴァロアン、ね？」

「よくわかったな、その通りだ」

誉められたのが嬉しかったのか、チェチェエが得意顔で笑った。

「行って伝えてくれ。帰って来い、と」

「任せて！」

後は、サヴァロアンが合流するのを待つて城へ赴くだけだ。

いいよ、か。

全ての真実が明らかになる時は、近い――

第5章 約束 ― 2 ―

闇夜に昏い色が翻る。人通りの絶えた街路で、それが何であるのか気づく者は居ない。

密やかな足音は二人分。極力気配を消しつつも、かなりの速度で走り抜けてゆく。

彼らは全身を黒衣に包んでいた。纏うマントの裏地だけが紺色だったが、新月の夜では色の識別は難しい。

「――」

先に行く男が曲がり角で足を止めた。

後方を走る人物が短く呼んだようだ。こちら男性である。先の男より幾分身体が小さい。

呼ばれた男が顔を上げた。

目線だけを交わして、小さく頷きあう。

ここを曲がればイーロス城の門が見えてくる。そこが彼らの目指す場所であった。

*

――ガンガン！ ガンガン！

激しく門扉が叩かれる音でヴェリア侯爵は目を覚ました。

常であれば先触れがあるはずだし、このような無作法なおとないをすることもない。

礼に構っていらぬほどの非常事態が起きたということか。侯爵は手元にあったローブを羽織ると、足早に玄関へと向かった。

「ヴェリア侯爵へ、急ぎお取次ぎを！」

乱れた呼吸を整えることもなく、兵士は声を張り上げていた。応対に出たのは夫人の方が早かったようである。

「どうした、何があった？」

夫人を目線だけで下がらせると、短く尋ねた。侯爵の声は落ち着いていた。武人としての経験から、緊急時こそ冷静であるべきと知っているからだった。

伝令と思われるその兵は、侯爵の姿を認めるとその場に膝をついた。

「ぞ、賊が門を突破し城壁内へ侵入！ 至急おいでくださいますようにとのこと！」

侯爵が眉を顰めた。賊ごときで侯爵を呼びつける理由が解せない。

「……数は？」

「恐らく——二名」

「二人だと！？ たった二人で門を破ったというのか？ 兵は何をしていた！」

「そ、それが全く歯が立たず……」

「そんなことがあるはずが——」

王都を守る騎士は皆それぞれに訓練を積んでいる。

夜間で多少手薄だったとはいえ、周囲の巡回も含め五名は警備に就いていたはずだ。

一対一の勝負ならまだしも、二対複数で遅れを取るなど、本来ならあつてはならないことである。

追求されて兵士が口ごもった。煮え切らない態度に侯爵の怒号が飛ぶ。

「知っていることを全て話せ！ のんびりしている暇はないのだぞ」

「も、申し上げます。侵入した二名の賊はラーゼンリート・エス・リッケル將軍と……リメルテス・ユニ・ヴェリア將軍なのでございます！」

リメルテス。その名を聞いて、侯爵の顔から表情が消えた。

あれが来たのならば、生半な兵士では歯は立つまい。あっさり突破されたのも道理だ。

ヴェリアの後継者として鍛え上げてきたが、まさかこんなことになるとは。苦々しい思いがヴェリア侯爵の胸に湧く。

しかもリツケルの息子まで一緒というのだから、言葉も失おうというものだ。二人ともいつかは国の双壁となったであろう、有望な騎士だった。

「父上！」

凍りついたように動きを止めた侯爵を呼び戻したのは、まだ年若い少年の声だった。

「父上、本当ですか！？ リム兄上が――！！」

「わからぬ」

振り返ると、すっかり身支度を整えた息子の姿がそこにはあった。レイニアス。リメルテスにとっても懐いていた、侯爵の実子である。「私はすぐに出る。お前は家から出るな」

「父上、兄上の所へ行かれるのでしょうか？ 僕も一緒にします」

「ならん。レイニアス、父に従え」

「従いません！ 許していただかずとも、勝手について参ります！」

何をいつても引こうとしない様子に、侯爵は小さく舌打ちした。

「待っている。すぐに仕度を整える」

「はい！」

レイニアスは蒼白な顔のまま、緊張した声でしっかりとうなずいた。

*

城門の兵士は数が少なかったこともあり、意外と簡単に突破できてしまった。

拍子抜けしたというのが正直な所だが、心配にもなる。

こうまであっさり破られてしまうというのは、一国の城を守る門の警備として問題があるのではなからうか。

突破した本人が言うのもおかしい話だが、もう少し強化するべきだろう。

「リム！」

ラー ज्याの声でリムははつと足を止めた。

城門で事を起こしたときに伝令が飛んだのだろう。二人の眼前には兵士が数人、道を塞ぐようにして立っていた。

城門よりも数が多い。さすがに多勢に無勢、二人で片を付けるのは少々骨が折れそうだが。

だが。

「迷っている暇はない、行くぞ」

剣を抜き、走り始めた。

城まではまだ距離がある。あまり時間をかけては徒に兵の数を増やすだけだ。

対する兵士たちには戸惑いがあるようだった。賊である彼らの正体を知っているが故だろう。

「悪いが、手加減はしてやれそうにない。怪我をするのが嫌な者は、大人しく引いてくれ」

ラー ज्याの言葉に、兵士たちがざわめく。リッケルとヴェリア、両將軍の能力を知っているために、うかつに手出しできないらしい。

「何をしている。相手は賊だ！」

隊長らしき兵の檄が飛んだ。

愛国心にあふれた騎士はいるらしい。剣を抜く音が夜闇の中に響いた。

「やれやれ。無駄な血を流したくはなかったが、やるしかないのだな」

まさに一触即発。双方の刃がぶつかり合うというその時。

——ヒュッ！

空を切り裂く鋭い音が鳴り響いた。直後、ざくりと耳障りな音と共に闇に紅が散った。

「ぐあっ」

リムの眼前にいた男が、がくりと膝をつく。その肩には一本の矢が突き立っていた。

「リム様！」

「リム！」

青年と少女の声が同時にリムを呼んだ。

「遅いぞ、サヴァロアン」

「申し訳ありません」

「遅れてごめん、リム」

サヴァロアンの背後から覗かせたチエチエの顔は疲労の色が濃い。彼女がどれだけ無理な旅をしたのかを悟り、リムは表情を緩めた。

「いや、お前はよくやった。ありがとう、チエチエ」

「私はリム様の下へ行く。チエチエ、お前はそこから動くな。流れ矢に気をつける」

「うん」

ディア・アルカから直接来たのだろう。サヴァロアンはチエチエを馬上に残し、ひらりと馬から飛び降りた。弓を放り、腰から剣を抜き去ると、リムを庇うようにその前に立つ。

これで味方は三人。戦力は十分とはいえないが、二人よりはまだました。

再び剣を構える。まさに一歩踏み出そうとしたその瞬間、また別の声がその場に割り込んだ。

「双方、動くな！」

朗々とした声音。命令しなれたその口調には聞き覚えがある。

リムの、よく知る声だった。

「……父上」

周囲の空気がぴんと張り詰めた。温度さえ下がったような錯覚に陥る。

リムの眼前に進み出たヴェリア侯爵は武装だった。堂々とした出で立ちに、リムの心が引き締まる思いがした。

兵士達が二人を取り囲むように数歩下がる。

「リム——」

隣に立つラージャが気遣わしげにリムを呼んだ。

リムは黙って首を左右に振った。

この状況を打破するためには、囲みを突破するためには、ヴェリア侯爵と戦う以外に道はない。

「ラージャ、サヴィ。悪いが下がっていてくれないか」

「……良いのか？」

父親と刃を交える。鍛錬ではなく、生命をかけた真剣勝負だ。

ラージャの気持ちはわかる。だが、ここまで来た以上、もはや引くことなどできるはずがなかった。

「ああ」

リムの返答にラージャが無言でうなずき、サヴァロアンと共に一歩下がった。それを確かめてから、抜き身のまま提げていた剣を構える。

「覚悟を決めたか。良い目だ。——来い」

ヴェリア侯爵もまた、剣の鞘を払った。

まるで鏡に映したように、同じ構えだった。

こうしていると幼い頃を思い出す。昔からよくこうして稽古をつけてもらったものだ。

あの頃は、どうやっても父に敵わなかった。腕力も剣技も。

けれど。

今の自分はその頃とは違う。身体も大きくなったし、腕も磨いた。きつと勝てる——否、勝たねばならない。

「参ります」

一歩、先に足を踏み出したのはリムだった。

斜め下からなぎ払うように振り上げて、間を置かずに振り下ろす。ぎん、と耳障りな金属音が闇を引き裂いた。

一合、また一合。リムとヴェリア侯爵の剣がぶつかり合い、火花を散らす。

「くっ……！」

ヴェリア侯爵の一撃を寸での所で受け止める。

（重い）

両手で支えるので精一杯だ。

一步下がって刃を受け流すと、切っ先が一瞬頬を掠めた。

「ちいっ！」

熱に似た痛みが走る。肌と共に切断された髪が数筋、暗闇の中に散った。

やはり、強い。

剣を握る手がじつとりと汗ばんでくる。

だが、いかに強かろうと、負けるわけには行かないのだ、何があっても。

そうでなければ全てが無駄になってしまう。橙絲記に遺されたヨルの想いも、リムの決意も意味を失うだろう。それでは何も変わらないし、終わらない。

リムは剣をしっかりと握りなおした。

勝負は一瞬だ。ヴェリア侯爵はリムの剣を受ける際にわずかだが左脇に隙ができる。それをうまくつくことさえできれば――

「はああ——っ！」

渾身の力を込め、剣を振り上げた。ヴェリア侯爵がそれを受けようと刃を閃かせる。

白刃が煌いた。刃が合わさる前に、リムは体を翻した。

直後、双方の動きが止まった。激戦などなかったかのような静寂が、周囲を支配する。

リムの剣の切っ先が、ぴたりとヴェリア侯爵の喉もとに突きつけられていた。

「お前の勝ちだ、リメルテス」

「父上！」

「まだ私を父と呼ぶか、反逆者よ」

ヴェリア侯爵は手に持っていた剣を鞘に収めた。言葉とは裏腹に、声音は穏やかだった。喜ぶような響きさえあるように感じたのは、リムの気のせいだろうか。

「……今でもあなたは俺の父上です。時に厳しく、そして愛情をもつて育ててくれた。立場がどう変わろうと、血の繋がりなどなくと

も、あなたが父であることに変わりはありません」

「リメルテス」

「でも、俺には黙っていることができなかった。ジェスタの哀しみを、一族の過去を知った以上、目をつぶり耳を塞ぐことはできなかった。……アーティノキアに弓引きたかったわけじゃない。俺は――

――

「良い。それ以上の言葉は不要だ」

「……父上」

「進め。振り返らず、前だけを見よ。余計なことは考えず、お前の魂が命じる声に従え。それが、お前にとっての正しき道だ」

がくりとヴェリア侯爵が片膝を付いた。

「父上！」

「案ずるな。剣を取ったのは久方ぶりであつたから、少々疲れただけだ」

リムもまた、父の前に膝を付く。

同じ高さに父の双眸がある。それは深く、自愛に満ちた瞳だった。「22年前のあの日、私はお前を拾い、そして育てた。それが正しいことだと思つたからだ。私は、自分が信じた道を選んだ。お前も、己の信じるもののために生きよ」

「――はい」

リムは一度深く頭を下げると、立ち上がった。立とうとしないヴェリア侯爵の脇をすり抜ける。囲みを抜けて先へ進もうとするリムの背中に、幼い声が飛んだ。

「待つて！ 兄上、待つてください！」

追いつがるように人ごみを掻き分けて、少年の姿がリムの前に躍り出た。

「……レイン」

レインはこわばった表情でリムを見上げていた。

まだ幼さを多分に残した弟の姿に、リムは一度は収めた剣を鞘から引き抜いた。

ぴたりと、切っ先をレインの眼前に突き付ける。

「抜け」

リムの言葉が冷たく響く。レインはびくりと肩を震わせた。

「あ、兄上……？」

怯えと戸惑いの入り混じった声だった。それでも、リムはレインから目をそらすことなく更に一步、前に足を踏み出した。

「剣を抜け、レイニ阿斯」

微動だにしない弟に、リムは更に冷ややかな声音で告げた。

愛する弟に、なぜこれほどまでに非情になれるのだろうと、リムはどこか他人事のように考える。

表情を見れば、レインがリムの言葉に深く傷ついているだろうことは容易に知れた。

それでも。リムは退かない。

ヴェリアの家を出たときから、こうなることはわかっていたのだ。未来を読んだわけではない。そんなことをせずとも、見えることは世の中には多い。

これは必然。レインがヴェリアとして生きていくために、そしてリムがリムとして生きていくために、避けて通れない道なのだ。

「なぜ…… どうしてですか！？ 兄上と戦うなんて、そんなことできるはずがありません！」

「やるんだよ、レイン」

「兄上、僕は——」

「お前の名は？」

レインの言葉を遮り、リムは問うた。雷に打たれたように、レインの身体が動きを止める。

「……レイニ阿斯・シグ・ヴェリア」

答えた声はか細い。けれど、先刻までの感情的なものではなかった。

レインの返答に満足したように、リムはうなずいた。

「ヴェリアはアーティノキアの臣。国に弓引く反逆者を討つのは、

ヴェリアの後継たる者の役目だ」

淡々とリムは告げた。

レインは一瞬はつとしたように顔を上げ、唇をかみ締めた。小さな肩が震えている。

国に弓引く反逆者が誰なのか、ヴェリアの後継が誰なのか。

自分の言葉に含まれる意味が正しく伝わったことを悟り、リムは少しだけ安堵した。

大丈夫だ。レインなら、きっと大丈夫だ。

リムの想いを知ってか知らずか、レインが一度目を伏せる。そして真っ直ぐにリムを見上げた。その瞳に迷いはない。

覚悟を決めた、力強い表情だった。

「それで良い」

リムが剣を構える。レインもまた抜刀した。

「行くぞ」

直後、二本の剣が甲高い音を立てた。

王宮の廊下を三つの影が密やかに走っていく。

深夜だからだろうか、廊下には人気がない。あれだけの騒ぎを起こしたにもかかわらず、止められることも咎められることもなかった。

「……良かったのか？」

問うたのはラージャだ。その意味に気づき、リムは小さく笑った。「いいんだ。あいつには、あれが必要だった。いつまでも俺に頼っていちゃいけない」

齒を食いしばって立ち上がろうとする弟の姿がリムの脳裏に甦る。勝負自体はあっさりと決まった。まだ11になったばかりの少年だ、無理もない。

だが、リムは一切の手加減をしなかった。真剣勝負の、それは礼儀だ。レインもわかっていたのだろう。どれほど手酷く打ち返されようと、果敢に立ち向かってきた。剣を取り落とし膝を地に着くまで、幾度も。

良い目をしていた。

「その気持ちはわからんでもないが——」

ちらりとリムを見やるラージャの表情は複雑だった。リムが「ヴェリア」という名を脱ぎ捨てようとしている。それを知ったからだろう。

「間違いだったとは思っていない。後悔もしない」

きっぱりと答える。

自分達兄弟にとって、それは必要なことだったとリムは思っている。

レインから話を聞いたら、妹は泣くだろう。心残りといえばそれだけだった。

「レインはいずれ必ず強くなる。ヴェリア侯爵の正当な血を受け継

いだ、俺の弟だ。だからこそ、いつまでも兄の背中なんぞ追って
ちやいけない」

「あの子は、お前を失いたくはなかったはずだぞ」

「知っている」

リムは笑みを浮かべた。思い出すのは、いつでも自分について歩
いていた幼い弟の姿だ。

——兄上、兄上！

自分と呼ぶ少年の明るい声が耳に届く。
だが。

「兄の影ばかり見ていては、囚われてしまう。俺はね、ラージャ。
あの子が一人の騎士として成長する妨げにはなりたくないんだよ」
レインが一人で立つのは遠い将来のことではない。家族に頼るの
が悪いとは言わないが、騎士としての道を行く以上、過ぎた甘えは
彼を滅ぼしかねない。

特に、今のリムは反逆者という汚名を背負っている。その兄に心
を残しているようでは、誰もレインをヴェリアの後継とは認めない
だろう。

「わかった。お前がそう言うなら、俺ももう何も言わん。だが——」
「うん？」

「今度は、俺に黙っていなくなるなよ」

ラージャの声は真摯で、リムは思わず微笑を浮かべた。

「ああ。……友、だからな。それに、また締め上げられるのも御免
だ」

リムがそう言うと、ラージャもまた小さく笑った。

「それに、あの子にも叱られるだろうな」

ラージャの言葉に、チェチェの怒った顔が思い浮かぶ。

宿屋に戻れと言い置いてきたのだが、無事に城門は越えられただ
ろうか。

——絶対に、みんな揃って迎えに来てよね！

そういつてリムたちを見送る少女は、泣きそうな顔をしていた。

「あいつ、怒ると怖いんだよ」
誰一人欠けることなく戻ることが果たしてできるのだろうか。
それは全員に共通の思いだったかもしれない。
不安のようなものを軽口で紛らせ、三人は回廊を走る。

*

深夜にも拘らず、玉座の間には人の姿があった。
人影は三つ。一番手前——リムの前に立ちはだかったのは、一人の女性だった。

予想通りの展開に、思わず苦笑がこぼれる。
心を通わせた恋人と対峙する。そのことに動揺するかと思っていたが、自分でも驚くほど心は静まり返っていた。

もちろん、それは思いが消え去ったという意味ではない。今でも、彼女の姿を目にすれば胸には暖かな思いがあふれる。

立場が違っても変わらない思いなど存在するのだろうか。敵同士となっても、情愛は消えずにいるのだろうか。

答えは是であり、否であろう。思い自体は失われずとも、敵として向かい合った瞬間に互いを結ぶ糸は絶たれる。

自分から手を離しておいて、それを再び繋ぎなおしたいと思うのは身勝手というものだろう。

リムは微笑んだ。全ての思いをその下に仕舞いこんで。

「やはり最後の砦はあなたでしたね、イルー」

「間違いであって欲しいと願ったわ、リム」

アイラスの表情は翳っていた。そうさせているのが自分だと理解はしている。理解はしていても、胸は痛んだ。

「イルー、申し訳ありませんが下がっていただけませんか。あなたと戦うつもりはありません」

リムはアイラスから視線を外した。それはリムの感情がそうさせたわけではない。

彼女の肩越しに玉座を見やる。正確には、その隣に立つ人物を。

「俺が、用があるのはその男なので」

王女の背後にいるのは女王セリスタと、純白のローブに身を包んだ男だった。

リムの視線が男に固定される。

淡い金色の髪、氷の双眸。

やはり、という思いが胸を占めた。忘れるはずもない。イーロスの片隅でひっそりと暮らしていたかに見えた、あの占い師だった。

女王の庇護を受けているせいなのか、それとも己の思惑が実を結ばうとしているからだろうか。1年ぶりにみるその姿は、堂々としていて、不遜でさえあった。

「リム、何をするつもりなの？」

「ご心配なく、イルー。陛下の御前でいきなり抜刀したりしませんから。もつとも——」

言ってニヤリと口元を歪めた。視線の先にいる男に見せ付けるように。

「その男の態度如何によつては、その限りではありませんが」

威嚇とも取れる態度のリムを、しかし男はゆるりと受け流すように艶然と笑みを浮かべた。

「ずいぶんと遅いご到着でしたね。待ちくたびてしまいました」

「……お前が『ハルラ』か？」

「『ハルラ』は古代ジェスタ語で『罰』を意味する言葉。私の書簡は、お読みいただけたようですね」

「罰だと？」

占い師は口元に這わせた笑みを崩さない。どこか狂信的にさえ見えるその表情に、リムは寒気を覚えた。

「我が名はファルエスト。ジェスタの、レス一族に連なる者です」

「『一族に連なる者』……直系つてことか？」

皮肉げに問うたリムに、しかしファルエストは表情を変えることもなくゆつたりと首を左右に振る。

「残念ながら、私自身は直系にはあたりません。ハツシエ位にあつたのは私の伯母です」

「……伯母？」

「左様。先々代ハツシエであるサーアルクは私の伯母であり、あなたのお祖母様です」

「な……っ！」

思わず絶句する。自分とこの男が縁続きであつたことに愕然とした。

そのリムの様子をおもしろがるように、男はさらに言葉を重ねる。
「そして先代ハツシエはあなたのお母上。あなたこそが、一族直系の血を引く正当な後継者にあたります。リメルテス・ユニ・ヴェリア——否、リメルテス・レスフィオーラ」

その名を呼ばれた瞬間、リムの身体に衝撃が走った。レスフィオーラ。自分はその名を知っている——

やはりと納得したと言えは良いのか、それとも、真実を知らされて落胆したと言ふべきだろうか。相反する思いが心中を渦巻き、それを表現する適切な言葉が見つからない。

かつて夢で見た両親の姿を、そして母の最期を思い出す。あれが正しい過去だったのだと、男の言葉が証明したことになる。

リムは鋭い視線で男を睨んだ。

「知っている。あの晩、アーティノキアに襲撃されてゼファー本体は落ちた。燃え盛る炎の最中、母はサヴァロアンに俺を託して邸から逃がしたんだ。俺が継嗣で、橙絲記に予言された者だから」

「記憶がある、というわけではなさそうだ。覗かれましたか——過去を」

「ああ」

ならば話は早い。そう言つて男は不気味に笑う。

「『橙絲記』に記された呪いに従い、己がなすべきことをなさい」

「……俺がなすべきこと、だと？」

リムは口元をゆがめる。

橙絲記に記された呪い、それはすなわちジェスタの目覚めである。おぼろげながら、男の狙いが分かった気がした。

「あなたには、そうする責任があるのですよ、ハツシエ」

「その名で俺を呼ばないでもらおうか、ジェスタの占呪師」

「なぜ？ 先代が亡くなつた今、レスの名を継ぐのはあなた一人」

「……本当に、そう思うか？」

問うた声は静かだった。同様に、リムの心はひどく落ち着いていた。

ファルエストが不審そうに眉を上げる。

「何が言いたいのです？」

「この際だ、はっきり言わせてもらう。俺はハツシエではないし、なるつもりもない」

「あなた以外に誰がいるというのです！？ 私では駄目だ、橙絲記に望まれたあなたでなければ為し得ない……！」

ファルエストから余裕の表情が消えた。食い入るようにリムを睨みつける。視線だけで人を斬ることができるなら、リムはきっと真っ二つにされていただろう。

それほど強い視線だった。

だが、リムはそれを真正面から受け止める。

「為し得る？ 俺が何をするというんだ。お前は俺に何をさせたい？」

「ジェスタですよ。ジェスタを——あの美しい地を我らの手に取り戻す、それ以外に私が望むものなどない！」

美しい顔が歪むのも構わずファルエストは声を荒げた。

「取り戻して、どうする気だ」

「今まで我らに苦渋を強いてきた者たちに、報いを」

「アーティノキアか？ アーティノキアを滅ぼそうとでも言うのか、ジェスタがそうされたように？ 多くの血を流し、数多の命を奪うつもりだと、そう言うんだな」

リムの心にやるせない思いが満ちる。

ファルエストの、ジェスタを取り戻したいという気持ちはわからなくもない。リム自身の血もジェスタに由来するものだ。無為に同族の血が流され生命が奪われたことに対する怒りは当然のものとしてリムの心にもあった。

だが、だからといって安易に復讐などという道を選ぶのは愚かなことだ。ファルエストやリム、サヴァロアンのような「遺された者たち」を新たに生み出す行為でしかない。

「ジェスタは我らのものです。その主権を欲することが悪だと？」

「悪だとは言いきれないな」

「ならば——」

「意味なんて無いんだよ」

「……何を——」

気色ばむファルエストを遮るように、リムは言葉を紡いだ。ファルエストの思惑を徹底的に否定する、その言葉を。

「ジェスタは、もはやこの世界の何処にもない。もしジェスタという国が存在するとしたら、それは歴史の中だけだ」

ファルエストの目が見開かれる。憎悪にも似た感情が、青い瞳を暗く染め上げていくのが見えた気がした。

「何を言い出すかと思えば……」

ファルエストが可笑しそうに笑みを浮かべる。一種の狂気さえ感じさせるその様子を、リムはただまっすぐに見ていた。

「真実から目をそらすか？」

「何が真実だというのはです。我らはここに居る。レス一族の血は、まだ失われてはいないというのに——」

レス一族の血。それがどれほどの意味を持つのか、リムには理解できなかった。

静かな瞳で、リムはファルエストに対峙する。

「過去を美化するな。歴史を否定するな。ジェスタはアーティノキアに滅ぼされた。もう世界のどこにも存在しない。その事実を受け入れるべきなんだ。あんたもヨルも。——俺も」

「あなたは……自身の祖国を滅ぼすおつもりか」

呆然と呟くファルエストに、今度はリムが声を荒げた。胸の内にわだかまったものを吐き出すように叩きつける。

「祖国だと？ 俺の祖国はここ——アーティノキアだ！」

言い切って、それが自分にとって正しいことなのだとリムは確信をした。

なぜ、二国の間で揺らいだのか。

ジェスタの過去を知り、ジェスタのために生きる道は確かに存在した。リムがその気になればおそらく、ジェスタを目覚めさせることはできるだろう。そう、橙絲記に記された呪い通りに。

だが、リムにはどうしてもその道を選び取ることができなかった。その理由は、ここにあったのだ。

リムの原風景は全て、アーティノキアと共に在る。それは絶対的に動かしようのない事実なのだ。

もはや戻ることは叶わないかもしれない。だが、それでも「祖国」

は「ここ」だと言い切れる自信が、今のリムにはあった。

「なんということを。レスの血を絶やそうとは……正気ですか？」

「そちらこそ、寝ぼけたことを言わないでもらいたい。いい機会だ、ヨルにも聞いてもらおうか」

前半は眼前に立つ占い師に、後半は内なる声に対してリムは言った。

——聞こう、リム。

声なき声が脳裏に響く。ヨルがリムの意思を正面から受け止めようとしてくれることが、リムには嬉しかった。

「何をして祖国と呼ぶ？ ジェスタが俺に何をした。責めるつもりはないが、重荷を背負わせただけだろう」

「……重荷と呼びますか、ジェスタの血を——己が宿命を」

苦々しくファルエストが眉根を寄せる。リムは視線を緩めることなく、ファルエストを見据えた。

「ずっと迷っていた。俺は一度アーティノキアを捨てた。そのことは後悔していない。ジェスタの過去に触れれば触れるだけ情も湧いた。だが、こうも思うようになった。やはりそこにあるのは記憶だけなのだ」

「どういう意味です？」

「あの場所はすでに『ジェスタ』ではない」

「っ！？」

はっとファルエストが息を飲む。

ファルエストとて、それに気付いていなかったわけではないのだろ。だが人には、わかっていても譲れないものがある。ファルエストにとってのジェスタがそれだったというだけだ。そのことを否定するつもりはリムにはない。

「決して短くない時間をアーティノキアとして過ごしたあの地は、もはや『アーティノキア』なんだ」

「……しかし！」

「俺も同じだ。俺の内に流れる血は確かにジェスタのものだ。母か

ら受け継いだ夢見の力がそれを証明している。だが、今の俺を育んだのはアーティノキアの大地であり水だ。この地に生きる人たちなんだ。アーティノキアに戻ってみて、俺はそれを漸く納得できた」

——それが、君の決断なんだね。

内なる声が問う。リムは短く、しかしきつぱりと頷いた。

「ああ」

——ならば受け入れよう。

「……認めない、私は認めない！ ジェスタは我らのものです。我らの手に戻されるべきなのです！ あなたには力がある。それはジェスタのために使われるべきものです。それなのに、なぜあなたはアーティノキアに与するのです……？」

ファルエストの言葉に、リムは自嘲気味な笑みを口元に這わせた。力。時を読む力、未来を変えることさえ可能な呪いの力。それがどれほど重要なものなのだろうか。

身のうちに宿るその大きさから、リムは目を反らすつもりはなかった。ただ、使いこなしたいとも思えなかった。

「能力——あるだろうな。その気になれば、俺とあんたでジェスタをアーティノキアからもぎ取ることも不可能ではないかもしれない」
「ではなぜ、そうしないのです！ あなたの力はジェスタのものなのですよ」

「それをして、俺にどんな利があるというんだ」

「……何を——」

「戦乱を起こせば国は荒れる。国が荒れれば傷つくのは民だ。ジェスタジェスタとお前は言うが、今あの地に住まうのはアーティノキアの民だぞ」

「ですが——」

リムは尽くファルエストの反論を許さない。

「極端な話、あの地に住む者にとって、あそこがアーティノキアであろうがジェスタであろうがどうでもいいことだ。彼らにとって重要なのは、平穏な暮らしが守られるか否かだ。アーティノキアが守

つてくれるなら、彼らにとってはアーティノキアが『善』だろうし、ジェスタがあのだを戦火に晒すのであればジェスタが『悪』になる」国を荒らして得られるものなど、失うものに比すれば遥かに少ない。

そのたつた少しのもののために、無関係の者達に苦難を強いることなど、リムにはできなかった。

「あなたが言っていることはおそらく正論でしょう。ですが、綺麗事だ。アーティノキアが、全ての民に対して『善』であると言い切れますか？」

そう問うたファルエストの声はひどく落ち着いていた。直前までの感情的な態度は一瞬で鳴りを顰め、今はただ彼の固い声だけが夜の静寂を引き裂くように響き渡る。

誰も答えない。答えることができない。

「陛下？」

ファルエストの視線がリムから、背後に立つ女王へと向けられる。問いを向けられたセリスタはわずかに逡巡し、首を左右に振った。

「努力は、しているつもりだけれど」

「努力。つもり。それが如何程の結果ももたしていないことを、あなたはご存知ではないのでしょうか」

ファルエストの目が、その場にいる全員を順々に見据えた。何かを思い出しているのか、その瞳には哀しい冷たさが宿っている。

「アーティノキアが過去に奪った命がどれだけ在ったか。それを知らないというのなら、傲慢も甚だしい」

ファルエストの視線が厳しさを増した。気圧されるようにリムが息を飲む。

「虐げられた経験がないからこそ言える綺麗事なんですよ。あなた方の生が、命が、どれほどの犠牲の上に成り立っているのかを考えたことがありますか？ 這いつくばり、地を舐めるような貧困を味わったことがありますか？ 日に、椀一杯の水すら口にできない苦しみを理解できますか？」

「それは……」

記憶がよみがえったのか、ファルエストの顔がゆがんだ。感情的に震える声が痛々しい。

リムには返す言葉がなかった。経験したことのないリムにとっては、想像することさえ難しい。

「民を傷つけたくない？ 可笑しなことを仰るものだ」

リムをあざ笑うかのように、ファルエストは吐き捨てた。声はなお冷やかさを増し、厳しい言葉がリムに突き刺さる。

「ハツシエの子として生まれ、占呪師としての力を持ち、アーティノキアに拾われてからは貴族の子息として不自由なく育ってきたあなたが、それを言うのですか。この国の格差を、あなたはその目で見たはずです。その格差を生んでいるのは、誰です？」

「……………」

「現在、民を虐げているのは間違いなくこの国の支配階級なんですよ。搾取するばかりで何も還さない」

「っ！？」

「民を苦しめているのは、他ならぬあなたたちなのに。正義を振りかざして、英雄でも気取るつもりですか？ アーティノキアを守るのは自分達だと？」

リムはただ真っ直ぐにファルエストを見据えている。

彼の言は正しいのだろう。リムの脳裏に、貧しい民の姿が甦ってくる。

「あんたは、アーティノキアに復讐するつもりなのか？ 自分を救ってくれなかったアーティノキアに報いを与えようって？ その手段として、橙絲記を持ち出したってことか？」

「たしかに、逃げ込んだ我々を受け入れなかったアーティノキアにも思うところがありますが、私の目的は飽く迄もジェスタです。私には力がある。橙絲記の呪いは、私の願いを叶えるのにちょうどよかった。母との約束を守る為にも」

「約束？」

「先ほどお話したでしょう。先々代のハツシエは私の伯母だったと。伯母は亡くなる際、私の父を後継者にと指名していました」

おかしい話だ。ハツシエには後継者を指名する権利がある。それを行使したのならば、先代ハツシエはファルエストの父になるはずだ。そして、ファルエストがレス直系となる。

緋色の双眸を持たないファルエストがハツシエとして認められることはおそらくないだろうが、それでも直系と傍系では大きく立場が異なってくる。

「なぜあんたの父親はハツシエにならなかったんだ？」

「ならなかったのではありませんよ。なれなかったのです」

「どういうことだ？」

「ゼファアはサーアルクの遺言を棄却し、あなたのお母上——ソライユーン・レスフィオーラをハツシエにと指名しました」

「……それは」

「もちろん、能力的にソライユーンの方が上だったことが決定の理由でしょう。けれど、ゼファアの決議にはもう一つ、明確な判断材料がありました」

「もう一つの判断材料？ 能力以外に考慮されるものがあるのか」
リムが驚きに目を見張った。何度か見た夢の中で、ゼファアに関して知りえた情報もわずかだが、ある。

最高権力者であるハツシエの決議は絶対のはずだ。それなのに、なぜ。

リムの疑問に答えるように、ファルエストが自嘲の笑みを口元に刻んだ。

「この容姿を見て、お分かりになりませんか」

「容姿……？」

金色の髪に、氷のような蒼い瞳。——明らかに異国の容貌だ。

「母は西国の生まれでした。ジェスタは血統を重んじる国。直系に異国の血が混じることを良しとしなかったでしょう。サーアルクが他界した時、既に父は母との間に私をもうけておりましたので」

西方の生まれでは当然占呪師としての力を持っていない。

生まれてくる子供は混血。ハツシエの絶対条件ともいえる緋色の双眸を持たない可能性が高まる。それをゼファーは嫌った。そういうことなのだろう。

そして実際に、ファルエストの容姿はゼファーの危惧を現実のものとしてしまった。

ゼファーは焦ったろう。このまま先代の遺言に従えば、緋色の双眸を受け継ぐものが居なくなるのではないかと。

そして、後継者として矢面に立たされたのがリムの実母というわけだ。

「それで、ゼファーは俺の母親にハツシエを継がせた後、あんた達をどうしたんだ」

火種は生まれた。

ハツシエになるのだと思っていたファルエストの父にしてみれば裏切りもはなはだしい。先代・サーアルクの遺言を盾に、ハツシエ位を要求することもできたはずだ。

もちろん、彼にはそれなりの能力がある。力で奪い取ることも不可能ではなかっただろう。そんな争いの元を、ゼファーが何もせず放置するとは思えない。

「もちろん、ゼファーは迅速に対応しましたよ」

「というところ？」

リムの問いにファルエストは口元をゆがめた。

「全てを、なかったことに」

「どういう意味だ」

「ですから、なかったことにしたのですよ。我々はジェスタに生まれなかった。父は緋色の双眸など持つてはいなかった。サーアルクは遺言を残さなかった」

つまり――

「全ての痕跡を消した……」

リムの返答に、満足したようにファルエストはうなずいた。浮か

べた笑みは周囲を凍りつかせるほど冷たい。

「消そうとした、といったほうが正しいでしょう。ゼファアの思惑を知った父は自分を囷に、母と私を国外へと逃がしてくれましたから」

「それで、あんたの父親は――」

「亡くなりました。私は母の恨み言を聞いて育ちました。あの国は元はいえばあの人のものだった。貴方の物になるはずだった。それを、ゼファアが奪ったのよ、と」

それはそうだろう。ファルエストの母親にしてみれば、全ての幸福を奪った仇といっても過言ではない。

「私は、母の遺言を守らねばならない」

「遺言だと？」

「ええ」

ファルエストは一度言葉を切る。

周囲を見渡すようにゆっくりと視線をめぐらし、静かに目を伏せた。過去に思いを馳せるようなその仕草には、何の感情も見出せなかった。

「母は私にこういい残しました。――『ジェスタを取り返して』」
「なんだって!？」

リムの声が深夜の謁見の間を震わせた。

母親との約束。

それがファルエストが事を起こした真なる理由なのだと、そこにいる誰もが理解した瞬間だった。

「ジェスタを取り戻す為には、わたしでは絶対的に能力が足りません」

「だから、俺がアーティノキアを裏切るように仕向けた、と？」

リムの声は硬い。それを正面から受け、ファルエストがうなずいた。

「その通りです」

「俺にジェスタを目覚めさせ、頃合を見計らって俺から奪い取ろうと？」

「ゼファアが我らにしたことをそのままお返ししようと思ったまで、そのために女王に取り入り、王宮での立場を確立した。

そこまでは良かった。だが、リムがアーティノキアに味方することは予想外だったに違いない。それが焦りを生んでいる。

ファルエストを阻むつもりならば、隙はそこ以外に見つからなかった。

リムは更に畳み掛ける。ファルエストを落とす罠を慎重に仕掛けながら。

「ならば、あんたはどうすると言うんだ。ジェスタを取り戻し、国を再興したとして、全ての民にとっての善政を敷くことができるんでもいうつもりか？」

「少なくとも、いまのアーティノキアよりはまともな政ができるでしょうね」

「いや、あんたには無理だね」

リムはにやりと笑んだ。挑発するように、殊更大仰に。

乗って来い。内心でそう誘いをかけた。ファルエストが逆上する

瞬間を、リムはじっと待つ。

ファルエストは眉を顰めた。

「……なんですって？」

「あんたが事を起こしたいと願っているその一番の理由が、自分が苦しんできたからという至極個人的なものだからだよ。自分の感情が最優先の人間に、善政が行えるとは思えない」

「わかったようなことを――っ！　あなたがどうしても是と言わぬのであれば、力ずくでも！」

ファルエストの顔色が変わった。ローブの懷に手を押し込む。引き抜かれたのは細身のナイフだった。

リムはあくまで冷静な態度を崩さない。まだだ。まだ、早い。

「俺と戦おうって？　あんたの腕じゃ、相手にもならないね」

「やってみなければわかりませんよ」

「どうしても、と言うなら受けて立つが？」

「ええ、どうしてもです。受けていただきますよう！」

言うが早いか、ファルエストはローブを剥ぎ取るとリムの眼前に放った。その隙に間合いを詰めるが、当然リムはその動きを読んでいる。

「甘い」

抜刀しないまま鞘でその刃を受け止め、リムは力任せにそのまま押し返した。

「くっ……！」

体格自体はほぼ互角。しかし腕力の差は歴然だった。ファルエストは勢いに気圧されるように数歩後ずさる。

ファルエストが懷から小瓶を取り出した。透明な液体で満たされたそれを、力任せに石の床に叩きつける。刹那、周囲が白く霧に包まれた。

「何だっ！？」

「このままでは私に勝機はない。動きを封じさせていただきます」
花の蜜にも似た濃密な甘い香りがリムを取り巻く。

中枢神経に作用し、麻痺を起させる類の薬なのだろう。指先に軽い痺れを感じた。

——リム！

内なる声がリムを呼ぶ。瞬間、何かはじけるような澄んだ高音が耳元で鳴り響いた。

耳朵が熱い。

白い霧は瞬時に消え去り、微かに残り香が漂うばかりだ。

「紅玉……？　しかも結界を為すことでこちらの術を中和するとは、ただの石ではなさそうですね。なぜ、あなたがそのようなものを――」

ファルエストの顔が驚愕に歪んだ。そしてリムはその言葉で先ほどの音の正体を悟る。

耳飾にそつと手を触れると、鎖に付けられていたはずの紅玉が消えうせていた。

ヨルの兄——アスティローダの耳飾が、リムを守ってくれたのだろう。

「双方、動くな」

この一瞬の隙を突くかのように、二人の間に鋭い女性の声が割り込んだ。ファルエストとリムが動きを止める。

「陛下の御前で許可なく抜刀するのは、反逆と見做します」

「イルー！」

「アイラス殿下」

王女の剣が、二人を裂くように差し込まれていた。彼女の切っ先が狙うのは、ファルエストの喉元だ。

アイラスの剣は確実に急所に突きつけられている。ファルエストが少しでも動けば彼女の刃は容赦なく彼を引き裂くだろう。それがわからないはずはないだろうに、ファルエストはナイフを収めようとしなかった。

ファルエストは死ぬ気なのだろうか。鋭い視線がアイラスを射抜き、切りかかる契機を伺っている。

先に動いたのは占い師だった。

「アイラス殿下、お覚悟を」

「させないわ」

声はほぼ同時。アイラスが頸動脈を突こうと一瞬剣を引く。

駄目だ。ここで彼女にファルエストを斬らせるわけにはいかない。

リムは手に持った剣を閃かせた。占い師を斬ろうとしたアイラスの剣を弾くようにして、双方の間に身体を割り込ませる。

「リム！？」

動揺に満ちた声が上った、その直後。

——ざくり。

耳障りな音が響いた。

アイラスの剣は勢いを殺しきれずにリムの右腕を貫いていた。熱さにも似た激痛が脳天まで突き抜ける。

「くっ……はっ……」

唇をかみ締めてその衝撃をやり過ごす。腕を引くようにして腕から切っ先を抜くと、闇に朱が舞った。

その隙を狙ったかのように、ファルエストがナイフを突き出した。ファルエストの得物がリムに向かう。その切っ先が狙ったのはリムの右目——紫色の瞳。滅びの色を消すことでジェスタの目覚めを凶ったのかもしれない。

「ちい！」

リムは咄嗟に身体をひねって避けようとするものの、右腕の痛みを気をとられて動きが一瞬遅れた。

——ヒュッ！

空を切り裂くような鋭い音とともに刃がリムの顔を掠めた。

ぱつと鮮血が散る。

「リム！！」

「リム様！？」

様々な声がリムを呼ぶ。

リムは視線をファルエストに固定したまま、首を左右に振った。斬られたのは額だけのようだ。目は見える。

流れ出た鮮血が瞼を伝い、右目にかかる。紫色の瞳が、血に濡れて深い緋色に染まった。

リムはそれを荒っぽく袖で拭くと、再度ファルエストに対峙した。「さあ、どうする？」

リムの声は静かだった。鞘に収まったままの剣を無造作に手に握り、ファルエストに問う。

このままファルエストを斬るのは簡単だ。だが、それで終わりになるとは思えない。それではこの男にとって救いがなさすぎる。

ファルエストとリムの視線が鋭く交錯する。

ややあつて、ファルエストは黙って瞼を伏せた。手からナイフが滑り落ちた。

刃先が石の床にあたる音が広間中に反響する。金属であるはずなのに、まるでガラスが散った時のような澄んだ音だった。

「——これ以上、私に何ができると？」

「……………」

「あなたがジエスタを必要としない以上、橙絲記の呪いは成就しない。ジエスタは目覚めず、このまま滅び行く」

「否定はしない」

「ならば、私もこのままジエスタと共に滅び行くのみ。遠い約束を背負ったまま——」

ファルエストは懷に手を差し込んだ。液体で満たされた小瓶を取り出す。先ほどと同じ形の小瓶だが、中身の色が違う。

玉座を照らす蠟燭の火明かりが、はっきりとその色彩を照らし出した。

それは、とても昏い——紫色だった。

「くっ！ ファルエスト、待て！！」

ファルエストが何をしようとしているかを察したリムがその小瓶を叩き落そうと動くが、遅かった。

リムの手が届くより先に、ファルエストが小瓶の中身を呷った。

「ぐうつ……」

喉がひしゃげるような不快なうめき声を上げ、ファルエストが倒れる。

「ファルエスト!!」

げぼ、と湿った咳と共に、ファルエストの口元から鮮血があふれた。倒れ行く身体を抱きとめたリムの腕に、生ぬるい感触が伝う。

服毒――

「馬鹿なことを……!」

びくりと、ファルエストの身体が跳ねた。

毒物のまわりが早い。解毒どころか吐かせることさえ叶わず、リムはただ両腕にかかる重みを支えることしかできなかった。

「もうしわけ……ありま、せん。――母上」

擦れた声が血と共にこぼれる。これが、最期の言葉だった。

瞼が下り、氷の色をした瞳を覆い隠す。完全に閉ざされると同時に透明な雫が二筋、ゆっくりと白い頬を滑り落ちていった。

終章 空は青く

よく晴れた朝だった。

眼下に広がるのは城壁のある大きな都市——イーロス。

リムは小高い丘に立ってそれを眺める。

鮮やかな朝の陽光に照らされ、街は生き生きとして見えた。

けれど街の喧騒もここまでは届かず、聞こえるのは吹き過ぎる風が揺らす葉擦れの音ばかりだ。

「よろしいのですか？」

控えめな問いが背後から投げかけられる。

リムは振り返らずに頷いた。口元には穏やかな笑みが浮かんでいる。

「良い。それとも、お前はあの街に未練があるか、サヴィ？」

「私はどこまでもリム様にお供するだけです」

予想通りの答えが返ってきて、リムの表情が苦笑へと変わった。

この男はいつでもそうだ。無条件でリムに従い、見返りを求めることもない。

リムを守るという母との約束も、20年も経てば時効だろうに。

「俺についてきても良いことなんて何もないと思うけどな」

そんなことはありませんよ。静かな返答を背中で受けつつ、リムは天を仰いだ。

「ヨル」

リムが覚醒するまではひっそりと、そしてリムが覚醒してからはずっと寄り添うように傍にいた存在に声をかける。

清かな風と共に、返答があった。

——何だい？

「すまない」

リムの決断は、ヨルの呪いを無にし、結果としてアスティローダの予言通りジエスタを滅ぼすこととなった。皮肉なことに、歴史の

闇に消えようとしていたジェスタという国の存在は、今回の騒動を契機にアーティノキアの記録として記されることとなったわけである。

このことをヨルはどう思っているのかが気にかかる。彼の血を受け継ぐ者として——ジェスタ最後の直系として。

確固たる信念を以て下した結論であれば、謝罪など口にすべきではない。だが、それでも言わずにはいられなかった。

ヨルの声は静かに優しく、リムに届く。感傷も悲哀もない、穏やかな声音だった。

——何故謝る？ ジェスタは歴史の一部として残された。それで十分だ。

「そうか……」

晩秋には似つかわしくないほど暖かな風がリムの頬を優しく撫でる。それは吐息のようでも、微笑のようでもあった。

——ありがとう。君が橙絲紀に選ばれた「暁をもたらす者」であったことに感謝する。

リムの隣を、一陣の風が吹き抜けた。その瞬間、するりと何かが身体の内から抜け出る感覚があった。

そして気づく。風と共に、リムの内側からヨルの気配が消えたことに。

「ヨル？」

再び呼びかける。

返答はない。

「——もう、居ないんだな」

零すように呟いた。

橙絲記は相変わらずリムの元に存在している。王立図書館に戻そうかと思っただがそれはザイファに固辞されてしまった。

——それはあなたがお持ちになるべきです。ジェスタの歴史を、このような埃っぽい書庫に埋もれさせてはなりません。

諭されて、納得した。

確かに、これはリムが持っていたほうが良いのかもしれない。ジエスタを忘れぬ為にも、ヨルの願いを——ファルエストの想いを消さぬ為にも。

どちらも成就しなかったものたちだ。このまま時間の波に流され、いずれは風化していく。

一族最後の者としてできるのは、この記録を遺していくことだけだ。それがリムに課せられた責任なのだろう。

リムは荷物の中から橙絲記を取り出し、ページをめくった。預言書としての役割を終え、歴史書となったその本をゆっくりと眺めた。読むことはできないものの、アステイローダの予言は相変わらずそこにある。たどるように最後までページをめくり、リムはわずかに目を見開いた。

あるはずの一節が、そこにはなかった。

何も、書かれていなかった。もとより白紙であつたかのように、インクの痕跡さえ残さず、綺麗に消え去っている。

ヨルと共に呪いが消えたのか、それとも逆か。詳しいことはわからない。わかったのは、もう二度とヨルの声が聞こえないという事実のみ。

居ることが当たり前になっていたから、少しだけ淋しい気持ちはある。だがきつと、これで良かったのだろう。

ヨルの呪いは役目を終えた。これ以上、呪いによって橙絲紀に縛られ続ける意味も必要もない。

「さて、行こうか」

どこへ、とリムは言わない。サヴァロアンも尋ねることはしない。リムは手に持ったままだった橙絲記を閉じると、荷物の中に丁寧に仕舞いこんだ。

見納めとばかりにイーロスを眺めてきびすを返そうとしたその時

「で？ アーティノキアを出て、お前は何処へ行こうって言うんだ？」

飄々とした声が投げかけられる。リムは弾かれたように振り返った。

「よお」

相変わらずの明るい声だ。

佇む友の姿に、リムはばつが悪そうな表情を浮かべた。

「ラージャ」

できることなら彼には知られたくなかった。

完全な反逆者に落ちたリムと異なり、ラージャには帰る場所がある。これ以上巻き込むわけにはいかない。

「俺に黙ってどこかへ行かないと、あの晩言っていなかったか？」

そういわれてしまえば、リムには返す言葉がない。いずれ書簡を出すつもりだったと言ってもラージャは納得しないだろう。

「行くあてなどないんだ」

「だから黙って出て行こうって？」

「ああ」

——がつん。

こくりとリムが頷いた瞬間を狙ったかのように、鈍い音がした。脳天に強い衝撃が走る。

「馬鹿か、お前」

ラージャの怒りに満ちた声にリムは顔をあげた。

「ラージャ……」

「俺も共に行く。あれだけの騒ぎを起こしておいて、俺だけリッケルの家に戻るわけには行かないだろうが」

ラージャの言は尤もだ。その責任はリムにある。

リムは素直に頭を下げた。

「すまん」

「まあ、何だ。俺は自分の意志でお前と共に行くだけで、戻れないわけじゃないから気にするな」

ラージャは意地悪そうに口元に笑みを這わせた。

「……………は？」

「お咎めはなしだ。俺も、もちろんお前もな。陛下からのお達しだ。いつでも戻って来いとの伝言も預かっている」

「しかし……」

「アーティノキアはこれからが大変だ。陛下もアイラス殿下も、国のあるべき姿に気付かれた。変えるのは簡単ではないが、よい方向に進むのではないかと俺は思っている」

確かにラージャの言うとおりだ。セリスタもアイラスも、彼ら二人の助力を望んでいるのだろう。だからこそ、不問という判断になったはずだ。それは理解できる。

だが、あれだけのことを起こしておいて、何事もなかったかのように戻ることも、今のリムにはできなかった。

「俺は反逆者だぞ？　その上、王宮を血で汚して、戻れるわけがないだろうが」

「そうだろうな。ま、戻るにしてもほとぼりが冷めてからだろう。」

それまでは気ままに冒険者を気取るのも悪くない」

「冒険者、か」

不意に、ラージャが表情を改めた。茶化すような雰囲気は鳴りを顰め、どこことなく神妙な顔つきでリムを真っ直ぐに見る。

「……瞳の色、揃ったんだな」

「瞳の色？」

「ああ。綺麗な緋色だ」

右目は緋色。左目は紫色。生まれたときから、それはリムが持っている色彩だったはずだ。

けれど、今のリムの瞳はどちらも鮮やかな緋色をしているとラージャは言う。

緋色の双眸——いつか夢で見た、母親と同じ色彩。

なるほど、とリムは唐突に理解した。

ヨルの存在は呪いと共に消えた。おそらくその時に、リムから滅びの色をも消し去ってくれたのだろう。

それを肯定するかのように、穏やかな風が吹く。

「橙絲記殿は去ったのか」

「ああ——かえったよ」

「かえったって、どこに？」

「——風に」

さやさやと風が渡る。このどこかにヨルがいて、リムたちを見ているのかもしれない。そんな気がした。

「あの娘はどうした？」

ふと、ラージャが周囲を見回して首を傾げた。

チエチエのことだろう。

「あの子はディア・アルカに戻ったよ」

「へえ。てつきり一緒についてくるもんだと踏んでいたんだがな」
「俺もそう思っていた。たが当の本人が帰ると言うからな」

——リムにも帰る場所が必要でしょ？ 私がそれになつてあげる。

にこりと笑つて、チエチエはそう言った。大丈夫、生き方は二人に教わったから、もう以前の生活には戻らない、と。

「まあ、あの娘なら何とかするだろう」

「ああ、強い娘だからな」

あてのない旅だが、いつかディア・アルカに立ち寄ることもあるだろう。その時は顔を見に行くのも良いかもしれない。

「リム様」

「わかつている。そろそろ行こうか」

促す声にリムは頷いた。未練はないとはいえ、あまり長居をしては感慨に囚われてしまいそうだ。

最初はどこへ行こうか。海の果てを目指してみるのも面白いかも知れない。友と従兄と三人で。きっと退屈しない旅になるだろう。歩きだそうとして、最後にもう一度だけ振り返る。

朝日に輝くイーロス——愛しい者達が住まう街。

いつかこの光景を懐かしさで眺める日がくるかもしれない。

「その時まで暫しの別れだ」

だれにともなく呟いて、リムは深紅の双眸で再び空を仰いだ。

澄み切った、青く広い空だった。

終章 空は青く（後書き）

このお話は、これにて完結いたしました。

最後まで読んでいただきありがとうございます！

お気軽に感想を聞かせていただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1314b/>

暁の使者

2010年10月8日13時46分発行